
Unicorn **幻想の旅**

城宮 遊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Unicorn 幻想の旅

【Nコード】

N7331U

【作者名】

城宮 遊

【あらすじ】

幻想世界。かつては、大戦争が起きて、畑があつた地は荒れ果て、人々は貧困や飢饉に苦しみ、すべてを失つたどうしようもない世界だった。そこで残った人々は、まだ地上に現れていなかった幻獣なら世界を救ってくれるだろうと、必死で願ひ続けた。その結果、幻獣が本当に現れたので、住民たちはこの世界を「幻想世界」と呼ぶようになった。

そんな、人と幻獣が交錯する世界……。

破滅を呼ぶ『混沌の時期』が訪れた。それを阻止するための勇者

に、ちよっぴり気弱な少年、ジャッキーが選ばれる。果たしてジャッキーは、世界を救うことができるのか？

ジャッキーと仲間たちが繰り広げる、魔法の冒険ファンタジーストーリー。

第一章 混沌

目の前に広がる広大な草原。緑の小さなカーペットが幾枚にも重ねられていたようで、鮮やかな色合いを生み出している。さわやかな風は、心の中の暗雲をすべて吹き飛ばしてしまうほど気持ちがいい。空は快晴。少年ジャッキーはその空を見上げながら、深呼吸をした。

このユニコーン農場は小高い丘に位置するため、眼下にあるダフタウンという街を一望できる。かなりにぎわっているようで、大勢の人がごった返しているのが肉眼でも見て取れた。

幻想世界。それは魔法の世界であり、科学文明の魔手はまだこの世界を襲ってはいない。人々の魔力、そして『幻想』の力でこの世界は成り立っている。その為活気あふれて、なおかつ心優しい人が多いというのが特徴だ。

一方で、魔法を悪用して犯罪に使う者も、少数ながら現れた。またこの世界では、現実世界でいう『創造上の生き物』を含む『幻想生物』が住んでいるため、その生き物たちを魔法で操ろうとする者たちもいる。

ジャッキーはユニコーン農場の一人息子。歳は15歳である。少し茶色がかかった髪に、端正な顔立ち。まっすぐに大きな瞳。まだ“男らしい”とは言えない未熟な肩が、少年っぽさを醸し出していた。

父親のクラム、母親のメリーがこの農場を経営していた。ユニコーン農場というのは、ユニコーンを保護し育てて、その力を利用して農業を行うというものである。ジャッキーもまた、家業を手伝っていた。

ジャッキーは、今混沌の時期を迎え不可解な行動をとるユニコーンたちに苦戦していた。

「ほらユニコーン、エサだよ。お食べ」

しかし、ユニコーンたちはいつもはたくさん食べるエサには見向きもしなかった。

「おかしいなあ」

そこへメリーがやってきた。

「どう？ エサは？」

「それが全然……」

その時、「ウイング」と言う名前のユニコーンが、ジャッキーに向かって突進してきた。

「ジャッキー危ない！」

メリーが嘆くような声で言ったが、時すでに遅し。ジャッキーの意識はもうすでになかった。

そのころ、幻想世界上空では強大な力が生まれていた。

一つの小さな黒い点が現れる。そして数秒後、その点から雷をまとった黒雲が現れた。黒雲は静かな夜のように不気味な黒を帯びていて、瞬く間に力を吸収し、大きくなっていく雲は触手のようにも見えた。全部が黒と言うわけではなく、ところどころ細長い白い筋が見える。雷だ。その雷撃は地上に落ちるわけでもなく、生き物のように黒雲の中をうごめくだけだった。

白い筋から放たれる電気は、やがて黒い雲の成長のための力として、吸収された。吸収されているとはいえ、雷は減るところか、次第に増大し、激しさも増していく。そこからも、黒雲の力の強さがうかがえた。

ふと、黒雲から黒い霧のようなものが出現する。霧はしばらくちよこちよことそのあたりを動き回っていたが、やがて目標を見つけたかのように、素早く、まっすぐに飛んで行った。

黒い霧は一人の少年にまとわりついた。少年は激しく抵抗したが、それは時間と労力の無駄にすぎなかった。少年は力なく膝をついた。そして酸性雨に溶かされた石像のようにぐったりと、ただ目の前の草原を見つめていた。その眼の焦点は定まっていない。

ちょうどその時、少年の目の前に一筋の光が現れた。その光は糸のように細長いものだったが、やがて人の形になっていく。それと反比例するように、光の強さはどんどん弱まっていき、ついにもう一人の少年となった。

「アルミス？ ……アルミスじゃないか！」

「……ああ、ジャッキーか。久しぶりだな」

黒い霧にまとわりつかれ、生気をなくしてしまった少年　アルミスは、幼いころジャッキーのユニコーン農場をよく訪れていた。アルミスが引越してしまっからはお互い会う機会などなかったが、まさかこんな形で再会を果たすとは、二人ともびっくりだ。特にジャッキーは、生命の危機という魔物に取り込まれ、意識不明となっていた中での出来事だったため、状況をうまく呑み込むことができなくなっていた。

「アルミス！ どうしたんだ！」

「実はな……」

アルミスの声はすすめの涙より小さく細く、もはや風前の灯だ。

「ジャッキーもいざれ知ることになると思うんだけど、僕はもうお父さんから教えられたんだ。この世界に『混沌の時期』がもうじき訪れるんだ。上空に黒雲が広がり、世界は混沌に陥り、やがて破滅を呼ぶ。黒雲は人の心をむしばみ、黒雲にやられた人は、不可解な行動をとる。『勇者』に選ばれた人が『ドラゴンのしずく』を見つめることができれば、救われるんだけどね。勇者は他人に『自分は勇者だ』ということを伝えたりとかしたらダメなんだよ。そしていま僕は、その黒雲の一部にやられてしまった……」

「じゃ、僕がお前をすくう！」

「無茶だよ……ジャッキー」

アルミスがそう言うと、ジャッキーはふたたび気を失った。

目を覚ますと、ジャッキーは光の中にいた。先ほどから状況が目まぐるしく変わり、現実と夢の区別もつかなくなっている。頭の中はぐしゃぐしゃな机のようだ。

「ジャッキーよ。お前は勇者に選ばれた」

天の声が聞こえた。気が付くとそこにはウイングもいる。

「ウイングにまたがり、ドラゴンのしずくを手に入れるのだ。過酷な試練を乗り越える。お前は幻想世界の救世主なのだから」

一瞬、実感がわかなかつた。自分が、幻想世界を背負う……。

まさか自分が選ばれるなんて思っていなかつたジャッキーは、戸惑いを感じた。不安を感じた。その責任は、まだ若く、未熟で、非力なジャッキーには重すぎたのだ。そして、ジャッキーは幻想世界の神を責めた。なぜ、僕なんかを選んだ……？ こんなんじゃ、幻想世界を破滅させるようなものじゃないか。神様は、世界を裏切つたのか……？

しかし、天の声は続けた。

「そんなお前に、『一角獣の杖』を与える。魔法を極めて、困難を乗り越える。いざ行け！」

一角獣の杖は、立派なユニコーンをほうふつとさせるものだった。気づくとそこは、もとのユニコーン農場だった。

「というわけだ。僕は普通に旅に出て、世間のいろんなものを見てくるんだ。いいだろ？」

ジャッキーは両親に頼んだ。自分が勇者であることは伏せておいて。

「でも、いまは混沌の時期よ。危険じゃない？」

「大丈夫だよ。勇者が食い止めてくれる」

実は自分が勇者だということを考えると、頭が痛くなりそうだった。だから今は、そのことをあまり考えたくなかった。

メリーは、話をクラムに振った。

「どう？ あなた、ジャツキーの願いだし……」

「よし分かった。いいだろう。その代り帰ってきたら絶対にユニコーン農場を継ぐんだぞ」

「分かってるって」

ジャツキーはウイングにまたがった。

「行ってきます。そして、絶対に……絶対に帰ってくるよ」

ジャツキーは必死に涙をこらえた。今は……涙を見せるときじゃない。

黒雲に侵されたアルミスのために。そしてこの世界のために。

第一章 混沌（後書き）

設定のようなものが長くなって、展開が速すぎますね……すいません。

第二章 皇都エメラルド（前書き）

戦いのシーン、早く終わっちゃいました……。。

第二章 皇都エメラルド

ジャッキーが最初にやってきたのは、皇都エメラルドである。エメラルドは、ダフタウンを抜けてすぐのところにある。ここには何か、旅の手がかりがありそうだ。これはジャッキーの直感だった。

エメラルドの市場は混雑していた。エメラルドは皇都であるため、たくさんものが流通する。道は広いが、何せたくさん人がこつた返しているため、人々は背中をダンゴムシのように丸めて移動しなくてはならないのだった。ジャッキーはウイングにまたがりながら、左右を見渡した。別に何か買おうなんて思っていなかったが、色々なものを見ることで、世界を知れると思ったからだ。すると、ジャッキーの耳へ情報が舞い込んできた。

「おい、知ってるか？ 今日の昼過ぎから、中央闘技場で格闘者・ゴツツとグリフォンとの、闘いがあるらしいぜ」

「なに！ それは本当か？」

「ああ、魔法はない。剣と拳だけの真剣勝負さ」

それを聞いて、ジャッキーはがっかりした。本物の攻撃魔法を見なかったのだ。けれどまあ、闘いの雰囲気を知るのは悪くない。さつそく行ってみることにした。

中央闘技場の近くには、闘いを一目見ようとたくさんの人が詰めかけていた。あまり並んでいるので、イライラして暴徒化する者もいる。警備員が近寄っても、その男は全く反省しない。世の中には、悪い奴がいる。気を付けなければ。

ジャッキーは何とか中に入れた。ウイングから降りて、闘技場の真ん中を見つめる。司会者が出てきた。

「レディース・アンド・ジェントルマン！ 皆様、今日は中央闘技場へようこそ。これから始まるのは、まさに世紀の大格闘スーパーバトル！ まずは挑戦者チャレンジャー。不屈のファイター・ゴッツだ！」

司会者の掛け声とともに、大男が出てきた。一同から歓声が上が。まるで闘技場全体が揺れているかのようだ。

大男……ゴッツは、手足がとにかく太い。身長も2メートルを優に超し、実にジャッキーの二倍の大きさはあるだろう。ゴッツは剣を引き抜き、さあいつでもかかってこい、と言わんばかりに振り回した。見かけによらず試合巧者なのか。それともただの筋肉馬鹿か。いずれにせよ、ジャッキーはこの大男の戦いぶりが楽しみだった。

「対するは、顔は鳥、しかし胴体は獣。勇猛果敢、という言葉を思い出させるような立派な羽をもつ、幻想生物……グリフォンだ！」

グリフォンが出てきた。ものすごい形相で、ゴッツを威嚇している。

しかしゴッツは逆に闘志を燃やしているようだ。おびえている様子などひとかけらもない。

「レディー……ファイト！」

その瞬間、耳をつんざくほどの歓声が闘技場にこだました。大勢の人々の叫び声は、競技場の中を何度もしつこく往復するようで、ジャッキーは思わず耳をふさいでしまった。横目でウイングを見ると、やはりウイングも顔をしかめている。

グリフォンが先手を打ち、くちばしでゴッツを攻撃する。ゴッツはその猛攻を剣で振り払い、剣を持っていないほうの手でグリフォンを殴りつけた。グリフォンはよろめき、二、三步後退した。また歓声が上がった。もうどうにでもなれ、とジャッキーは思った。まるで観客こいづらは、もう観客なんかじゃない。狂気の集団だ。

グリフォンは今の一撃で完全に怒ったらしい。堅い鎧のような胴体をあらわにし、ゴッツに突進した。ゴッツも何とか剣を立てて応戦しようとしたが、何せパワーが違いすぎる。これだと、猛スピードで走ってくる電車の前に立っているようなものだ。跳ね飛ばされ

てしまった。なおもグリフォンは追撃に移る。ゴッツはすぐに起き上がり、グリフォンの首をアッパー気味にパンチした。巨体が宙を舞う。ゴッツはとどめの一撃として、剣を振り下ろした。その瞬間、大歓声が聞こえる前にジャッキーはまた耳をふさいだ。

あの激戦の興奮は、すぐには冷めない。闘技場の外に出ても、まだ混雑していて狂気の集団が多数いた。沸騰したお湯が入ったやかんのようだ。

ダメだ。通れない……。

ウイングの前を、興奮している男たちが通りすぎようとした。それはあまりに突然のことだった。いくら幻想生物といえども、突然のことには反応できない。男たちにぶつかってしまった。その衝撃で、ジャッキーがバランスを崩した。急いで手綱をつかもうとしたが、重力には逆らえない。落馬してしまった。

「ウイング！」

名前を呼んだが、ウイングはジャッキーの前を通り過ぎる大勢の人に隠れて見えない。いや、もう大勢の人の波に流されてしまったのかもしれない。ウイングの鳴き声も、周りがるさすぎてかき消されてしまった。

はっ、と我に返ると、ジャッキーの周りに全身黒づくめの人たちが何人かいるではないか。嫌な予感がした。悪い人たちかもしれない。

「おい、こいつ、高く売れんじゃねーのか？」

「確かに若いし、労働させる価値はあるな。言うこともちゃんと聞きそうだし」

「よし決めた。この利口そうな少年を連れてこよう」

意味不明の会話だ。

「ちよっと、あなたたちは……」

言い終わる前に、ジャッキーの目の前にはナイフがあった。
「おとなしくついて来い。さすれば命だけは助けてやる。」
次の瞬間、何も見えなくなり、手足の自由も奪われた。

第二章 皇都エメラルド（後書き）

なんかいきなりヤバい？ 次話、新キャラ登場です。

第三章 地下倉庫の中で（前書き）

新キャラ登場です。

第三章 地下倉庫の中で

ジャッキーは、倉庫のようなところに閉じ込められた。そこには段ボールが山積みになって置かれている。ジャッキーが手を縛っている縄をほどこうとすると、すぐにほりりが立つ。と言うことは、あまり使われていない場所なのだろうか。

ジャッキーは不安になってきた。もともと暗闇は苦手だったが、なによりこれからどうなってしまうのか、と言うことを考えると、さらに怖くなる。墨をいくら流し込んでもまだ足りないくらい真っ暗な場所に、輪郭だけばやけて見える段ボールは、静かに息をひそめている魔物にも見える。

あいつらは、ジャッキーを売るつもりなのだろうか。もしそうなら、ジャッキーはどこかに売られて、奴隷として働かされることになる。そうなってしまうたら、旅を続けることはまず不可能だ。

あるいは、このまま殺されてしまうのか。ではなぜジャッキーという、何の罪もない人を殺す？

あいつらは何の目的で、ジャッキーを捕らえたのだろうか。宗教団体？ 人さらい？ 闇企業？ ……それとも、この『混沌の時期』が訪れたことにより、暴徒化した普通の集団？ どちらにしる、答えは見つからなかった。

そしてウイングはどこに行っただろうか？ 無事なのか？ 分からないことが多すぎて、未熟なジャッキーにはそれらのことをすべて解決に導くことなんてできやしなかった。絶望を覚えた。

ふと、この倉庫にウイングがいるかもしれないと思って顔を上げた。……すると、なにやら暗闇の中をもぞもぞと動く影がある。一瞬ウイングかな、とも思ったが、全く違うシルエットだった。

人だ。

恐怖心が風船のように膨れ上がり、心臓が破裂しそうになった。それでも好奇心旺盛なジャッキーは、その人影に、床を這うようにして近づいた。音をたてないようにしたかったが、体がたたと震える。あつという間にその影の近くまで来た。ジャッキーが「すみません……」と声を出そうとした瞬間　　。影が振り向いた。

ジャッキーは思わず「わっ」と声を出して後方に飛びのいた。その人は「なんだ、ただの坊主^{ガキ}か……」と声を出した。その人は凶体が大きくて、怖そうだったがその体からは想像もできないほどに優しい声を出した。

「あなたは？」

ジャッキーは震えながらも声を振り絞って言った。その人はこう答えた。

「……俺の名はマッツ。木工職人さ。だが、息子を家に残したままだったのに、俺は謎の黒い服を着た人物につかまった」

「じゃ、僕と同じだ！」

マッツはぼさぼさな髪に、かなり濃い無精ひげが印象的だった。ジャッキーの心に、わずかな希望が見えた。

「坊主、お前もか……。そっぴやお前さん、名前は？」

「僕はジャッキー。旅をしています」

勇者であることは、やはり伏せておいた。マッツは首を少ししかしげた。このご時世に、旅をする人はありえないからだ。ジャッキーは一瞬ドキッとしたが、マッツはそのことには深く触れなかった。ジャッキーは安心した。

「あの人たち、どうして罪のない僕たちをさらったんですか？ ……

…もしかして、殺されちゃう？」

マッツは首を振った。

「あいつらの目的は、俺らを高値で売り飛ばすことだ。つまり人身

「売買さ」

「じゃあ、『混沌の時期』との関連性は？」

「おそらくない。あいつらは闇企業かなんかだろう」

人身売買。この世界では法律により禁じられていたが、まさか本当に実行する者が現れたとは……。

「ジャッキー、お前はと思う？」

今度はマッツが問いかける。

「僕は、マッツさんの言うとおりでと思います。……でも、『混沌の時期』とも関係はあるんだと思います。『混沌の時期』は、人の心も乱します。だからこの企業は、今だからこそ悪いことをして、『混沌の時期』の恐怖をごまかそうとしているんじゃないですか？」

これは、ジャッキーが勇者の視点から考えた意見である。

「なるほどな」

マッツも納得してくれたようだ。しばらく沈黙が続いた。

「マッツさん、あなたはここから出られず、売買されてもいいのですか？」

マッツはとんでもない、と言う顔をした。

「そんなこと、あるわけねえだろう。馬鹿なことを聞くな」

マッツがきつく答えたので、ジャッキーは一瞬だけひるんだが、気を取り直してあることを持ちかけた。

「マッツさん。それなら、僕と二人で協力して、ここから脱出しません？」

「……まさかそんなことを言ってくれるとは。……ジャッキー、そこに箱がある。それを開けて、ナイフで俺の縄を切ってくれ」

マッツはそっぽを向いてしまったが、その声は嬉しそうだった。

ジャッキーは早速床を這うように進み、箱を足の指で器用に開けた。そしてナイフを口にくわえて、マッツの縄を切った。

「ありがとよ。次はお前の番だ」

マッツも、大きな体からは想像できないほどの器用さを見せて縄を切った。マッツは箱を抱えながら言った。

「はしごから脱出する。見張り番はいねえか？」

ジャッキーははしごを少し上って、辺りを見回した。誰もいない。

「いないようです」

「そうか。なら行くぞ！」

二人ははしごを上っていった。

第三章 地下倉庫の中で（後書き）

次回、まさかの結末に？

第四章 月夜の脱出作戦（前書き）

シリアスなシーンです。

第四章 月夜の脱出作戦

「見張りはいないな。よし、脱出口を探そう」

その言葉は必要なかったかもしれない。間もなく、マッツが脱出口を見つけた。

「ほら、ここに窓がある。お前は何か乗り越えられるだろう。俺は……上れないからお前に引き上げてもらおう」

「えっ？」

ジャッキーはびつくりした様子でマッツを見た。

「いいから早く上がれ」

ジャッキーは驚くほどの身体能力で、あっという間に窓のところまで上った。まるで体操選手のような軽い身のこなしである。そして外に降りようとしたが、そこでマッツに呼び止められた。

「馬鹿！ 俺を置いてく気か？」

「あっ、そうだった。……で、どうすればいいんでしょうか？」

ジャッキーは早口で言った。早くおりたかったからだ。なぜならば、今ジャッキーが乗っているのは窓のレール部分、つまり足場が悪いところだからだ。いくら身体能力が高いジャッキーとて、狭い足場で長い時間バランスを保つ、というのは困難である。綱渡りのようなものだ。

マッツは、あの箱を取り出した。

「こいつの中に、ロープが入っている。それで引き上げてくれ」

ジャッキーは、とんでもない、と言う顔をした。

「いや、無理ですよ！ 僕の手じゃ無理です！」

「大丈夫だ。お前ならできる」

ジャッキーにロープが渡った。ジャッキーはそれを、近くにあった木に巻きつけて固定した。

ジャッキーは渾身の力でロープをで引き上げた。たいして暑くもないのに、体中から汗が噴き出してくる。すぐに手は汗でびしょび

しよになり、ロープが、手の中で踊るように滑る。ジャッキーは、もうどうにでもなれと思って、窓から身を乗り出すようにロープを引っ張った。その引っ張り方があまりに乱雑だったために、マッツは引き上げられると同時に、窓枠に足をぶつけてしまう。「ガンッ！」という嫌な音がした。

「やばい！　すぐに隠れなきゃ！」

ジャッキーとマッツは、窓から飛び降り、その近くにあった物置の影に身をひそめた。すぐに見張り番がやってきて、さっきまで二人がいたところを探した。

「あれ？　あの二人がいねえぞ！」

「探せ！　まだ遠くには行ってないはずだ！」

すぐに、黒い服の軍団がそのあたりを手当たり次第に搜索する。

二人のすぐそばを足音が通り過ぎていくたびに、心臓が高鳴ってその音が聞こえそうになる。マッツは、肩をすくめて、額に冷や汗を浮かべていた。こんなに情けないマッツは初めて見た。ジャッキーもそれにならうように、情けない声で言う。

「どうします、マッツさん。このままじゃ見つかるのは時間の問題ですよ」

マッツは少し考えてから言った。

「そうだな。こうなったらもう逃げるしかない。タイミングを見計らって、とにかく遠くへ行こう」

しかし、敵は大勢いる。一瞬のすきなどなかった。

この夜は、美しい月夜だった。月の光は、まるで太陽のようにまぶしく、明るかった。そしてその光が、物置の影に隠れているマッツを照らし出す。敵はそれを見逃してはくれなかった。

「いたぞ！」

大声が響いた。すぐに二人は飛び出して、走り出した。

マッツは、図体がでかい割には足が速い。そのマッツが、息を切らしながら言った。

「おい、このままじゃ体力が持たないぞ。何かいいアイデアはねえのか？」

「アイディアって……」

ジャッキーの頭に、ユニコーンの残像が映し出された。そうか！

「そうだ、ウイング！」

「ウイング？」

「僕、あいつらにつかまった時、ユニコーンのウイングとはぐれたんです。もしウイングもあいつらにつかまっていたのなら……もしかしらこの近くにいても」

追っ手はもうすぐそこまで迫っている。今は……わずかな可能性にかけるしかない。

「ウイングー！ ウイングー！」

頼むウイング。返事をしてくれ！

「ウイングー！」

ジャッキーの体力はもう限界が近い。それでも、あきらめずに最後の力を振り絞って叫んだ。

「ウイングー！」

その時、ジャッキーの耳にウイングの雄たけびが聞こえた……気がした。遠くのほうで、一角獣の特有の、美しいななきがぼんやりと奏でられ、ジャッキーの耳に届いたような気がしたのだ。

「どうした？」

マッツが声をかけた。ジャッキーは、思わず足を止めてしまった。それにつられて、マッツも足を止めてしまった。

「どうした？ あきらめたのか。ぐはは……これで終わりだ」

敵はもう目前まで迫っていた。そしてジャッキーはこの瞬間、足を止めたことを後悔した。目に絶望が見えた。

ウオオオオオオオオ！！

ウイングの雄たけびは、今度こそ、はっきりと聞こえた。それは、

力強く勇猛ながら、優しさや美しさも兼ね備えた、雄々しいものだった。

ウイングの角が宝石のように青白く光り、それに応えるように太く、長くなる。その輝きは、遠くからでも十分感じ取れるものだった。そして一目散に敵のなかに突っ込むと、鬼神のごとく角を振り回した。角の一振りで、ある者は喉笛から血しぶきを上げ、ある者は胸を引き裂かれて倒れる。ウイングの攻撃は激しいものでもあったが、しかし的確に相手の急所を狙っていた。

敵はウイングの角の一振りが終わった隙について攻撃しようとしてくる。が、ウイングは体勢を崩すことなく、一回の攻撃が終わっても体勢を低いままで保ち、追撃に移った。

このままではなすすべがないと判断した敵は、ようやく逃げ始めた。ウイングはその敵を無理に追いかけようとせず、角をもとに戻す。

マッツが驚いた表情で、「すげえ……これがユニコーンか」と言った。

「さあ、追っ手が来ないうちに早く逃げよう」

ウイングは、二人を乗せて一目散にかけていった。

第四章 月夜の脱出作戦（後書き）

次回、またまた新キャラ登場！

第五章 マッツとアックス

「さあ着いたぞ。ここが俺の家さ」

マッツの家もまた、ジャッキーの農場と同じように、小高い丘の上に立っていた。広々としており、開放感のある空間だ。その家の前に、少年が立っていた。どうやらマッツの息子らしい。

「お父さん、心配したよ！」

「ああ、今帰ったよ。紹介しよう、こいつがジャッキーだ。でもって、こっちはユニコーンのウイング」

その少年 マッツの息子は、ユニコーンを見るのが初めてらしく、珍しそうにウイングを見ていた。ウイングは笑いかける。

「こいつには助けられたよ」

マッツが、疲れたような顔をする。

「ジャッキー、よろしく。旅をしてるんだったら、しばらく俺ちにいなよ。ね、いいでしょ父さん？」

マッツはすぐにうなずいた。

「いいとも。ジャッキー、ゆっくりしていきなさい」

「そう言えば、自己紹介をしてなかったね。俺はアックス」

アックスは赤茶色の髪の毛に、マッツとは対照的な細長い顔立ち。水色の澄んだ水のような瞳が、貴族のようで本人の気の強さを物語っている。細身で長い足だが、肩はがっちりとしていて、鎧のようだった。

「アックスさんにマッツさん。あなた方は何の仕事をされてるんでしょうか？」

アックスに代わって、マッツが答えた。

「幻想植物の栽培と、その加工だ。いわゆる、『職人』ってやつ

だ

「マッツがあまりにも自信ありげに言ったので、アックスが「父さん……」とあきれている。」

「アックスさんのお母さんはどちらに？」

「どうせなら『マッツさんのお嫁さんはどちらに？』って聞いてほしかったなあ」などのんきなことを言っているマッツとは逆に、アックスは深刻な顔をした。

「実は、5年前に病気で亡くなった。母さんは、体が弱くて……俺を生んだ後は、毎日咳をしてた。で、5年前に心臓の発作を起こして、そのまま死んでいった」

アックスは悲しそうな声で続ける。

「その時、俺も母さんと一緒にいたんだけど、母さん以上に俺は混乱しちゃって、そのまま何もできなかった。つまり……俺がお母さんを殺したも同然なんだ」

よほど辛いのだろう。アックスの目には涙が浮かんだ。マッツが「馬鹿、お前のせいじゃない」と慰めている。ジャッキーは居心地が悪くなった。

「あの、僕まじいこと聞いちゃいましたか？」

「いや、いいんだ。……それで、俺は強くなるために魔法の道を選んだ。あの時俺は、蘇生法が使えればお母さんを救えた。だから、一人でも多く人を救いたかった」

「ちなみに俺は、魔法が使える」

真剣な話をしているところで、マッツがふざけて舌を出した。三人は笑いの渦に包まれた。

マッツもアックスも、すごく優しくいろいろなことを教えてくれた。ジャッキーも仕事を手伝った。仕事の内容は、まき割りや荷物運び、それに買い物などである。いつしかジャッキーは、旅のこ

とをすっかり忘れていた。

そのことを思い出させてくれたのは、アックスだった。ある日アックスは、ジャッキーにこう質問した。

「なあジャッキー。お前の旅の目的はなんだ？」

この一言で、ジャッキーはハツとした。自分の本当の目的は、こんなところでこの人たちと仲良く暮らすことじゃない。ドラゴンのしずくを探すことだ。まさか、「混沌の時期を終わらせるため、勇者に選ばれたからドラゴンのしずくを探しています」なんて言えないから、ここはごまかしておいた。もともとジャッキーはうそをつくのが嫌いだったが、仕方ない。軽くあしらうしかない。

「えっと……魔法の腕を磨き、幻想世界のさまざまなものを見てみることです」

「本当か？ 混沌の時期なのにな？」

アックスは予想以上に鋭く迫る。その視線と勢いは、猛獣の鋭利な牙のようだった。ジャッキーは焦ってしまった。

「こ、混沌の時期だからこそ、危険なものを乗り越えて成長したいからです」

アックスは声をあげて笑った。

「ジャッキー、お前は危険好きか？ それとも勇気があるって言ったほうがいいのか？ ……ま、いいや」

チャンスは今しかない。立ち去ろうとしたアックスに、ジャッキーは思い切ってお願いをした。

「あ、あの……アックスさん」

「何？ 俺に何か用？」

「アックスさん。魔法を教えてください」

アックスは少し驚いたようだ。

「唐突だなあ。いいよ。基本的な魔法を三つ教えてやる。とっておきのやつをな」

「本当？ やった！」

まず、勇者としての第一歩である。真剣にやらなければ。

「特訓を始める前に、杖を見せてもらおう」

ジャッキーが杖を差し出した。そしてアックスの手に渡った瞬間、アックスはバランスを崩して倒れこんだ。

「大丈夫ですか？」

アックスはよろめきながら立ち上がった。

「こ、この杖……すごい魔力を感じるよ。普通の杖とは比べ物にならないくらい」

一角獣の杖。さすがは神様から受け取っただけのことはあるかもしれない。すごい力が秘められているのかもしれない。そう思うと、ジャッキーは嬉しくなった。

「ユニコーンの角にたてがみ、それに十字架草がふくまれているな」

「十字架草？」

「知らないの？ ユニコーンが好む草だ。神聖な草としてあがめられているが、毒があつてユニコーン以外の生物は食べられない」
杖が返された。

「準備はいいか？ よし、いくぞ！」

第五章 マッツとアクセス（後書き）

なんか、ハリポタ的なシーンが……。

第六章 特訓

「ジャッキー、行くぞ。まずは物体移動魔法からだ」

「物体移動魔法？」

「ああ、この魔法は、生物以外のさほど大きくない物体を動かすことができる。もちろん、家とかは無理だけだな」

アックスは自分の杖を取り出し、「行くぞ」と声をかけた。前方には椅子がある。

すると、すぐに椅子がアックスの杖の動きに合わせて持ち上がった。まるで見えない糸で引っ張られているかのように。アックスの杖が右に動けば右に、左に動けば左に、椅子も動く。そして、何事もなかったかのように椅子を下した。

「どうだ？」

「すごいです！」

「これくらいですごいなんて言われてもなあ」

アックスは、大したことない、と言わんばかりの顔だ。しかし、ジャッキーは興奮していた。

「よし、やってみる」

ジャッキーは杖先を椅子に向けた。そして椅子に全神経を集中させた。杖を上を持っていく。すると椅子も持ち上がった。……しかし、それもつかの間。すぐに椅子は地面に落ちてしまった。魔力と重力を天秤にかけ、重力のほうに傾いてしまったようだ。

「あれ？」

「大事なものは椅子に向かって電波を出すようにすることだ。もう一回やってみる」

アックスの助言を頭に入れて、ジャッキーは気を取り直してもう一度杖先を椅子に向けた。電波を出すように……すると、今度はうまくいった。ジャッキーの思い通りに、椅子が持ち上がったのだ。

一方のアックスは驚いたようだ。

「すげえなあ。やっぱこの杖の魔力がすごい。でも、それを使いこなせるジャツキーはもつとすごい」

「ありがとうございます！」

「よし。次は、光弾だ。これは便利な魔法だぞ。初歩的な攻撃魔法だ」

今度は、リンゴの木にアックスは狙いを定めた。そして「ライト・イン！」と唱えた。すると杖先から山にゴロゴロ転がっている岩のような大きさの光の球が、まばゆい閃光を惜しみなく辺り一面にまき散らせながら発射されて、リンゴの木を直撃した。ぼてぼてと、リンゴが一気に五個落ちる。

「すごい！ 一気に五個も」

「すごくないってば。プロだったら十個は落とす」

早速ジャツキーもやってみた。リンゴの木に杖先を向け、「ライト・イン！」と唱える。しかし、ジャツキーの杖先から出たものは一筋の煙だけだった。

「おかしいなあ。すさまじいほどの魔力を感じるんだが……どうやら、その魔力が杖の中にとどまったままみたいだ。力を開放する感じでもう一回やってみる。ためらう必要はない。思いっきり」

力を開放する。この杖にそんな潜在能力があるのなら、ジャツキーは自分ももつとしっかりしなくちゃな、と思う。

「ライト・イン！」

すると、光の球が杖の先に集中し、矢のように放たれた。ジャツキーの光弾はリンゴの木を倒してしまった。

「すげえ。まさか『ライト・イン』でここまでの威力が出るとは……」

アックスは唖然がしている。と言うことは、普通の杖にはない魔力が、この杖には秘められているのだろう。

「まあいい。魔力を使いすぎないようにしよう。最後は、防御魔法だ」

アックスは、「ちょっと俺に向かって光弾を撃ってみる」とジャ

ツキーに命じた。ジャツキーはためらわずに本気で光弾を撃った。撃った直後、ジャツキーは後悔した。すさまじい威力の光弾が、アックスを襲うと思ったからだ。太陽のように明るく、大きなものを食らったら、アックスとて無傷では済まされない。しかし、それは間違いだった。アックスは平然とした顔でそこに立っていた。

「ふう。危なかった」

「アックスさん、無事だったんですね」

ジャツキーは安心した。

「今のが盾の魔法だ。やってみる、俺が光弾を撃つから」

アックスがジャツキーに杖を向ける。ジャツキーはこれほどになり緊張感と、恐怖に襲われた。アックスが、強者ということからだろうか。

アックスの杖から光弾が放たれる。ジャツキーは、杖を突きだし、すると、ジャツキーの前に盾が現れる。その盾は光弾をはね返した。

「うわ、あぶねえ！」

アックスはあわてている。

「お前のシールド、俺の光弾をそのままの威力で返しやがった！」

「やっぱりこの杖は、普通の杖と違うんですか？」

アックスは、やっと落ち着きを取り戻した。

「おそろくな。ふつう、ユニコーンの体と十字架草を杖に配合しようとしても、うまくできない。ところがこの杖は、それをうまく調和させている。だから莫大な魔力が……」

アックスがそう言いかけたところで、突然二人の目の前に黒マントの集団が現れた。光弾のまだ消えていなかった光が、夜の闇よりも黒いマントにより掻き消される。そう、あの月夜の……。

「こんな所に居やがったか。捕まえる！」

アックスは面倒くさそうな顔をしている。

「仕方ない。ジャツキー、俺と二人で戦おう！」

「はい！」

ジャッキーは、緊張と言ふよりはわくわくしていた。

第七章 タッグバトル(前書き)

初めての戦闘シーンです。分かりにくければ感想に書いてください。

第七章 タッグバトル

アックスは、雷を発射した。黄色い閃光が空中を走り、五人組の黒マンントの集団に襲いかかる。まるで地を駆けるチーターのようだ。慌ててそのうちの一人が、炎を出して食い止めようとしたが、いかんせん魔力が違いすぎる。とてもアックスの魔法は、一人では受け止めきれない。結局、アックス一人で四人を相手にする形になった。

ジャッキーは残りの一人と対峙していた。にらみ合いが続いていたが、いきなり相手は杖をふるって、黒い魔弾を撃ってきた。ジャッキーは光弾で対抗しようとしたが、とても間に合わない。やむおえずシールドではね返した。

相手は「ちっ」と舌打ちしながらも、次の呪文を唱え始める。そしてジャッキーのほうに杖を突きだすと、ジャッキーの足もとから黒い縄が出現した。慌てて逃げようとするが、黒い縄はするするとジャッキーの足、そして手の自由を奪っていく。ジャッキーは身動きが取れなくなった。

相手は「ケケケ……」と笑っている。ジャッキーは恨めし気に睨み付けた。

「ブラック・スネークス！」

見ると、縄の先端が蛇の頭のようになっていた。目は血走って赤く光っており、口からは細い舌を出している。

ヤバい！

そう思った瞬間、ジャッキーの頬に冷たい感覚が走った。背筋が凍りつく。目の前では、あの蛇が透明な結晶に貫かれ、ヘビは力なく地面に落ちていった。アックスの氷だ。

「大丈夫か？」

アックスは一旦雷撃を放つのをやめ、ジャッキーの援護に回った。ジャッキーは「はい」と答えた。

一方、攻撃がやんだために黒マントの集団は全員自由となっていた。すぐさま、相手は黒い衝撃波をこちらに打ち込む。それが先ほどの蛇と重なり、ジャッキーは怖気づいてしまった。

その間に、アックスは光の衝撃波で対抗していた。アックスからかなり離れた上空で、二つの衝撃波がぶつかる。その衝撃波は、空中でバチバチと火花を散らし、花火のような音を立てながら爆発を起こした。その爆発の激しさからして、二つの衝撃波の威力がうかがえる。アックスは「今だ、攻撃しろ！」と命じた。

ジャッキーはそれに従い、相手の中心に杖を定めた。そして光弾を放とうとしたが、力みすぎたのか、杖の先から出たものはやっぱり煙だけ。

「杖斬り！」

相手は動揺しているジャッキーに、呪いを打ち込んだ。さらにジャッキーは慌ててしまい、いつもの落ち着きを取り戻せない。いつものジャッキーがどこかに飛んで行っているようだった。

「^{返せ}リバーズ！」

杖斬りの衝撃波に向かって、アックスはそう叫んだ。杖斬りはアックスの魔法に当たって、そのまま術者のもとに返っていった。術者の杖はばらばらに砕かれた。残る敵は四人。

「しまった！」

アックスは光の衝撃波を放つのをやめていたため、相手の衝撃波はアックスめがけて洪水のように降ってきた。シールドを張るにももう遅い。アックスの目に絶望の色が浮かんだ。

「まだまだだ！」

しかしジャッキーだけはあきらめていなかった。シールドの呪文を出す。すると一角獣の杖から放たれたシールドは、どんどん大きくなって相手の衝撃波をぎりぎりではじき返した。

「ありがとう、ジャッキー」

「助けてもらったお礼です！」

振り向くと、敵の四人は接近戦に持ち込もうと、こちらに走り出していた。アックスも応戦する。

「ネット！」

アックスの杖先から網が出現した。その網はこちらに近づいていた四人に襲いかかった。蜘蛛の巣のような網目は細かく、すぐには抜け出せそうにない。が、一人だけはうまくかわしてしまった。ジャッキーはそいつに杖を向けた。

「下がってる、そいつは俺がやる！」

アックスが鬼のような形相で前に出てきた。そして、杖先から光の衝撃波を連発した。それはまるで猛獣のように杖を振り回し、絶えず杖先から衝撃波が放たれる。アックスの衝撃波は、確実かつ的確に的を捕らえていた。だが、負けじと相手もギリギリのところまで防いでいて、粘り強く戦っていた。

「ちくしょう！ こうなつたら……大地咆哮！」

その瞬間、アックスの敵の足もとに地割れが起こり、相手はバランスを崩した。アックスはその一瞬のすきを見逃さない。アックスの衝撃波は、確実に相手を捕らえていた。ちょうどその時、ネットは相手の呪文により消え去った。

「やばいな……魔力が。こうなつたらジャッキー、俺が相手をひきつけるから、お前が決めてくれ」

そう言い終わる前に、アックスは相手に向かって突進し始めた。相手三人の杖が、アックスに向けられた。その眼には殺気がみなぎっていた。相手はアックスを本気で殺すつもりだ。

だが、相手が呪文を唱え終わる前に、アックスは呪文を唱え終わっていた。

「疾風の神よ。ここに降臨し、邪悪な心を吹き飛ばし給え。龍の息

吹よ、ここに降り立ち、強き風を生み出してここに天罰を下し給え。
トルネード
竜巻！」

巨大な風の壁が生み出された。それは高層ビルも包み込んでしま

いそうな勢いだっただ。しかし、相手も雷撃を生み出し、その壁の甘いところを狙った。雷撃は壁を少しずつ貫き、アックスに向かって進む。壁にひびが入っていくようだ。

アックスの顔がゆがんだ。雷撃はもうすぐそこだ。あと5秒も持たないだろう。

「ライト・イイイイイイーン！」

ジャッキーが光弾を放った。まるで太陽が爆発したような閃光が、一角獣の杖先から放たれた。竜巻に集中していた三人にそれを食い止めるすべはなく、光弾をもろに食らって吹っ飛ばされた。術者の魔力が切れたため、アックスを狙っていた雷撃はすんでのとこで止まる。

「ジャッキー、よくやった」

「いいえ、アックスさんのおかげですよ」

こうして、ジャッキーの修業は終わった。

第八章 再会

「ジャッキー、俺とハルドベルクまで買い物に行かないか？」

「へ？」

マッツが提案した。

「ハルドベルクは、特にものが多く流通してて、いいところだからな。旅をしているジャッキーに見てもらいたくて。……あ、それにお前のウイングにも乗ってみたかったし」

マッツは頭をかく。

「あ、はい。いいですよ」

「と言うわけだ。アックス、留守番は頼んだ」

「分かったよ、お父さん。ジャッキー、気を付けて」

アックスは、昨日のバトルの時とは打って変わって、今日は優しい顔つきに戻っている。

「分かりました。行ってきます！」

ウイングは地面を力強くけった。そして、まるでそこに地面があるのかと思わせるくらい美しく、空をかけていった。

「ついたぞ。ハルドベルクだ」

ハルドベルクは、あのエメラルドの市場よりも活気であふれていた。エメラルドほどではないものの、品ぞろえも安定している。この街には、メインストリート以外に大通りがなく、代わりに細い路地が多い。小さな迷路のようで、注意していないと迷子になりそうだ。

「よし、まずは食べ物を買おう」

マッツはとある露店の前までやってきた。その露店には、リンゴから珍しいフルーツ、さらには野菜まで幅広い分野の商品があった。色とりどりの虹のようだ。マッツは迷うことなく、小さい木の実は

袋いっぱいまで詰め込み、葉を食べる野菜は何枚も重ねて買っていたため、二人の両手はすぐに塞がってしまった。

「マッツさん。失礼ですが、あなた買い物へたですね。アックスさんを連れてきたほうがよかつたんじゃないですか」

「……………」

マッツはそっぽを向いて無視した。ジャッキーに弱点を突かれたことが、悔しいようだ。

それからマッツは、服屋でアックスのためのローブを買い、自分の魔法の勉強用に、魔法の書も購入した。そして、ウイング用に傷薬も買った。買い物はすべて済ませ、荷物も多くなってきたところでジャッキーがついに爆発した。

「マッツさん、もう帰りましょう」

ジャッキーは怒ったように言った。マッツも、ようやくあきらめたらしい。

「そうだな。もう荷物も多いし……………」

荷物が多くなったのはだれのせいだよ、と思いながら、ジャッキーはウイングにまたがろうとした。その時、大声が耳に入ってきた。「さあ、よつてらっしゃい見てらっしゃい。今日のお買い得は、この「天馬ペガサスの杖」。ペガサスの羽に尻尾の毛、それに十字架草。これはすごい魔力だよ。さあ、買った買った」

ジャッキーは、その杖の正体を確認しようと前に出た。すると、杖とは思えないほどぎこちない形をしている。しかも、その杖からは全く魔力を感じない。これは偽物だ。…………期待して損した。

ジャッキーはウイングのところに戻ろうとした。

ちょうどその時、あの天馬にせものの杖を買おうと、たくさんの人がなだれ込んできた。ジャッキーは押し流されて、細い路地に倒れこんだ。「そんな、私、お金なんて持ってないわ……………」

「ウソつくなよ。さっさと金出せ。そのほうが身のためだぜ?」

少女が、不良の集団にからまれている。これはさすがにまずい。助けなくては。

「ちょっと、あなたたち」

ジャッキーは大声を出したつもりだったが、緊張してほとんど声になっっていない。

「なんだお前。こいつを助けに来たのか？ 上等だ。やっちなえ」

敵は三人。杖を持っているから、おそらく魔法は使えるのだろう。敵は衝撃波を放ってきた。しかし、その衝撃波はあつけないほど弱く、ジャッキーも簡単にはね返すことができた。相手は、無駄だと知っておきながら衝撃波を連発する。きっとこれしか使えないのだろう。こつこつこのを「馬鹿の一つ覚え」というのだ。

ジャッキーは物体移動魔法を使い、そこにあつた太い木の枝で相手を殴りつけた。早くも決着はついた。

「なんだこいつ、めっちゃくちや強いぞ！ 逃げろ！」

不良どもは慌てて逃げていった。

「大丈夫かい？」

「はい。私、不用意にも杖を持ってきてなかった。……あ、あの、お名前は？」

ジャッキーはすっかり照れてしまった。

「名前を名乗れるほどの存在じゃないよ」

少女はなおも食い下がってくる。

「あなたは私を助けてくれた。今度またどこかで出会えたら、恩返しをしたいなって思うの……」

「ジャッキーだよ」

「ジャッキー、さん……？ まさか……」

少女の脳内で、ある光景がよみがえってきた。

この少女はジャッキーのユニコーン農場を訪ねたことがあったのだ。そして、このジャッキーに一目ぼれした。そして、それからそのままだったのだが、いつもジャスミンの心の隅にはジャッキーがいたのだ。

「ん？ どうかしたのか？」

「あ、いえいえ、なんでもありません。……ちなみに、私はジャスミン

ンです」

その時、マッツの声がした。

「ジャツキー！ ジャツキー！ どこだー？」

「あ、ごめんジャスミン。またどこかで出会えたらいいね」

そう言つて、ジャツキーは消えていった。

ジャスミンは、ふと自分の頬に手を当てて、そこが熱くなつていたのがわかった。ジャツキーと、もっと話したかった。その思いが胸を苦しくさせる。

『またどこかで出会えたらいいね』

果たして、これは現実になるのだろうか……。

第九章 ジャッキーの願い

ある曇りの日。特にすることもないのでジャッキーはウイングと散歩をしようと、外に出た。今日は天気が曇りと言うこともあつてか、空気がすつきりしない。呼吸で、上空の雲を吸い込んで心の中に広げてしまっているような感じた。

ふと空を見上げる。すると、上空には黒い雲が、渦を巻いているではないか。ジャッキーは、雷雲だと一瞬思った。

しかし、それは違う。あれは明らかに、雨や雷を生み出すような雲ではない。雰囲気が違うのである。もっと、空間を捻じ曲げるようなエネルギーを持っているような感じた。

『やっぱり』

ジャッキーの頭の中で、声が出た。ウイングかな、とも思ったが、ウイングはジャッキーに見つめられると、首をかしげた。

『混沌が進んでいるのだ』

空耳ではない。が、声の主が視界に入らない。

『黒い雲……闇が、この世界にどんだん広がってきているのだ。世界の破滅が、もうすでに始まっている』

ジャッキーが『勇者』であることを宣告された時と、同じ声だ。

ジャッキーはやっと思い出した。

『勇者ジャッキーよ。今旅に出る。混沌の時期を食い止めるのだ』

「でも、ドラゴンのしずくって、どこにあるのでしょうか？」

ジャッキーはささやくように尋ねた。しかし、返事がない。やはり、脳内の声、つまり実体のないものにしゃべっても無駄なのだろうか。

しばらくすると答えが返ってきた。

『分からない。それが分からないのだ』

「分からないって、この幻想世界は広いんですよ？ この広い世界の中をしらみつぶしに探したら、時間がないですよ」

『ヒントは……闇だ』

「闇？」

『そうだ。ドラゴンのしずくは、悪^{あく}しきものを好む。だから、闇に近づくのだ』

闇？ なぜ、混沌を止める重要なものが、闇を好むのだ？ 分からないことだらけである。

「とりあえず、闇のドラゴンを探せばいいんでしょうか？」

『……………』

それつきり、頭の中の声は消えてしまった。

はっと、ジャッキーは思い出した。

自分は勇者なんだ。

そうだ。こんなところで、もたもたしてる暇はなかったのだ。

だけれども、せっかく魔法を覚えてくれたアックスには、何も恩返しできていない。マッツは、救われたというよりは救ったほうだ。だがアックスには、散々助けられた。命まで……………。

ジャッキーはあることを思い付いた。

「……………と言うわけです。僕は旅に出なければ。もうすぐ混沌により、世界が破滅するかもしれません。だから、その前に少しでも幻想世界を旅してみたいんです」

マッツは腕組みをしている。

「そうか。さびしくなるな。まあ、お前の自由だけだな」

大きく伸びをして、マッツはその場から立ち上がって仕事に戻るうとした。それを、ジャッキーが呼び止める。

「あの、マッツさん」

「あん？」

「アックスさんと、一緒に旅がしたいんです」

静寂が訪れた。マッツは、目を大きく見開き、驚いたような表情

を見せた。いつもは穏やかな目が一瞬鬼のように怒ったような感じになり、マッツ以上にジャッキーが驚いた。そしてジャッキーは「やっぱり駄目だったか」とも思ったが、マッツの返答はその予想を覆っていた。

「あ、別にいいぞ。その前に、アックスの意見も聞いてみなきゃな……で、なんでだ？」

「実はですね……」

ジャッキーは、マッツにすべてを話した。ジャッキーがアックスに魔法を習ったこと、その魔法を使い、二人で敵と戦ったこと、そして、その魔法がハルドベルクで役に立ち、ジャスミンを救い出したこと。

「そんなことがあったのか。俺にも、先に話してくればよかったのに」

さびしそうな声を出しながら、マッツは足早に去っていった。そのさびしさは、アックスと別れるかもしれないと思ったからだろうか。それとも、ジャッキーはアックスと知らぬ間に友情を深めていたことだろうか。

この頃、ジャッキーはウイングが不可解な行動をとっているように見えた。エサを出しても食べなかつたり、ジャッキーとの散歩を嫌がったり、一日中寝ていたり。やっぱり、混沌の時期は進行しているのだろうか。ジャッキーは不安になった。

ウイングとは、一生一緒にいる運命にあるだろう。ジャッキーが最期を迎えるときまで。

だが、そのウイングが混沌の時期の影響でジャッキーと距離を置いてしまったら……。ジャッキーは、そう思うだけで身震いした。

「で、なんだい？ お父さん」

アックスは、これから大事な話をするというのにもかかわらずのんきだ。マッツは少し腹を立てた。その怒りを必死にこらえながら、声を絞る。

「じ、実はな……アックス……」

声が、震えている。弱い自分を、息子の前で見せたくない。そう思う気持ちだが、逆に空回りしてしまう。今度は自分に腹が立った。怒りが徐々に大きくなっていく。

「ジャツキーと、旅に出てみないか？」

第十章 本当の旅立ち

「ジャッキーと、旅に出てみないか？」

マッツの口から発せられた言葉で、アックスの目つきが変わった。

「お父さん、今なんて言った？」

「いや、ジャッキーがお前と一緒に旅に出たいって言ったんだ」

あのジャッキーが？

アックスは動揺を隠せない。

「お父さん。ちょっと待ってて。考えてくる」

アックスはそう言って席を外した。

隣の部屋に來ると、アックスは椅子に座って腕組みをした。

俺がジャッキーと旅……？

誘いがあったことは、素直にうれしい。だが、この旅には二つ問題がある。

一つは、混沌の時期が目前に迫っているということだ。ジャッキーとアックスが戦えば、アックスの勝ちは目に見えている。けれども、魔法こそ非力なジャッキーだが、同時に混沌の時期に旅に出るという度胸も併せ持っている。アックスに、そこまでの度胸はないむしろ、怖いのだ。アックスは、混沌の時期を恐れていた。だから、ジャッキーに迷惑をかけてしまうだけではないだろうか。魔法だけ強くて、心は弱いのはどうしようもない。結局、自分は堅い殻の中にこもった弱々しい人間なのだ。

もう一つは、マッツのことだ。アックスが旅に出れば、マッツは一人になる。アックスはマッツを支えるつかえ棒なのだ。それだけに、アックスの離脱は、マッツにとって精神的にも肉体的にも大きな損失であることが言える。だから、マッツを一人にするわけにはいかない。

ちくしょう！

アックスはジャツキーに好意を持っていた。どんくさい奴だが、それなりに根性もあるし、魔力もすさまじい。しかも、ジャツキーは亡くなった母親と重なる部分があるのだ。どっちも捨てられない。俺はどっちを選べばいいんだ！

アックスはテーブルをたたいた。木製のテーブルが悲鳴をあげている。今にも壊れそうだ。

そこへ、大きなその音にびっくりしたマツツが、心配になって入ってきた。

「アックス、どうした？」

「父さん。俺……俺、もしアックスと旅に出たら、お父さんが辛くならない？」

普段のアックスからは想像もできないほど、蚊の鳴くような小さな声だった。その姿は、必死に涙をこらえているようだった。

「大丈夫だ。俺はこの通り」

マツツは、格闘家のように太い腕をぶんぶん振り回した。

「だから、お前の好きな道を選べ。俺の心配はするな」

父とは、また会えるかもしれない。でも、ジャツキーとここで別れてしまったら、もう二度と会えないかもしれない。それだったら……。

「お父さん。俺、ジャツキーと旅に出るよ」

旅立ちの朝はすがすがしかった。心地よい風が顔をなげ、心を爽快にしてくれる。快晴で真っ青に染まった空とまぶしい太陽の光が、旅立つ二人を見送ってくれるようだった。

「ところでアックスさん。最初はどこに行くんですか？」

「ああ、そのことなんだが……」

アックスは地図を取り出しながら、言った。

「お前は魔法初心者だ。まずは修行にはもってこいの『妖怪の森』に行こうと思う。そこを抜ければ、グランドプリンス湖だ。そこを
目指そう」

さすがアックス。手抜きはない。

マッツから、アックスの旅立ちの決意が決まったことを報告されたジャッキーは、飛び上がって喜んだ。それだけうれしかったのだ。アックスは、命の恩人でもあり、師匠とも呼べる存在だ。その『師匠』と、一緒に旅ができるということは、ジャッキーにとって大きなプラスになる。

ジャッキーはウイングにも声をかけた。

「ウイング。これから大変になると思うけど、しっかり頼むぞ」

ウイングは聞いているのか聞いていないのか、前脚で首のあたりを掻いている。かゆいのだろうか。このウイングは、これはジャッキーが旅に出るからわかったことなのだが、完璧なほどにマイペースでのんびり屋だ。いや、黒マントの集団と戦った時や、人を乗せてる時などは真剣になるが、それ以外は人懐っこくて優しい表情になる。それもまた、眺めているとほのぼのとした気持ちになるからいいのだが。

マッツが出てきた。

「気を付けて行って来いよ。ジャッキー、アックスを頼んだ」

「いやいや。お世話になるのは僕のほうですよ」

ジャッキーは、とんでもないという顔をした。アックスは苦笑いを浮かべる。

「頑張つて。アックス、俺の心配はいらねえからな」

「それ何度も聞いた」

和やかな雰囲気の子の会話だ。とても別れ際だとは思えない。ジャッキーは、両親を思い出した。優しく、いい両親だった。しかし、もう会えないかもしれない……。そんな思いが頭をよぎったが、もう出発だ。深く考えている暇はなかった。

「ウイング、GO！」

ウイングがものすごいスピードで宙をかけていく。だんだんとマツツが遠ざかっていく。しかし、まだ大きく手を振っていることはわかった。

アックスは、照れているのか悲しいのか、そっぽを向いてしまっている。ジャッキーはそれを見て、思わず苦笑してしまった。

第十章 本当の旅立ち（後書き）

次回、新章です。

第十一章 ゴースト（前書き）

久しぶりの更新です。さりげなくバトルシーンを書きました。

第十一章 ゴースト

「不気味ですね、アックスさん。ここ、本当に格好の修業場なんですか？」

「……」

アックスは、黙りきってしまった。ウイングはそんなアックスをしり目に、あくびをしている。

妖怪の森は、名前からでも想像がつくが、不気味さはその想像を絶するほどだった。まず、森全体に黒い霧が絶え間なくかかっており、昼間でも闇夜のような、静けさと暗さが出ていた。さらに、年中足元には枯葉が敷き詰められ、辺りは静寂に包まれているため、歩くだけで不気味な笑い声が聞こえてくるようだ。さらには、道が整備されていないため、どこを歩いているか一向に見当がつかない。

「アックスさくん。もう帰りましょうよ……」

「……ウイング」

アックスは、ウイングなら脱出できるかと思った。しかし、ウイングは首をかしげただけ。わずかな希望は一瞬にして砕かれ、とうとう二人の心は折れそうになっていた。

その時、ガサガサという派手な音を立てながら、ジャッキーの前方の落ち葉が舞い上がった。ジャッキーは、驚いて身震いした。声も震えている。

「ア、アックスさん……今、魔法使いました？」

「いや」

アックスは、なぜかいたって冷静である。

しばらく待ってみると、もう一回さつきと同じような現象が起きた。その瞬間、アックスは大きく目を見開いた。

「ジャッキー！ 来るぞ、杖を構えろ！」

ジャッキーは、もう何が何だか分からなくなってしまった。言われた通りに杖を構えると、突然前方から白いかたまりが飛び出して

きた。ジャツキーは慌ててよけようとしたが、とても間に合わない。目前に迫った白いかたまりから目をそらし、無駄だと分かっておきながら、がむしゃらに横っ飛びして逃げる。ジャツキーが転がった後を追うように、落ち葉が車輪のようになると回って落ちる。白いかたまりはどこかに消えていた。さっきまで自分がいたところは、アックスが放った呪いにより衝撃波が舞っている。

ふう〜と、ジャツキーは一息ついて立ち上がるうとした。しかし、目前に白いかたまりが迫っているのを悟ると、今度は冷静によけた。どうやら白いかたまりは、何十体もいるらしい。これを……全部倒さなくてはならないのだ。

もう目の前で何が起こっているのかわからなくなったジャツキーは、とにかく手当たり次第に光弾を放った。ただ杖を振り回すだけだった。次々と白いかたまりは消えていき、あたりは舞い上がった枯葉で見えなくなってしまう。

「ジャツキー！ ジャツキー！ 聞こえるか？」
アックスが、枯葉の壁の向こうで精いっぱい声を張り上げているようだ。

「敵は数が多い。気をつけろ！」
見ると、前方にはまた新たな敵が迫っていた。

真っ白なもやの向こうに、不気味な薄ら笑いを浮かべた人間の顔がある。よくは見えないが、人に似たモンスターらしい。

ウイングも、ジャツキーやアックスと同じように、未だまとわりついてくる白いかたまりに奮戦していた。長く、太くなり魔法のオーラを帯びた角は、月夜の脱出作戦の時と同じように敵を貫いていた。貫かれたかたまりは、ばらばらになって地面に落ち、やがて静かに消え失せる。

ジャツキーは、再び光弾を放ち始めた。

「ジャツキー！ そいつらは毒のかたまりを投げつけてくる！」
アックスの言ったとおりだった。どうやらアックスは、ジャツキーが戦っているのと同じ敵と、対峙しているらしい。紫色の鮮やか

な球体を生み出したかと思えば、念力が何かでジャツキーの足もとに投げつけた。接近戦は無理だ。ジャツキーは反射的にそう思った。ジャツキーは、抜群の身体能力で木の上に飛びついた。そして逃走を始める。すかさずモンスターたちは追いかけるが、それはジャツキーの思うつぼだった。時々後ろを振り返っては光弾を撃ちこんでいく。モンスターたちが毒のかたまりを放つても、木の上を猿のように自由自在に移動するジャツキーには無意味。ジャツキーは素早く移動しているためにまぐれでも攻撃が当たらない。その上、あちこちに張り巡らされている木の枝にほとんどの攻撃がはじかれてしまう。代わりに、お返しと言わんばかりの光弾をもるに食らってあっさりと全滅した。

ジャツキーは元いた場所に戻った。アックスも戦いを終え、枯葉を片付けている。

「ジャツキー、あいつらは幽霊だ。かなり凶暴ないたずら好きで、この森を通るやつに襲いかかる」
アックスのその言葉を聞いた途端、ジャツキーは気持ちが悪くなった。

今まで戦っていたのが、幽霊だったなんて……。

何とか気を取り直して、再び前に進もうとすると、今度は白い服をまとった女がいるではないか。

「おい、そこにいると危険ですよ。幽霊に襲われますよ」

アックスは女に声をかける。すると女は顔を上げた。顔面蒼白で、まるで死人のように元気がない。手足はやせ細っており、髪は手入れもしていないのかボサボサ。そして、気分が悪そうな紫色の唇を震わせながら言った。

「あなたたちこそ、なぜここにいますか？」

「旅をしているんです」

今度はジャツキーが答えた。すると、死人のような顔に少しだけ元気がもった。

「ちょうどいい。私の家で、少し休憩なさってください……」

そういうと、ジャッキーとアックス、それにウイングの周辺の空間がゆがんだ。まるで天地が逆になったようで、ジャッキーはバランスを崩して転がる。

「アックスさん。これはいったい？」

「テレポーション瞬間移動術だな」

そうになると、瞬間移動術はこの女が使ったのだろうか。疑問の種が尽きないまま、とうとう屋敷の前にワープした。

「どうぞ。ここが私の家です」

それは、数年前まで大豪邸だったようで、今は全く手入れをされていないようなボロ屋敷だった。

第十二章 亡霊

「どうぞ、おあがりなさってください」

女はそう言つて、強引に二人とウイングを屋敷の中に入れた。まるで見えない糸に引つ張られているような感覚で、二人は家にながった。ジャッキーは、もう恐怖で感覚が麻痺してしまっている。アックスに助けを求めたが、やはり彼も同じだった。

部屋に入ると、かろうじて弱々しく光っていたともしびが、長く不気味な、本物のお化けのような影を作り出していた。壁や床はあちこちが剥がれ落ち、薄汚く汚れている。部屋の中央にある小さいテーブルは、足が一本かけて今にも崩れ落ちそうだ。椅子も置かれていたが、とても人間を支えられるほどの安定感はなかった。ジャッキーは逃げ出したくなつたが、この女はきつと追いかけてくる。反射的にそう思っていた。

「おかけなさい」

ジャッキーは、しばらく震えながらその場に立ち尽くしていたが、意を決して椅子に座つた。ギィ……という、小さいながら耳を貫くような嫌な音がしたが、崩れ落ちることはなかった。

「この森の秘密、知りたいでしょう？」

女は薄ら笑いを浮かべて言った。ジャッキーはそんなことはどうでもよかつた。寒気がしてきて、震えが止まらない。吐き気もしてきた。今すぐにでも、ここから逃げ出したかつた。だが、この女の雰囲気からして、逃げられない。

「はい……」

そう答えるしかなかった。アックスは、わけもなく下を見ている。「お二方、表情が硬いですわ。もっとリラックスなさってください」

じゃありラックスできるような雰囲気を作ってください。

ジャッキーは、だんだん怒りと寒気が増してきて、それにより震えも大きくなつてきた。

「この森は、『妖怪の森』とされていますが、正しくは『亡霊の森』。この世に未練のある死人が、幽霊となって復活するのです。そして通りかかった人間に、恨みを晴らそうとするのです。たとえば、罪のない者であっても」

理不尽！

ジャッキーはそう叫ぼうとしたが、止めた。女の様子がおかしい。最初は、肩を震わせて笑っていたが、やがて大きな声を出して泣き始めた。アックスが「どうしたんですか？」と言って女に近づいたが、ジャッキーがそれを手で制す。

「アックスさん！ これは罠です！」

「罠？」

すぐに女は泣くのをやめ、顔をあげた。思わず二人はのけぞってしまい、椅子を派手に倒す。ウイングが毛を逆立て、威嚇していたがそれは無駄だった。

女の目は血走り、大きく見開かれている。口からは吸血鬼のような歯がむき出しになり、鼻も大きく捻じ曲がって恐ろしいほどの形相になった。

「ジャッキー！ 戦うぞ！」

「はい！」

二人は戦闘態勢になり、杖を構えた。女は脇の下に手を突っ込むと、「割れよ！」と叫び杖を向けた。途端にテーブルが煙を上げて粉々になる。二人はあわてて飛びのいた。

「気をつける！ あいつの呪文は強烈だ！」

アックスはそう警告し、一目散に女のもとに向かう。そして光の布を生み出し、女に巻きつけた。

「どうだ！」

アックスは杖を引き、女を締め上げた。しかし、女は苦しむそぶりを見せず、笑みを浮かべるほどの余裕の表情だ。

次の瞬間、女は何事もなかったようにするりと布から抜け出し、空中で一回転して後方に着地した。

「何っ？」

「ふっふっふ。それで私を捕らえたつもりだったんですか？」

女が逆襲に出た。次々とガラスやら椅子やらを手当たり次第に破壊し、部屋をめちやくちやにした。その破片が二人に雨のように降り注ぐ。しかしウイングが、角でそれを跳ね飛ばしてくる。角の周りの魔力の軌跡が、美しく宙に描かれる。

一方アックスは、もう一度女を捕らえようと氷の魔法を出していた。杖先から氷の槍が飛び出し、それが女に当たる。すると、女の周りを氷が取り囲んだ。しかし、女が避けるそぶりを見せなかったことにアックスはふたたび疑問を抱いた。

ま、まさか……。

女は炎の渦を操り、氷の檻を破壊した。そのまま炎はアックスに襲いかかるが、間一髪、ジャッキーがシールドを生み出していた。

「甘いなっ。ええい、これで終わらせてしまおう。冥界の王よ。

すべての亡霊たちよ。今ここに力となつて降り立ち、我に従い給え。
光となり、愚民たちの闇を照らし出し給え。雷撃、冥地獄界天雷！」

ヘルデイス・ヘル・サントーヘフランス61

呪文が長かったため、攻撃する隙はあったが、なかなか消えない炎に対してシールドを張るのに精いっぱい、それどころではなかった。その瞬間、天地が翻ったかのようなまばゆいほどの光で、辺りは何も見えなくなった。部屋を一瞬でめちやくちやにするほどの強大な魔力は、この部屋の中に収まらず、屋敷の外まで広がったため地面はうなり、地割れも起こった。耳をつんざくほどの雷鳴が、後になって降りかかる。それでもジャッキーは、強大な力に耐えながら、倒れる寸前に光の向こうにいる女に杖を向け、叫んだ。その瞬間、すべてが終わった。

どれくらい時間がたったのか、全く見当がつかない。ジャッキーは、ゆっくりと目を開けた。

だんだんと意識、記憶が回復していく。ちょうど今アックスも起きたようだ。ここでジャツキーは、一つおかしな点に気づいた。

あれほどの強大な魔力を浴びたのに、痛くもかゆくもない。それは、自分の前にすつと現れたウイングを見て気づいた。

ウイングは、あの雷鳴が起こる前に一足早く、危険を察知して逃げた。二人はあの魔法により飛ばされたが、それを見ていたウイングは一目散にそこに行き、二人の治療をした。

「おいジャツキー。湖だ！」

ジャツキーは声が出たほうに振り向いた。すると、眼下には澄んだ、エメラルドグリーン色の湖が広がっていた。その手前に、誰かの血の跡がついているのも見つける。

何だろうと思って血の跡をたどっていったが、それは間違いだった。見てはいけないもの、と言うよりは、見ないほうがいいものを見てしまった。

あの女は、死んでいた。

あの時、ジャツキーはフルパワーで、巨大な光弾を放った。それにより、ジャツキーが降り注ごうとしていた雷撃が、その光弾によって弾き返されたのだ。そして、女は自ら放った魔法に当たって死んだ。

ただし、この女の正体は、誰にもわからなかった。

第十三章 底なし湖

「ジャツキー、さっそく湖の近くまで行ってみよう」

「はい」

ジャツキーたちは、坂をかけくだつて湖のほとりについた。

「すげえ。水が澄んでいるぜ」

「え？ 本当ですか？」

ジャツキーは、急にのどが渴いてきた。澄んでいる水なら、飲んでも害はない。ジャツキーは一目散に駆け出して、湖の水を飲もうとした、その時。

「うわっ」

うかつだった。水を飲みたい、という欲望が、自らの不注意を生んでいた。足元には注意していなかったのだ。コケをまとつた石を踏んでしまい、ジャツキーは宙を舞う。今のジャツキーには、ただ意味もなく手足をじたばたさせることしかできなかった。あまりに突然な出来事だったため、アックスも反応できない。ジャツキーはそのまま湖に墜落した。

泳ぎの得意なジャツキーは、泳いで岸に上がろうとした。だが、体に力が入らない。

「ジャツキー！ 今助けるぞー！」

アックスなら大丈夫だろう。安心したジャツキーは、力を抜いた。
ウォーターカット
「水切り！」

アックスの杖から閃光が放たれた。至近距離だったため、ジャツキーは目を閉じる。そしてジャツキーの脇腹すれすれを、すさまじい威力を秘めた魔法が通り過ぎる。ナイフを振り下ろされたような感覚だった。

「なんだこれ！ この湖に、魔法が全く通用しない！」

その言葉で、ジャツキーは目を見開いた。

そんな馬鹿な！

そう思っている間にも、ジャツキーの体から力が抜け、それに合わせて沈んでいく。その姿は沈没船のように無惨だった。もはや一刻の猶予も許されない状況だ。

自らの命が危ない。そう思っているのに、体が思うように動いてくれない。これは一大事だ。

「くそっ！」

アックスは、何とかして沈みかけた体を引き上げようとする。が、それは逆効果であって、ジャツキーの体は浮き上がることなく、逆に沈んでいく一方だ。完全に湖に体を支配されてしまった。

間もなく、ジャツキーの両手と胸が水中に沈み、かるうじて陸上に姿を見せているのはジャツキーの顔と両足のつまさきだけになった。

「もはやこれまでか……」

ついには張本人までこんなことをつぶやいている。それは、終わりを意味していた。

「くそ……ジャツキー！ まだ……あきらめちゃ……ダメだ……」

アックスは、あらゆる切断系の魔法を、ジャツキーに当たらないように放っていた。

ジャツキーが助かってくれればそれでいいんだ！ たとえ自らの魔力が尽きても……。

しかし、その願いは届かず、湖は全く反応を示してくれない。

ジャツキーの足が冠水し、続いて顔も沈み始め、地上に出ている部分に残りわずかとなっていた。鼻と口は出ているため呼吸はできるのだが、タイムリミットはすぐそこまで迫っていた。ジャツキーは覚悟を決めたように目をつぶる。アックスは、呆然と立ち尽くすしかなかった。

ここで終わるんだ。自分も、世界も……。

その時、ウイングが魔力をまといながら湖にダイブした。ウイングの体は、湖に負けないほど、この快晴の青をすべてたしても足りないくらいに青く光り、流星のように空中に軌跡を残した。そして

ジャツキーを強引に背中に乗せると、今度は急上昇して無事にほとりに着地した。

「ウイング！ どうして？」

ジャツキーは、余力を振り絞った精いっぱいの声で言った。それをアックスが、「あまり声を出さないほうがいい」と手で制す。

「乾燥！^{トフライ}！」

アックスの杖から放たれた温かい風は、ジャツキーの体を優しくなげた。そしてあつという間に、びしょびしょに濡れていたジャツキーの体と衣服は、乾いていた。久しぶりに暖かい風を浴びたジャツキーは、途端に元気が出る。

「^{トルース} 真実よ！」

アックスは、今度はウイングに杖を向けた。ジャツキーには、最初この行動の意味がよくわからなかった。

「なるほど。こういうことか」

どうやらアックスは、どうやってウイングがジャツキーを救助したかについて調べてくれたらしい。

話によれば、最初ウイングは、角の強大な魔力を全身にめぐらせていた。そして力がたまつたところで、湖に飛び込んでジャツキーを救助したらしい。さらに余談だが、この湖は底なし湖であることもわかった。

「俺でも無理だったことを、ウイングはやってのけた。と言うことは、ウイングにも『一角獣の杖』と同じように、特別な力が秘められているのかもしれない」

特別な力。

果たして、それがどんな効果・幸運をもたらすのだろうか。

しかし、考えている暇はなかった。

「いたぞ！」

そう叫んでジャツキーたちの目の前に躍り出た人物たちは、月夜の脱出作戦の時と同じような服を着た面々だった。

第十四章 湖の秘密

「お前ら……あの時の！」

黒い服の集団の中の、一人が叫んだ。

そう。ジャッキーとマッツを捕まえ、売り飛ばそうとした黒い服の集団。

「ちくしょう！ もう一回捕まえて、痛い目に合わせてやるからな！ 覚悟しろよ！」

その一人は杖を取り出し、いきなり飛びかかろうとした。それを、銀色の髪の方が呼び止める。

「やめろ、あとでいい」

飛びかかろうとしていたやつは、その言葉に驚いて後ろを振り返った。そして銀色の髪の方を見ると、「ははっ！ クランス様」と一礼する。

「やれやれ、名乗る必要がなくなっちゃいましたね。私の名前はクランス。いいですか、我々はこれから、重大なプロジェクトに取り掛かるうとしていているところなのです。あなたたちは邪魔などという小賢しいことは考えずに、黙ってそこで見ていればよろしい。我々は、人殺しは嫌いですからね」

「ちよつと待て」

すかさず、アックスが低い声で突っ込む。

「重大なプロジェクトとは、どういうことだ？」

「あなたたちには関係のないことです」

クランスはアックスの威勢の良さに少しもひるまず、いたって平然を装って言った。

「お前らがそのプロジェクトをしようがしまいが、お前たちの勝手だ。だが、俺達までに危害が加わるのなら、少々問題がある。教える」

「なるほど。ところで、あなたたちはこの湖がなぜ底なしなのか、

そしてなぜ入ると力が失われ、沈んでいく一方になってしまつのか
ご存知ですか？」

ジャッキーは、反射的に首を振る。

「実はですね、この湖の底には『水龍』がいるという伝説があるの
ですよ」

「水龍？」

その言葉を聞いた瞬間、ジャッキーの脳裏に『ドラゴンのしずく』
のことが浮かんだ。

龍、というくらいなら、まずドラゴンであることは間違いな
い。と言うことは、ここに『ドラゴンのしずく』がある確率は、少
なからずあるということだ。

「水龍つてのは、湖とかに住むへび型の龍だ。魔力が強大で、主に
水・氷・雷の魔法を使ってくる」

アックスが、親切にも教えてくれた。

へび型の龍。細長く、体をくねらせている感じの龍だ。一般的な
龍と違い足がなく、頭・胴・尾の区別も特にならない。

「おや、知っているなら話が早いですね。水龍の力は、伝説ではか
の不死鳥フェニックスを軽くしのぐとも記されております。そして、この湖が『
底なし』なのは、今もなお水龍が湖の底を広げているから。そして
湖に侵入しようとした者の力が抜けるのは、水龍が他者が湖へ侵入
することを拒むからです」

ジャッキーは、水龍を怒らせてしまったことになる。嫌な予感が
した。そして後々のことを考え、ジャッキーは身震いする。

「我々の目的は一つ。この湖一帯に、水龍が張り巡らした封印の結
界を破壊し、水龍を地上におびき寄せて捕まえること。ただそれだ
けのことです」

「馬鹿めかせ！」

アックスは、えらく好戦的な性格らしい。もう杖を抜いて、戦闘
態勢に入る。

「それは、お前らだけの利益だ。どうせ水龍をだまして、地上で大

暴れさせるんだらう？ そんなことだらうと思った。俺達は、お前らの邪魔をする」

アックスの自信ありげな表情を見ても、クランスの顔は何事もなかったかのように。見ただけでもかなりの魔力を持っていることがわかる、実力者アックスを目前にしても余裕の表情。それを考えると、クランスもかなりの実力者であることには違いない。

「ほう。我々は別に、悪いことをするわけではないのですよ？ 我々が悪いことをするわけではないのです。大暴れするのは、水龍のほうですが」

クランスは、うまく言い逃れしようとしているのだろうか。それとも、ただアックスをからかっているだけなのだろうか。ジャッキーには、この男の考えがいまいちよくわからなかった。

「俺達は正義の味方さ。悪い奴を見かけたら、即座にぶっ倒すのが俺達の主義。なあ、そうだらう？」

アックスはふざけた口調で言った。いかにも、棒読みしている。ジャッキーは、笑みを浮かべながらそれに応える。

「まったく、ガキどもが大人の事情に首を突っ込んでくるなんて…

…まあいい。先にこいつらを始末するか。行け！」

クランスの掛け声に応じて、黒服の集団、おそらく十人ほどがこちらに向かってきた。まるでこつもりの大群のようだった。

ジャッキーとアックスはお互いの顔を見合い、笑顔を浮かべながら杖を構えた。

第十四章 湖の秘密（後書き）

次回、いよいよバトルです！

第十五章 強敵現る

敵はおそらく十人。たいしてこちらは二人。数的不利だが、ジャッキーはアックスを信頼していたため、負ける気はしなかった。

アックスは、相手の衝撃波をシールドで軽くはね返すと、敵の足もとに渦潮を生み出した。敵は、なすすべなくそれに引き込まれ、早くも二人が戦闘不能に陥った。

よし、僕も！ と意気込むジャッキー。敵の一人に杖を向け、光弾を放つ。しかし、その大きな光弾は、あっけなく敵のシールドに受け止められた。あまりのあっけなさに、ジャッキーは茫然とするしかない。

「ジャッキー！ そいつらは、前に戦ったやつらよりも強い！」

そう言っておきながら、アックスは余裕の表情だった。敵が撃ってくる衝撃波を、右へ左へ、軽いステップでかわしていく。湿っている地面を全く気にするそぶりも見せず、ついには体操選手のようにバク転までやってのけ、後方に着地した。敵は、必死に腕を振り回し肩を上下させ、額に冷や汗まで浮かべながら放った衝撃波がすべて無駄に終わったことで、ますます腹を立てた。

そのアックスを見て、ジャッキーも「何とかしないと……」と思った。その時、一角獣の杖が水色の輝きを放った。氷よりも透明だが、宝石よりも美しい色彩を見せてつけている。

「なんだこれ……」

ジャッキーも、敵さえもしばらくそれに見とれていた。そしてジャッキーは、体の底から力がわき出てくるような快感を覚えた。

「すごい……体中に力がみなぎってくるぞ……」

敵はジャッキーの形相を見て、数歩後退した。ジャッキーは、頭の中に思いついた言葉を、そのまま口にする。

「水剣！」

その瞬間、ジャッキーの杖先から水の剣が現れた。敵は背中を向

けたが、その前にジャッキーは地面をけつていた。

「すごいぞ、ジャッキー！ 一角獣の杖は、その地形に応じた魔法を覚えるみたいだ！」

アックスも興奮気味だ。

ジャッキーが驚異のスピードで敵に追いついた。ふと見ると、いつの間にか杖が剣と一体化しているではないか。

ジャッキーの剣撃は、水のように流れるようなきれいな動作で、しかし圧倒的な速さと切れ味を保ったまま、敵の背中を切り裂いた。マントごと胴を真っ二つにされ、悲鳴を上げる間もなく、相手は倒れた。なおも残りの敵が、ジャッキーに抵抗するように衝撃波を放つ。だが、ジャッキーは落ち着いていた。剣に身を任せる。すると、体が勝手に反応して、剣は衝撃波をはじき返した。まさかと思っていた数人は自らが放った衝撃波に当たって自滅。とうとう一人になった黒マントの敵は、シールドを張ってガードした。

しかし、シールドが消え去ると同時に、ジャッキーが眼前に踏み込み、相手に向かって剣を突き出してきた。慌てて地面に転がるが、ジャッキーはまたしても「水壁撃！」と唱え、呪文を放つ。すると、途端に水が雪崩のように降ってきて、黒マントの最後の一人は水圧に吹っ飛ばされ、向こう岸の崖に激突した。

「ちっ。この役立たずめ」

クランスは舌打ちする。

「ほう。私の部下を瞬殺するとは、なかなかの実力者であるとお見受けいたしますね。では、今度は私がお相手にいたそう」

クランスは空中に高く跳躍する。ジャッキーも水剣を片手に、クランスを追いかけて跳躍した。そして剣を軽く後ろに引き、剣撃を繰り返そうとする。

「甘いな、小僧。ウォーター・ハンマー！」

その刹那、ジャッキーの頭上に軽く大きさは3メートルを超えると思われる、巨大なハンマーが出現した。ジャッキーは、急に寒気が走って背筋が凍りついた。

「死ね、小僧！」

至近距離から、ジャツキーにもものすごい圧力がかかりそうになった。クランスは悪魔のように意地の悪い笑みを浮かべ、両手を振り下ろす。それに合わせて、ジャツキーの脳天めがけてハンマーが振り下ろされた。

殺^やられる……！

ジャツキーは、覚悟を決めて目を閉じた。

「クエイク・ブレイク！」

しかし、ジャツキーの頭を破壊していたであろうハンマーは、かろうじてジャツキーの頭上すれすれで止まっていた。

「大丈夫か？ ジャツキー」

ジャツキーは、何事もなかったかのように着地した。見ると、アックスがハンマーのほうに杖を向け、見えない力で攻撃を防いでいる。

「おやおや。これは上級魔法ですか？」

「そうだ。大地の力で、上級レベルの大体の魔法を受け止める」

アックスが自信たっぷりに答える。

「これならどうでしょうか？ ゲイル・ブッシュ 押撃疾風！」

その途端、今度はクランスが、先ほどアックスが使ったような見えない力で押し返す魔法を使ってきた。

「目には目を、歯には歯を、とはこのことでしょう」

クランスは、疾風に押されて何もできない無様な二人を見、けらけらと声をあげて笑った。ジャツキーの心の中の怒りが、力となって湧き上がる。

もうだめか……。

アックスがあきらめかけたその時、疾風と体にかかっていた力はすべてやんだ。見ると、ジャツキーが水剣で、疾風を切り裂いたところだった。

「なにっ！」

きれいに水の軌跡が残る。そしてジャツキーは、空中で一回転し

ながらクランスに切りかかった。クランスも光剣を生み、ジャツキ
ーの胴めがけて振りかぶった。
二つの魔法剣が、空中で激突した。

第十五章 強敵現る（後書き）

この小説に出てくる魔法。たとえばこんなですね。

「押撃疾風」読み仮名は、ゲイル・プッシュユ。

これは、「押す」と言う意味のプッシュと、「疾風」と言う意味のゲイルを組み合わせたものですね。そう、ほとんどは英語に漢字をあてはめたものです。

第十六章 覚醒

まばゆいほどの閃光が、クランスとジャッキーの二人の目前に現れた。

それとともに、ものすごい衝撃がジャッキーの両手首に走った。痺れと痛みが、手首から全身に伝わっていく。一瞬、ジャッキーはこのまま力を抜いて地面に降りようかとも思った。

だが考えてみれば、このまま力を抜けば、地面に落ちるまでの低空でクランスが何か仕掛けてくるに違いない。どうせ負けるなら、逃げずに勝負したほうが悔いも残らないだろう。

驚いたことにクランスは、また余裕をこいているかと思っただが、激しい力と力のぶつかり合いにより、顔をしかめていた。これには、ジャッキーが一番驚いていた。

ジャッキーとクランスの我慢比べ。先に力を抜いたほうが負ける。これは、意地と意地のぶつかり合いだった。しかし、両者ともに苦しそうな表情を浮かべながらも、一向に戦いは終わる気配を見せない。二人とも粘りを見せていた。

そんな戦いにも、遂に転機が訪れる。

クランスも、ジャッキーも、この膨れ上がった強大な魔力に遂に耐え切れなくなり、大爆発を起こした。クランスはいち早くそれを察知し、何とかシールドを張って防いだが、未熟なジャッキーは全く反応できなかった。

「プロテクション
保護せよ！」

アックスが、力なく地面に墜落しようとしているジャッキーを保護した。

その時、湖から巨大な水しぶきが柱のように舞い上がり、突然そこに向かって雷が落ちた。舞い上がった水しぶきは湖に落ちていく寸前に凍りつき、宝石のような結晶を生み出している。

「ま、まさか……！」

「おお！ 水龍様！」

クランスは、目を輝かせている。

氷は輪のようになり、湖から空中に浮きあがった。そしてそれが見えなくなってしまうほどの光を放つ。

先ほど氷の輪があつたところに、巨大な水龍が出現した。

太く、長い尻尾をやみくもに振り回し、蛇のような胴体をくねらせながらこちらを見ている。背中に氷の翼が現れ、それを大きく羽ばたかせて空中で静止した。目は真っ赤で、怒っているようだ。

「水龍様……ついに、ついに覚醒した！」

クランスは両手を前に突き出し、感無量と言わんばかりの表情だ。「アックスさん、どうして水龍は覚醒してしまったのですか……？」
「おそらくは、クランスとお前の魔力によって、水龍が反応したのだらう」

水龍がうなり声をあげた。ジャッキーは一步後退する。

「真実よ！」

アックスは、先ほどウイングがジャッキーを助けた時と同じ呪文を使った。

「^{トルス}真実魔法？ ……アックスさん、なんでそれを使うんですか？」

「いや、水龍がうなった意味が分かったらな〜って思ってたさ」

アックスは軽い口調でそう言ったが、次の瞬間顔をしかめた。

「水龍いわく、『この聖なる領域に、余の神聖なる住処に、勝手に足を踏み入れ、汚そうとしたのはお前たちだな？ ここに来たことを後悔するがよい』だとさ」

「……！！ アックスさん！」

ジャッキーは水龍のほうを指さす。見ると、水龍が魔力のオーラをまとい、早くも攻撃を始めようとしているではないか。

ジャッキーは急いでシールドを張ろうとした。それをアックスが止める。

「ジャッキー、あの魔力にシールドは通用しない！ ほかの魔法で

食い止める！」

アックスは口を動かしながら、同時に杖を動かしていた。するとアックスの目の前に、巨大な光球が現れた。

その刹那、轟音とともに爆風が四方八方へ吹き飛んでいく。地面は揺れ、波がうねり、ジャッキーは体勢を崩した。ジャッキーは起き上がっている場合ではないと判断し、倒れたまま杖を水龍に向けた。

「水壁撃！」

ジャッキーの水の壁とほぼ同時に、アックスの光球から光線が発射された。二人の魔法は魔力のオーラに当たり、徐々にそれを押し戻していく。

爆風の被害はそれほど長くには及ばなかった。水龍はすぐに衝撃波を止め、恨めし気な目でこちらを睨みつける。

「はっはっは。さすがは水龍様だ！ ではこれより、水龍捕獲作戦に入ろう！」

クランスは、あの爆発に少しも懲りていないようで、むしろ余裕の笑みを浮かべている。クランスの杖先から、雪のような銀色の魔球が無数に出現した。

「やめろ！ クランス！」

ジャッキーはようやく起き上がったが、クランスはジャッキーの呼びかけを無視し、魔球を発射した。何とか食い止めようと、ジャッキーは杖をあげて駆け出した。それをやはりアックスが止める。

「ジャッキー、あいつに何を言おうが無駄だ。今は、あいつと水龍の戦いを、おとなしく見守っていよう」

水龍に、クランスの魔球が襲いかかった。

第十六章 覚醒（後書き）

バトルシーンの連続で、書いているほうも楽しいですWW
これからはばらくバトルシーンが続くかと思えます。

第十七章 クランス、去る

しかしその刹那、水龍の唸り声とともに、水のシールドが現れた。シールドは、銀色の魔弾をいとも簡単にはね返す。

「何っ！」

クランスは、自信満々で放った攻撃があっけなく消失したことに、納得がいかないようだ。

ここでクランスは、水が電気を通しやすいことを思い出し、雷撃を放った。黄色の鎧をまとい、高らかに音を立てながら槍のように水龍に突っ込んでいく。さすがの水龍も、水のシールドも、電気にはかなうまい。ジャッキーもそう思い込んでいた。

しかし、水龍はまったく慌てたそぶりを見せず、それどころか落ち着いて魔力をため、放出した。すると今度は電気を網目のように張り巡らせた巨大な魔力のかたまりが生まれ、クランスの攻撃を飲み込んでしまった。

「ちくしょう！ ならば……これを使うしかないな……シルバー・ワールド銀世界！」

呪文からでも予想がつくが、水龍に銀色の巨大な魔球が襲いかかった。そしてそのまま、水龍が魔球にのまれた。これでは、身動き一つとれない。水龍は体をくねらせ、尻尾をふるい、唸り声を上げるなどの努力はしたが、労力の無駄にすぎなかった。

「はっはっは。どうだ！ 水龍とて、大したことはないな。私の勝ちだ！」

クランスは、あまりの嬉しさに高笑いしている。だが、その高笑いには、すぐに消えた。

次の瞬間、水龍は空から、銀世界に向かって雷を落とした。銀世界は切り裂かれるようにして壊れてしまう。爆発音とともに、銀世界は塵と化した。

「銀世界が……破られた!?」

クランスは、驚愕した表情を浮かべた。

「アックスさん、水龍が今使った技はなんですか？」

「あれは、『天雷招来』。雷の魔法の中でも、難易度は高い」

アックスは口では冷静を装っていたが、表情は落ち着きがなかった。

一方、次から次へと攻撃され、防戦一方だった水龍は反撃に出た。湖という地形の利を生かし、強力な大波を起こした。クランスは跳躍し、難なくかわした……と見えたが、大波は突然クランスのほうに伸び上がり、そのままクランスに付着した。

「うわ、なんだこれ！」

「どうやらあれは、特殊な波だ。湖の水に、水龍の魔力を融合した。あの波は、触れた相手の動きを封じる働きがあるらしい」

今度はジャッキーが質問する前に、アックスが勝手に解説を始めた。

動きを封じられたクランスは、空中で恐怖に襲われていた。それもそのはず、クランスの着地するであろう場所に、水龍が氷の魔法を発生させていた。しかもその氷は、先がとがっている。このままだとクランスは、数秒後に体を貫かれていたことだろう。

だが驚いたことに、さっきの波の魔法の持続時間は、さほど長くなかったらしい。すでにクランスは、呪縛から解放されていた。

すかさずクランスは、炎の魔法を放った。しかし、水龍はそれも計算済みのようで、すでに氷の上に水のシールドを張っていた。絶対的な破壊力を持つ炎の呪文も破られ、クランス万事休す。何とか氷の上に自らも平らな氷を生み出し、それを踏み台にして危機を脱した。

だが、それも一時的なものだった。すぐさま水龍は水の槍を放つ。数々の強大な魔法の応酬に、もう魔力が底を尽きたクランスにそれをかわすすべなどなかった。

水とはいえ、魔力によつてすさまじい鋭さを手に入れた水龍の槍は、クランスの腹を貫いた。クランスの体からは派手に鮮血が吹き出され、続けて口からも血が吐き出される。銀髪は自らの血であっ

という間に真っ赤に染まり、クランスは意外にも穏やかな表情で目を閉じた。そしてクランスは、湖へと消えていく。

「やばい！ 来るぞジャッキー！」

水龍は、クランスを倒したと言うのに怒りの表情を浮かべ、早くも好戦的だ。

「^{トルース} 真実よ！」

アックスは、水龍の真意をくみ取ろうとしている。

「『今の者は私を倒そうとした。つまり俺の敵だ。お前たちもあいつの仲間だろう……？』だよ。こりゃ、戦うほかに道はねえな」
アックスは、しぶしぶ杖を構えた。

あれだけ余裕こいとして、見せ場無く倒されるなんて！ しかも僕たちにも迷惑かけて！ クランスは何しに来たんだよ！

ジャッキーはそう思い、だんだん怒りに震えてきた。そして、ジャッキーがもう一つ思っていたことは……。

ジャッキーとクランスの戦いは、決着がつかずじまいの相撃ちに終わった。それなら、ジャッキーとクランスの実力は同じだ。そして、クランスは水龍に敗れた。それならば、ジャッキーも単純に考えれば敗北する。

急に恐怖に襲われた。戦う気が失せた。アックスなら、ここで「逃げ出したい」と言えば許可してくれるだろう。ただ、それでいいのか？ 『勇者』である自分が、逃げていいのか？

それに、水龍は本物の“ドラゴン”の足元にも及ばない。それならば、倒すしかない。それに、ここにはアックスや、ウイングもいる。なら、大丈夫だろう。

ジャッキーは、少しの不安と、大きな希望を背負いながらアックスに続いた。

第十八章 水龍

「いくぜ！ わが雷光よ！」

アックスはそう唱え、杖を水龍のほうに向けた。と同時に、アックスの杖先から目がくらむような光が出て、そのまま水龍のほうに向かっていった。

その雷光はまっすぐには進まず、途中で激しく衝撃波をまき散らし、折れ曲がったりパチパチというような音を立てながら、水龍に向かっていく。ねずみ花火のようだ。アックスの攻撃が弱いからではない。逆に強すぎて、魔力が雷光の中で暴れまわっているからである。

ここで水龍は、冷静に体勢を低くし、大口を開けた。そして運命づけられていたかのように、アックスの雷光は水龍の口の中に吸い込まれた。なのに、水龍は別段苦しそうなそぶりも見せない。

「なんだとっ！」

今度は、水龍のほうからお返しが来た。先ほどのアックスの攻撃を数倍にしてはね返してきたのだ。天地が翻ったかのような光の束に、アックスは目がくらんだ。しかし、攻撃が二人に到達する前にジャッキーがシールドを張り、何とか防いだ。

水龍は、アックスがいきなり攻撃してきたことに腹が立ったように、アックスを集中狙いするようになった。その為ジャッキーも、上空のウイングも水龍を狙っているのだが、完全に水龍を捕らえることはできなかった。

アックスは魔法を放つ暇もなく、ただ避けることだけに集中しているようだ。退いたアックスを狙う水龍は、口から巨大な電気の球を吐き出してきた。衝撃波による荒波で湖は揺れ、今にも世界が吹っ飛びそうなその勢いにジャッキーとウイングは水龍から離れてしまった。アックスはそれを難なくかわし、後方に着地した……と思いきや。

ここで事件が起きた。

アックスの足もとから黄色い光が出現し、それはどんどんアックスの体を包んでいく。アックスは恐怖で体を震わせていた。そのうち光は無くなり、今度は電気の渦がアックスを取り囲んだ。水龍の罠だ。

水龍は自分の攻撃が避けられることを予測し、事前に罠を仕掛けておいたのだ。アックスを捕らえるために、あれだけの魔力を惜しみなく費やすということは、やはり水龍は底知れぬ魔力を持っているのだらうか。

「ジャッキー……すまん、お、おれは…… たった今、やられちゃったみたいだ……動けない……頼んだ」

アックスは動きが完全に封じられ、水龍は狙いをジャッキーに向けた。そして氷の塊を放ってきた。

その氷は、スイカほどの大きさながら、水龍の魔力により威力が活性化されていた。ジャッキーは水剣をふるい、何とかギリギリのところまで防いでいる。ジャッキーはやまぬ氷の雨により、周りが見えなくなってしまった。

やっと攻撃がやんだかと思うと、今度は水でまわりの地面を手当たり次第に破壊してくる。ジャッキーは飛び上がってよけながら、無我夢中に光弾を放ちまくった。だがしかし、当てもなく撃った光弾は的を捕らえるどころか、水龍に届く前にすべて水中に沈んだ。

「頑張れ……ジャッキー！ 一角獣の杖の魔力は、す、水龍にも……ひけを……とらないはずだ！」

アックスが必死に励みます。その瞬間、ジャッキーはいい作戦を思い付き、そのまま地面に倒れこんだ。湖のほとりに倒れたジャッキーを水龍は確認し、ゆっくりと湖の中央から岸のほうへと泳ぎだした。アックスは啞然とした表情で、ジャッキーを見る。アックスの願いはくしくも届かず、そのままジャッキーは動かなかった。

水龍は岸边まで来たところで、ゆっくりと口を開けてジャッキー

を丸のみにしようとした。アックスは声をあげようとしたが……体は限界のはずなのにさつき無理に声を張り上げたからだろう。まったく声にならなかった。

その刹那、ジャッキーは突然立ち上がり、近くにあった巨大な岩に呪文をかけた。岩は魔力により簡単に持ち上がったかと思うと、水龍に向かって一直線に、ミサイルのように向かっていった。もちろん、岩にはジャッキーの魔力を継ぎ足している。

岩は水龍に正面衝突した。いくら水龍と言えど、至近距離から、魔力付きの攻撃をもろに食らっては無傷では済まされまい。ジャッキーは力量に劣ると判断したため、知的な作戦を決行した。

だが、水龍は平然とした表情でこちらを見ているだけだった。効かなかったのだ。

ジャッキーとて、「こんな卑怯な作戦はどうか？」とは思っていたが、まさかここまであっけなく終わるとは、予想していなかった。それは、勇者である自分に厳しさを教えるもののようにも思えた。

水龍の口から、閃光が放たれた。ジャッキーも、それを迎え撃とうと杖を向けた。

こんなところで死ぬのなら……せめて最後くらいは、真剣勝負をして快く負けたい……。

第十九章 常識を超えた魔法（前書き）

底なし湖編、最終話です。

第十九章 常識を超えた魔法

水龍とジャッキー、力量の差は明らかだ。ジャッキーは目を開けていられなくなった。もうおしまいだ。

間もなく、杖を突きだしていた右手に痺れが走った。

これまでか。

おそらく、この右手のしびれは全身に広がって、ジャッキーは倒れるだろう。ジャッキー自身もそう思っていた。

だが驚いたことに、右手のしびれは全身に広がるどころか、だんだんと弱まっていった。最初ジャッキーは、「死ぬ間際だから、苦しみを感じなくなったのだろう」と思った。だがしかし、意識もあり思考もちゃんと働いている。ジャッキーは、ゆっくりと目を開けた。

一角獣の杖が、光を発しながら電気をまとっている。まぎれもない、水龍が発した雷撃だ。

次の瞬間、ジャッキーの全身に力がみなぎってきた。一角獣の杖から、それが伝わってくるように。この力があれば、世界をも破壊できるのではないか。すべてを手に入れることができるのではないか。そう思ったほどだ。そしてジャッキーは、一角獣の杖を通じて頭に思い浮かんだ言葉を、そのまま唱えた。

「大いなる雷神よ。ここに、この邪心に天罰を下し給え。聖なる光よ、悪しき心を照らし出し、撲滅せよ。天雷招来！」

一角獣の杖は、水龍の真上をさした。すると、そこに光の輪が現れ、やがてその光は輝きを増した。それはまるで、どんどん一角獣の杖の魔力を吸収していくように、巨大化していく。光の渦がその輪のまわりを、高速で回り始めた。その幻想的な光景は、この世のすべての光を束にしてかき集めたようだった。

次の瞬間、光の輪は爆音を発し、消え失せた。その爆音は水龍を撃ちつけたようにも見える。水龍は一瞬、細長い体を目いっぱい縮

め、それと同時に太くし、体の形を変えたかのように見えた。が、すぐに元の形に戻ったかと思うと、無惨にも砕け散った。体はむごいほどにばらばらに引き裂かれ、湖に紅の点々が広がり、その死体は湖の底に沈んでいった。

勝ったのだ。ジャッキーの魔法で、水龍は雷撃に反応できずに、撃たれて死んだ。アックスは呪縛から解放されていた。

「すごいよ、ジャッキー。その杖には、『常識を超えた魔力』が備わっているに違いない！」

アックスは、しゃべれることは素晴らしい、と言わんばかりの声を出した。

「『常識を超えた魔力』？」

「ああそうさ。一角獣の杖は、ある特定の時にだけ相手の魔力を吸収し、可能な限り強烈な魔法を生み出す。そんな気がする。ジャッキー、術を発した瞬間に、周りで何か変わったことはなかったか？」

「変わったことって……」

ジャッキーは、反射的にウイングのほうを見た。見ると、疲れ切った表情で前脚を折り曲げ、座っていた。

ウイングは、上空から攻撃の機会をうかがっただけで、ほとんど攻撃も受けてないし、体力、魔力を消費するはずもない。それなのに、なぜ。。。

ジャッキーは、こういう答えを出した。

アックスは、『特定の時にだけ』と言った。つまりこの能力は、ジャッキーの身の回りで何か特別なことが起こっていないと発動しないのだ。ジャッキーは、『勇者』というのをキーワードにして考えてみた。

一角獣の杖は勇者、つまりジャッキーにしか渡されない。ジャッキーの勇者の正式なお供は、ジャッキーが勇者であることを告げられるときの出来事から察知して、ウイングである。そしてそのウイングは、何もしていないはずなのに疲れ切った表情をしている。この3つの条件から推理すると。

詳しくはわからないが、おそらくウイングが何か関係してくるのだと思う。ジャッキーはあえて、このことをアックスに黙っておいた。アックスは、洞察力など魔法以外の分野にも優れる。もし、自分が『勇者』であることがばれたら。

アックスが「真実魔法」を使おうとしたので、ジャッキーはそれをうまくごまかして止めた。

「そうか。俺もそうだが……ジャッキーもウイングも、疲れただろう。今日はこの近くの、レッドテイクで宿屋を探すか」

ジャッキーは、ふと空を見上げた。もう夕暮れ。空は茜色にこんがりと焼け、温かい雰囲気を出していた。これはジャッキーを祝福しているようで、母親のように「お疲れ様」と言いながら、ジャッキーたちを包み込んでくれているようにも思えた。

第十九章 常識を超えた魔法（後書き）

次回、新章突入！

それと、この時点でジャッキーが使える魔法を整理しときますね。
そうしないと、僕自身混乱してしまうものでww

- ・ 魔弾
- ・ シールド
- ・ 物体移動
- ・ 水剣
- ・ 水壁
- ・ 天雷
- ・ 真実魔法

第二十章 戦いの街、ファイトタウン（前書き）

新章突入！

第二十章 戦いの街、ファイトタウン

あの激闘の後、アックスの提案でレッドテイクの宿屋で一夜を過ごした。素朴な田舎の町ではあったが、町の人たちのおもてなしはどこか温かさを感じるものがあり、二人と一匹はゆっくり休んだ。

一晩明かした次の日、アックスは次の目的地についてこう話した。「ジャッキーの戦闘力は、底なし湖で実証済みだ。だからもう、どんな敵が出てきても、心配はいらないな。問題は経験だが……そうだ！ ファイトタウンに行けば何かわかるかもしれない！」

「ファイトタウン？」

ジャッキーも、大体の予想がついた。が、ユニコーン農場から今までほとんど外に出たことはなかったジャッキーに、詳しいことがわかるはずもなかった。

「そうだ。戦いの街。魔法を一切使わない格闘家たちが多く、一見治安は悪いように思われるが、実際行ってみるとそうでもない。活気にあふれたいい街だ」

ジャッキーはすぐに賛成した。無論、反対する理由もない。さっそくウイングにまたがり、ファイトタウンに向かった。

「うお。すごい！」

ジャッキーは、活気にあふれた街の風景に感心した。まっすぐ石畳が敷き詰められたメインストリートに、規則正しく並んだ煉瓦の家。市場では絶えず歓声が上がリ、通行人には体の大きい勇ましい男性も多く見られた。いかにも、『正々堂々』という言葉が似合う町並みである。

ふと、前方に大きなドーム状の建物が見えた。ほかの建物と違い、圧倒的な存在感を漂わせている。まるで、「ファイトタウンのボス」

のように。

「アックスさん、あの建物はなんですか？」

「あれか？ あれはコロシラムだ。熱き男たちの戦い。見たいか？」

「はい！」

ジャッキーはもう、魔法とかは関係なく戦闘を見られることに興奮していた。ウイングは「むさくるしい」とでも思ったのか、コロシラムとは逆の方向に進もうとしたが、ジャッキーが笑いながら手綱を引いてしまった。そのため、ウイングはしぶしぶコロシラムのほうに足を進めた。

中に入ると、もうすでに戦闘が始まっていた。

一人はがっちりとした大男で、いかにも格闘家というふうな体つきだった。棍棒を持ち、準備は万端である。鬼に金棒、なのであるうか。

もう一人は体こそ相手よりも格段に小さいが、筋肉の量では少しも負けていない。後者は、体が小さいという不利な条件を振り払うように、鞭をふるって精いっぱい相手を威嚇した。大男のほうは余裕の顔つきで、敵を挑発している。

いきなり、大男のほうは両手で棍棒を持ち、そのまま振り下ろした。力、スピード共に十分すぎる攻撃だっただろう。だが、体の小さい敵は難なくかわすと、素早く踏み込んで体制を低くし、鞭を大男の足に巻きつけようとした。大男はジャンプしてかわそうとしたが、よけきれず空中で体制を大きく崩した。そこへ、鞭をふるった方がドロップキックをクリーンヒットさせる。耳が壊れるような歓声が上がった。

だが、大男も負けてはいない。すぐに立ち上がると、棍棒で突きを繰り出した。相手はうまくかわし、鞭を脇腹にヒットさせた。だが、大男は攻撃が当たって油断しているところを狙っていたのだ。右手でみぞおちをアッパー気味にパンチする。鞭の一撃で威力こそは弱まっているものの、それでもみぞおちである。急所に当たって、

体の小さい男は悶えた。

そのまま大男のほうは、棍棒を振りかざしてとどめを刺そうとしている。悶えている男のほうは何とか立ち上がるうとしていたが、とても間に合わない。棍棒がついに鞭の男の頭に当たる。これで戦闘は終わった……はずだった。

しかし、棍棒が当たったのは鞭の男本体ではなく、残像だったのだ。そう。鞭の男は棍棒を振りかざして甘くなった大男の脇腹をめぐらして、人間離れたスピードでダッシュしたのだ。そして鞭の男は見かけからは想像がつかない怪力で大男を軽々と持ち上げると、まるで紙を放っているかのように地面に投げつけた。激闘は終わった。

素晴らしい。これが、戦いのプロか……。

ジャッキーは、自分の力量の乏しさを改めて痛感した。

「どうだ？ ジャッキー、参考にはなったか？」

「はい！ もちろん！」

「そうだな。二人とも、攻撃をした後間髪をいれずに次の攻撃に移っていた。つまり、ツメの素早さが、戦闘にも大切になってくるってことだな」

アックスが、ジャッキーが今言おうとしていたことをすべて代弁してしまったため、ジャッキーは少し不機嫌になった。

そのせいで、うっかり前を見ていなかったのがうかつだった。ジャッキーは、向かい側から歩いていた人にぶつかってしまふ。

「くっ！」

「きゃっ！」

急いで、ジャッキーにアックスが駆け寄る。

「ジャッキー！ 大丈夫か！？」

「ええ、何とか……」

ジャッキーはとっさに前を見た。

「あれ？ あなたは……」

ジャッキーの前にいたのは、栗毛色の長い髪に、空のように青く澄んで輝く瞳、整った容姿をした美少女だった。

第二十一章 闇取引

「ジャツキー、ジャツキーね！」

女性はそう言いながら、ジャツキーに抱きついた。あまりに唐突だったため、ジャツキーは後ろによろめいてしまう。

しかし、なぜか倒れるようなことはなかった。急いで体勢を立て直す。そしてジャツキーは後ろを見る。そこにはアックスがニヤついて、つつかえ棒になっていた。

「ジャ、ジャスミン……？」

ジャツキーは半信半疑の声で言った。

無理もない。ハルドベルクでジャスミンと会った時、ジャスミンはジャツキーのことを「ジャツキーさん」と呼んだ。さつきは「ジャツキー」と呼んだのに……。それに、ハルドベルクの際は敬語だった。あまりにも、あの時のジャスミンと違って。ひよつとして、このジャスミンはハルドベルクの時と違う人物なのだろうか。アックスは相変わらずニヤニヤしながら、いやらしい目でこちらを見ていた。

「そうか。そういう関係だったのか。ジャツキー、よかったな」

「違つんです！ これはそういうことじゃなくて……」

ジャツキーは、助けを求めるようにジャスミンを横目で見た。しかし嬉しそうに笑っているだけ。

仕方ない奴らだな……。

ジャツキーはあきらめた。

そんなことをしているうちに、日が暮れてしまった。仕方がないので宿屋に泊り、次の日に出発することになった。

出発の朝。アックスが、「二人で散歩にでも行ってきたらどうだ？」と提案した。アックスがそう言った理由は言うまでもない。ジャツキーは速攻拒否しようとしたが、その前にジャスミンが一も二

もなく賛成してしまったため、結局行くことになった。

しばらく二人は、何も話さなかった。二人とも顔をリンゴのように赤らめてしまい、一緒に街を歩くことに抵抗感があるらしい。無言のまま歩き続ける。しかし、終点にはコロシウムがあり、そこで行き止まりだ。

「仕方ない。帰ろう」

「そうだね。……あつ、私近道知ってるんだ！　そこから帰ろうよ！」

さつきまで葬式の参列者のようだったジャスマンの顔に笑顔が戻った。

ジャッキーはジャスマンについていく。すると、今まで嗅いだことがないいい匂いがした。そして、笑顔をまき散らしながらスキップするジャスマンに見とれてしまった。

ふと、ジャッキーは自分が足を止めて、ぼつとしていたことにやっとなづいた。でも、それくらいジャスマンという美しい世界に見とれ、引き込まれていたのだ。

「ジャスマン！　誰がいる！」

ジャスマンが入ろうとしていた細い路地に人がいることに気づいたジャッキーは、ジャスマンの手を引っ張った。そして、建物の屋根の影に隠れた。体が密着していて、心臓の鼓動が大きく、激しくなっていく。体が芯から熱くなる。お湯が沸騰したかのようなだった。何とか気を紛らわそうと、ジャッキーは男たちのほうを見た。そして服装を見て気づいた。

底なし湖の時の奴らだ。

すると、敵のボスらしき人物が言った。

「克蘭スは、底なし湖のミッションを失敗したのか？」

「はい。何でもただのガキに苦戦し、最後は水龍にあっけなくやられたらしいです」

「ただのガキ」とはジャッキーのことだろう。ジャッキーは怒りで拳を握りしめた。

「ふん。まだまだだな。まあ、お前らは俺について来れば心配いらん」

ボスらしき人物は胸を張った。世界の大王にでもなったのかとも思わせるほど、自信に満ちた声だった。

「この街は格闘家がゴロゴロいるらしいな」

「まさしくその通りでございます。正義の味方を豪語し、我々が街を襲撃すれば、強敵になることはまず間違いないでしょう……」

「馬鹿者！」

ボスらしき人物は怒鳴った。その剣幕に、ジャスミンがひるんでしまったようだ。

「私に強敵などはない！ どんな相手が出てこようと、この鉄槌で懲らしめてくれる！」

「申し訳ございませぬ」と、部下だと思われる男が謝罪した。

「……まあ良い。しかし、それなりの実力を持ち合わせているやつらなら、有効利用させてもらう価値はあるな……」

男は不敵な笑みを浮かべた。

「なるほど。そんなことがあったのか……」

アックスが二人から事情を聞く。

「あつ」と、ジャスミンが何かをひらめいたような声を出した。

「これは何とかしないとイケないことだね。それなら、頼りになる人を知ってるわ！」

第二十一章 闇取引（後書き）

次回、新キャラが登場です。

第二十二章 トロント隊長

「こつちよ」

ジャスマミンが、ジャッキーたちを案内したところには、長身の男性がいた。

歳は、3、40歳くらいだろうか。至って普通な端正な顔立ちに、肩にかかるほどの長髪。両肩は鎧のごとくがっしりとしていて、全身に黄土色のローブを羽織っている。足も長くてアックスはびっくりしていたが、ジャッキーはその足の上につけてある、長剣に注目していた。

「この人が、幻想世界を守る『白騎士団』の、トロント隊長。私の父親よ」

ジャスマミンは、騎士団の隊長が父親であることに、鼻が高いようだ。

早速、ジャスマミンは先ほどの男たちの会話を隊長に説明した。

「そうか、そういうことなら任せておけ」

「あの……ちょっと質問いいですか？」

こんな時に質問するのはおかしいと思うが、ジャッキーは自分自身の好奇心に勝てなかった。

「なんだ？ 私に答えられるようなことなら、何でもいいぞ」

「あの、隊長の腰につけてるその剣、すごく魔力を感じます。詳しく教えてください」

「そうよ、ジャッキーは魔法の修業をしているの。教えてあげて」
ジャスマミンが助太刀してくれた。正直、ジャッキーはあまりの嬉しさに飛び上がりたくなった。

「知りたいか？ ジャッキー君。では、教えてあげよう」

「ごほん、と咳払いをし、間をとってから隊長はゆっくり話し始めた。その行動と言い、言動と言い、すべてにおいて隊長の真面目な人柄がうかがえる。」

「こいつは、光の魔剣『ファンタジア』。私が、少年時代に祖母の墓の近くに置いてあるのを発見したんだ。こいつは、祖母の形見であるうえ、切れ味が抜群である代物なのだ」

「ちなみに、『魔剣』っていうのは、魔力が込められていて通常の剣よりも攻撃力が高い剣のことの指すのさ。ジャッキーの『水剣』みたいなもんだよ」

アックスが、堂々と自分の博識を披露する。偉そうな人が大事な話をしているのに、勝手に話し出すとは何様のつもりだ。そう思ったジャッキーは、思わず吹き出してしまった。

しかし、隊長はアックスの発言にも何事もなかったかのように笑顔で応じた。

「そうだな、アックス君の言うとおりだ。私は、この剣のおかげでここまでたどり着けた。ご理解いただけただけかな？」

ジャッキーは、納得した様子で「はい」と答えた。

「よし、では今日中にも白騎士団員をできる限り集める。待っててくれ」

この人だったら頼れる。心強い存在だ。

いよいよ決死のバトルが始まる。今の自分の必要なもの、それは実戦経験だろう。ジャッキーは、何気なく空を見上げた。そして狂ったような太陽のまぶしさに、目がくらんでしまった。

翌日、トロント隊長は仲間たちを連れて再びやってきた。

しかし、バトルが始まるのなら、関係ない住民を巻き込んではいけない。ここで、策士のトロント隊長はメディアをうまく使い、住民の避難を進めた。素人なら不可能だが、トロント隊長は自分の地位をうまく利用して、ずかずかと新聞社などに入っていく。現時点でこの街は、大統領や首相、国王などよりもトロント隊長が一番勢力を握っていただろう。

ジャスミンや白騎士団の大半は、住民の避難を手伝うため、別れることになった。それを隊長から聞いて、ジャッキーはがっかりした。その姿は、しおれた花だった。それもそのはず、ジャスミンは別れの言葉もなしに行ってしまったのだ。無理もない。

アックスは、落ち込むジャッキーの姿を見ながら、ニヤニヤしていた。

「ジャッキー。今は恋人のことは忘れて、戦いに集中しようぜ。これが終われば、またいくらでも会えるって」

普段のジャッキーなら、これを聞くや否や、陸上選手のごときスピードでアックスに飛び掛かっていただろう。しかし、ジャッキーはこれを聞いて逆に吹っ切れた。

「そうですよ、アックスさん！」

「避難……とは、あいつらも派手なことするじゃねえか」

ジャッキーとジャスミンに、この間話を盗み聞きされていた男が言った。

「これで最高の舞台ができましたね」

部下の興奮した声に、ボスは「ああ」とだけ答えておいた。

「さてと」

ボスは立ち上がると、部屋の中央から窓際に足を進めた。そして、薄ら笑いを浮かべた。

「ファイトタウンの“デスゲーム”の開幕だぜ。楽しませてもらうや」

第二十二章 トロント隊長(後書き)

次回から、バトルシーンです。

第二十三章 ファイト・タウンの戦い

一般市民の避難もほぼ終わり、あとは戦いの時を待つだけになった。

ジャッキーはアックスと顔を見合わせ、そして安心した。何度も感じたが、アックスは心強い味方だ。ここまで自分のために尽くしてくれる人は、世界中を探しても数人いるかどうかだろう。

二人と一匹は、トロント隊長が借りてくれた施設でその時を待っていた。だが、待つ必要はなかった。そろそろと、湖の時の連中が出てくる。それはこれから戦場に駆り出される兵士のように、暗い顔だった。

「ジャッキー、行くぞ！」

「はい！」

二人は、魔法で壁を突き破って街に出た。案の定、敵はこちらに注目した。

「いたぞ！ 殺せ！」

罵声が飛び交う中、ウイングは二人を背中に乗せ、宙を走った。

「こらあ！ 降りてきやがれ！」

「……だそうです、アックスさん」

ジャッキーは苦笑してしまった。アックスは、余裕をこいている。本当に降りていいんだな？」

「ぐだぐだ言つてねえで、さっさと降りてきやがれ！」

「降りたら死ぬぞ？ それでもいいのなら……」

アックスは言い終わらぬうちにウイングから飛び降り、杖を取り出して氷のかたまりを生み出した。そしてそのかたまりは光を強く発し、突然細長いものが四方八方に伸びた。氷の槍だ。

アックスの魔力によって狙いが定まっており、ほとんどの槍は敵の心臓を貫くか、胴を真っ二つにしていた。運よく槍をかわした者も、次の瞬間には地面に当たってはじけた氷の刃に貫かれ、倒れた。

辺りは透明な美しい世界になりかけたかとも思われたが、すぐに血の舞う戦場へと化した。

ジャツキーもそれを指をくわえて見ているわけではない。すぐに水剣を出すと、近寄ってきた敵に振り下ろした。剣自体の威力もかなりものだったが、ジャツキーの踏み込みによってスピードも切れ味も強化される。まさに鬼に金棒。剣は敵の脳天を直撃し、そのまま真つ二つにかち割った。

その隙を狙って敵は後方から魔弾を放つが、ジャツキーは慌てない。すぐさま体勢を立て直しながら体の向きを変え、魔弾を落ち着いてはね返すと、猛スピードでダッシュし敵のふところに潜り込んだ。敵があわてて体勢を崩したところで、苦も無く心臓を貫いていく。ジャツキーの剣技というよりは、ほぼ敵の自滅だった。

ウイングも、角で相手の数を着実に減らしていく。だが、どういうわけかトロント隊長の姿が見えなかった。ジャツキーは余裕が生まれたため、戦いながらアックスに質問をぶつけた。

「アックスさん。トロント隊長は、どこに行っただんですか？」

「さあな。おそらく、避難が完了していない住民がいなか探しても行っただらう」

その言葉が終わるか終わらないかというところで、敵は攻撃をやめた。今更ながら、勝ち目が無いとでも思ったのだらう。確かに、残りの敵の数は数えられるほどだ。ジャツキーは、一瞬だけ肩の力を抜いた。

ついに敵は後ろを向いて逃げ出した。ウイングが追おうとする。

だが、アックスがそれを手で制す。

新しい敵が、来た。

ファイター

それは、驚いたことに格闘家たちだった。こんなところに、なぜ……？

突然、格闘家の一人がウイングに近づき、棍棒を振り下ろした。それをウイングは難なくかわしたが、その目つきは明らかに動揺していた。

「アックスさん、なぜ格闘家たちは、あいつらの味方をするんですか？」

「わからん」

アックスも首をかしげている。

「例えば、あいつらに金をもらってたりとか？」

「でも、この街の格闘家たちは優秀なうえに、正義感が強いんです。だから、お金を積まれただけではそう簡単には動かないと思います。きつと、裏があるんですよ……」

ジャッキーが冷静に分析する。しかし、その“裏”は神秘のヴェールに包まれて、謎だった。

驚いたことに格闘家は ウイングの、魔法で強化された角での一撃を、棍棒で受け止めた。明らかに苦しんではいるが、それでもウイングの攻撃を魔法なしで受け止めるなんて、無理がある。ジャッキーはそれに絶句した。

ジャッキーの水剣も、棍棒で受け止められた。三人に囲まれ、矢継ぎ早に次から次へと攻撃が繰り出される。ジャッキーは、いつの間にか防戦一方になっていた。

アックスも氷の槍が通用しなくなったことで、より魔力の消費が激しい炎の魔法を使わざるを得なくなった。これでは、長期戦にでもなると最悪の事態が待ち受けることになる。

敵の攻撃を、何とかすんでのところまで避け続けるジャッキーは、ふと思った。

自分は勇者なのに何もわからないし、アックスさんも戦いに集中していて今は動きを封じられている。それならば、ウイングなら何かわかるんじゃないか……？

それならば、行動せずにはいられない。すぐに水壁を生み出し、しばらくの間格闘家たちの動きを制限する作戦に出た。

自分は水壁の外に逃げ、ウイングに杖を向ける。

「トルー……」

「ジャッキー君、アックス君、ウイング！ 今帰ったぞ！」

呪文は途中で切れてしまった。トロント隊長が帰ってきたのだ。

そこで格闘家たちはそれを見逃さない。今来たばかりで何もわからないトロント隊長を倒すなら今だ。格闘家は水壁を破り、五人ほどトロント隊長に向かっていった。

「何？ 何が起こってるんだ？」

「隊長、逃げてください！！」

まだ戦闘準備が整っていない隊長に、棍棒が振り下ろされた。

第二十四章 魔剣ファンタジア

「隊長、危ない！」

ジャッキーがそう叫んだところでもう遅い。隊長は、まだ起きた直後の人のように呆然と突っ立っている。どうにもこうにも、隊長は運命から逃れられないのだ。

だが、敵が棍棒を振り下ろしたところで、隊長の表情に変化があった。

さっきの呆然とした表情から一転して目の奥に火花がとまり、隊長は棍棒をよけるどころか、逆に敵に向かって踏み込み、攻撃態勢を表した。次の瞬間には魔剣を引き抜き、すんでのところではじき返した。実に見事な身のこなしで、動きは体操選手のように柔らかく、それでいて力強かった。格闘家もかなりの筋力を持ち合わせているのに、それを一瞬にしてはね返す。熟練した歴戦の剣士なのだ。

次の男が飛び掛かってくるが慌てない。軽くバックステップを踏んでかわすと、続いて横から斧を持って殴り掛かってきた男に向かって剣を一閃させる。斧は先の部分が吹っ飛んで格闘家二人の後頭部を直撃し、紅に染め上げた。

吹き上がる血のごとく怒り狂った男は、ドロップキックを放った。至近距離からの攻撃で、さらに後ろからも鞭を持った男が来ていたため、さすがにかわせないだろう。格闘家も、ひいてはジャッキーまでもが、そう思っていた。

だが、隊長はドロップキックを繰り出した男の首を難なく斬り落とし、さらに後ろから鞭をふるった格闘家には鞭を左半身の体勢でかわし、そのまま踏み込む。男はもう恐怖で鞭を落とし、寒いのかと思わせるほど体を震わせた。隊長は容赦しない。体を頭から両断し、男は血の噴水をあげながら倒れた。

隊長を狙った最初の軍勢は、わずか数十秒で全滅してしまった。

すぐさま残りの格闘家たちが、もうジャッキーとアックス、それにウイングは無視し、隊長だけを狙って駆け出した。隊長は数秒のインターバルも見逃さない。ジャッキーに声をかけた。

「ジャッキー君、すまない。魔法の途中だったな。俺はこのごろつきどもをきれいに掃除するから、その間に魔法を使ってくれい」

ジャッキーはそのことをすっかり忘れていた。それほど、隊長の戦いぶりが素晴らしかったのだ。ウイングに杖を向けた時、また二人の悲鳴が聞こえた。

「トルース！」

すると、ウイングと一体化したような、言葉では到底表すことができないほど、不思議な感覚を覚えた。まるで、何かに吸い込まれていくような感じだった。

「ええつと、……ジャッキー、格闘家達は何者かに操られている。きつとクランス級のボスがいるのだろう……なるほど。じゃそいつを倒せば」

「この街は救われる、ってわけだな」

アックスがジャッキーのセリフを奪い取る。

「ジャッキー、行け。お前ならきつと倒してくれるだろう。俺は隊長の手伝いをするから。お前一人だけでも行けるはずさ」

「よし、ウイング」

ジャッキーはウイングにまたがった。

「よろしく頼みます！ 隊長、アックスさん！」

「おう！」

答えたのは隊長だった。すでに隊長のまわりは血の海ができていて、それはところどころからしぶきを上げ、激しく波打っていた。

ウイングは迷いもなく駆け出した。すると、真っ赤な海からひときわ大きな波……いや、アックスの炎が派手に上がった。

ウイングはそのボスとやらが出している魔力がわかるようで、曲がり角に来てもほとんど迷いなく進んでいく。

あまりにハイペースで進んでいるのでジャッキーのほうに心配になつてきたほどだ。

誰もいない町は森閑としており、夜のように暗くて異様な雰囲気を感じ出していた。建物も、見方を変えてみれば化け物にも見える。まるで、町全体が一種の異空間になつていているような感じだった。

時々派手に赤い柱が上がるのが、遠くからでもよくわかる。きつと、アックスがやらかしたのだろう。

アックスさん、ずいぶん派手にやらかしてるな。

ジャッキーは自分も暴れたいという衝動を抑えながら、今はウイングに任せてその時を待っていた。

「来た……か」

男……いや、格闘家たちを操っている催眠術師は、建物の前まで来たウイングとジャッキーを見、口元をゆがませた。面白くなさそうな表情をしながら、催眠術師は一人でこうつぶやいた。

「いくら水龍を倒したからと言って、この私は倒せぬだろう。私はクランスなんかよりも、格段に戦闘力は高いからな……」

ジャッキーとウイングが、階段を駆け上がってくる音が聞こえてくる。

「まあ、せいぜい久しぶりに私を楽しませてくれたまえよ……ガキ魔術師さん」

「見つけたぞ！」

ジャッキーが部屋に飛び込んできた。遅れてウイングも入る。

「お前が組織のリーダー的存在で、格闘家たちを操る催眠術師だろう？」

「……いかにも」

そう言った刹那、催眠術師はマントを翻しジャッキーに杖を向けていた。

第二十五章 催眠術師

「水龍は倒せても、私は倒せん。食らえっ！」

その瞬間、催眠術師の杖先から光が放たれ、ジャッキーの目前まで迫ったかと思うと、突然巨大化を始める。そして数秒後、その魔法が真の姿をあらわにした。

糸につるされた、巨大なコイン。そう、それはまさしく催眠術をかけるときに使うものだった。

催眠術師の杖の動きに合わせて、それも右へ、左へ往復を始める。ジャッキーは杖を向けたまま、反射的に目をつぶった。一角獣の杖が、きつと何かを起こしてくれる。今はそれにかけるしかなかった。しかし、催眠術師はジャッキーを絶望的状况に陥らせる一言を發した。

「そんなことをしても無駄だ。俺の催眠術は伊達じゃないからな」
ジャッキーは目を開けた。何と、コインから青色の光の球が發せられているではないか。しかもその光は、不規則に空中を漂い続ける。これでは、避けようにも避けられない。その光景は刃よりも鋭く、ジャッキーの希望を打ち砕いた。

全身の力が抜けていく。ジャッキーはただ、杖を催眠術師のほうに向けたまま啞然としていた。もはや考える気にも、避ける気にもなれない。光の球が一つ、ジャッキーに近づいた。催眠術師はもはや勝ち誇った表情である。無理もない。

しかし次の瞬間、催眠術師は、「な……」と言葉を詰まらせた。見ると、一角獣の杖は青い光の球を吸収し、無効化させていた。ジャッキーの周辺に近づいた光は、まるでネオジム磁石に引っ張られるクリップのように一角獣の杖に近づき、弱々しく消え失せた。これには、ジャッキー自身も「凄……」とつぶやいてしまったほどだ。

すぐさま光弾を放つジャッキー。催眠術師の身軽さによりかわさ

れてしまったが、催眠術師がジャツキーのほうに振り返った時には、もう二発目の光弾が襲いかかっていた。

すぐに催眠術師は横っ飛びにかわすが、ジャツキーは魔力の残量を気にせず光弾を放ち続けるため、なかなか攻撃のすきができない。部屋は光弾のおかげでもものの破片が嵐のように巻き上がり、何も見えない状態だった。が、一角獣の杖が、催眠術師のもとへ光弾を導いてくれる。ジャツキーはもう大助かりだ。

時々催眠術師は、何も見えない状態を逆に利用しかろうじて残っている物陰に隠れるが、ウイングがそれを見抜いていたかのように、角で襲い掛かる。催眠術師はたじたじだった。

そのうち部屋にあったものはすべて壊され、小高い山になっていた。その山の上に催眠術師が、危ない足取りで立っている。この次のジャツキーの光弾は、催眠術師に直接当たるか、当たらなくても山に当たれば山が崩れ去って敵は生き埋めだ。催眠術師、万事休すである。

一方のジャツキーはもう余裕の表情で、調子に乗っている。

「さあ、もう降参したらどうだ？」

「ちっ、この小僧目が……」

催眠術師は唇をかねて悔しそうだ。

「とどめだ！ ライト・イン！」

天地が翻ったかのような光が部屋を照らし出し、次の瞬間山は崩れ去っていた。かなりの時間を使って、爆音と閃光はなくなった。

しかし、催眠術師が横たわっているであろう場所にあったのは、窓から飛び降りる催眠術師の姿と、それを追いかけるウイングの姿だった。

ジャツキーは一瞬、何が起こったのかわからなかった。無我夢中で放った光弾が、あっさり無駄になったという絶望からか。はたまた、調子に乗りすぎて周りが見えていなかったという反省からか。

ようやく状況を飲み込むと、ジャツキーはウイングたちを追いかけて窓から飛び降りた。

催眠術師はメインストリートを風のように駆け、扉を破ってコロシアムの真ん中に陣取った。

「ふう。狭い部屋の中じゃ本気が出なかったよ。ようやく広いところに出れた」

これまでの劣勢が？のような表情だ。さっそく、杖先から巨大な闇の魔球を放ってきた。

ジャツキーは水壁を出してはね返そうとする。だが、魔球は水壁を無視し、ジャツキーに向かってきた。

ジャツキーは動揺を隠せなかった。かの水壁をもつてしても、相手の魔法を止められない。この非常事態への対応は、この若く小さな少年には難しすぎる課題だった。

だが、ジャツキーは落ち着いていた。水壁のおかげで、魔球は幾分速度は遅くなっている。シールドを張り、今度こそはね返すことができる。誰もがそう思っていた。そしてジャツキーの杖先から放たれたシールドは、その期待に込めるかのようにどっしりと構える。隙はどこにも見当たらない。

魔球はシールドと正面衝突した。普通なら、シールドが勝って魔球は術者のほうに跳ね返っていくだろう。だが、現実は違った。

シールドは紙のように簡単に突き破られ、魔球はジャツキーの眼前に躍り出た。もはやかわす余裕などない。衝撃波が爆発し、ジャツキーは跳ね飛ばされた。

空中を舞っているときも、ジャツキーは状況が理解できなかった。ただ無心になり、痛みも、悔しさも感じなかった。体中の力が抜けていく。手も足も力なく垂れたジャツキーの姿は、誰が見ても「情けない」と感じるだろう。だが、ジャツキーは屈辱を感じなかった。

コロシアムの壁を突き破り、ジャツキーはメインストリートまで投げ出された。そこで、ようやくジャツキーは背中に“痛み”を感じ

じた。

第二十五章 催眠術師（後書き）

次回、新技登場&ファイト・タウンの戦い編最終回です。

第二十六章 シールド

「いてて……」

ジャッキーは、ぶつけた背中あたりをさすりながら起き上がった。

「水壁も、シールドも駄目なんて……」

ただただ、思考回路が戻った今は、そのことに絶望するしかなかった。あれだけの威力を誇った水壁が、一角獣の杖の魔力でかなり強化されていたシールドが、紙も同然だという風に破られたのだ。誰だって動揺を隠せないだろう。

街のはずれから、また炎の渦が舞い上がった。

「そうだ、アックスさんやトロント隊長だって頑張っているんだ……」

そう思うと、あきらめるにもあきらめきれない。

「行かないきゃ……」

ジャッキーは、催眠術師によってぶち破られたコロシアムの扉をゆっくりくぐりながら、ふと考えた。

もしか、自分に勝ち目などないのではないか。

確かに催眠術は一角獣の杖が吸収してくれた。だが、あの魔球は破壊力が底抜けに高い。今の状態のまま立ち向かっても、倒されるだけではないのか。

そんなことを考えながら、目はいつの間にか催眠術師をとらえていた。

「ほう、来たかクソガキ。待っている、一撃で楽にしてやるから」
催眠術師の杖先から、再び魔球が現れた。しかも、先ほどのものとは比べ物にならないほど大きい。コロシアムの半分は埋め尽くされた。おそらく、よけることは不可能だろう。無論、今から逃げてももう遅い。

それはまるで、ジャッキーの気力を吸い取ってしまうブラックホ

ールだった。

「死ね！」

地響きのような轟音とともに、魔球はジャッキーの元へ一直線。ジャッキーは杖を構えたまま、助けを求めるようにウイングを見た。最後の希望を。

とたんに、ウイングの角がクレインのアームのように不自然なく伸びていく。見ると、杖先からユニコーンの幻影が映し出されていた。ジャッキーは、脳内で思いついた言葉をそっくりそのまま叫んだ。

「聖なる一角獣の護り、ユニコーン・シールド！」

その瞬間、ユニコーンの幻影が一段と輝きを増し、そのまま光となって消え失せたが、代わりに自分の前に、光の盾が現れた。それは前のシールドのような力強さはないものの、しっかりと相手の攻撃を跳ね返してくれる。なぜか安心感があつた。まるで両親のように。

こんなに素晴らしい魔法があるのに、自らが非力なのでは元も子もない。ジャッキーは、杖先に全神経を集中させ、巨大な怪物を跳ね返すことだけを考えるようにした。

ほどなくして、催眠術師の魔球とジャッキーのシールドがぶつかった。ジャッキーは、杖先から伝わる衝撃に思わずよろけた。しかし、何とか踏みとどまり、シールドと一体化したように集中力を取り戻す。

まるで、ハンマーで頭を殴られたかのように、ジャッキーは頭がくらくらした。そして、何もかも奪い去っていきそうな勢いの風圧が、体にのしかかった。その中で立っているジャッキーは必死である。

そんなジャッキーの頑張りが通じたのか、シールドのほうはだんだん巨大化してきた。一方の魔球は完全に勢いを失っている。今がチャンスだ、と踏んだジャッキーは、最後の力を一滴残らず振り絞り、シールドを前に押すように杖を突きだした。

「いけえええええ！」

噴火が起きた。コロシウムから衝撃波が舞い上がり、妖精のごとく舞い散っていく。今までの激闘の余韻だ。閃光がまだ飛び交う中で、一角獣は堂々と立っていた。それは、ジャッキーの勝利を意味していた。

催眠術師は、自らの膨大な魔力を食らって死んだ。その瞬間、フアイト・タウンのすべての格闘家たちが我に返った。ジャッキーは、安どのため息をつきながら眠りについた。ずっと眠っていただろう。アックスたちが起こしに来るまでは。

「いや、本当に助かったよ、ジャッキー君。これでこの町は守られた」

「僕だけじゃないですよ。ウイングとか、アックスさんとか、隊長だって頑張ってたじゃないですか」

トロント隊長のべた褒めに対して、ジャッキーは少し照れくさそうな表情で頭をかく。

「そう言えば、ジャスミンはどこへ？」

アックスがわざとらしく、まじめな声で質問した。ジャッキーはそれをにらみつけたが、アックスは大して気にならないようだ。

「ジャスミンは、ジャッキー君に助けられた時、ジャッキー君の優しくて勇敢な人望にあこがれた。それ以来、おしとやかにふるまうのはやめて、無邪気で、積極的な少女に成長してしまったんだよ。父としては、喜ぶべきなのか……。とにかくそんなわけで、ジャスミンは使命を終えた後、どこかに行ってしまった」

「だってさ。残念だなジャッキー」

アックスは甲高い声で言ったが、ジャッキーは内心その通りだと思っただ。心に、何かすっきりしない雲が残っている。

「で、アックスさん。これからどうするんです？」

アックスは、急に考え込んでしまった。

「そうだな。元来た道に戻るなんてわけにはいかないし……先に進むしかないな」

「湖に戻らないのなら、ここから先はしばらく砂漠だよ」

トロント隊長が、二人を絶望の淵に突き落とした。アックスは黙り込んでしまう。しかし、ジャッキーにとってはチャンスだった。

砂漠には水がないと思われがちだ。どこかに、ドラゴンのしずくが隠されているのではないか？

そう思うと絶望も希望に変わる。枯れそうな花が、再び息を吹き返すかのように。

「行きましよう。アックスさん」

「……」

アックスは枝垂桜のように両手をたらし、勢いを失った目でこちらを見た。ジャッキーは強引に引く張る。

ファイト・タウンの中に、再び正気を取り戻した街の中に、いつまでもジャッキーとトロント隊長の笑い声が響いていた。

第二十六章 シールド（後書き）

次回、新章突入です。

ファイトタウンで習得した魔法
ユニコーン・シールド

第二十七章 迷宮の砂漠

「あ……暑い……」

ジャッキーの額に汗が滴る。それは瞬く間に乾ききった地面に落ち、黒い点を作り出していった。砂漠のことはファイト・タウンで聞いており、対策として薄い服を着用していたが、それはかえって逆効果だった。すぐに濡れて服は使い物にならなくなってしまった。太陽は輝く宝石のように燃え続け、それに比例するように砂漠も熱を発する。それが二人の肌を焼き、水ぶくれができた。地獄の苦しみを味わう。

「水が……」

ファイト・タウンで多めに手に入れた水は飛ぶように無くなり、空の水筒は二人を絶望の淵へ突き落とす。

やっとの思いであるオアシスにたどり着いたが、その水は濁っていてとても飲めるようなものではない。ジャッキーは膝をついた。「アックスさん……これ、本当にクリスタル・シティーに着くんですか？」

「それが、この砂漠は『迷宮の砂漠』、入るたびに地形が変わったり、方位磁針が使えなくなったりする不思議な砂漠なんだ。強大な魔力がかけられているとされる。この砂漠を生きて横断できるのは、上級魔法使いだだけだ」

その言葉を聞いたジャッキーは、谷底に沈んでいく気分だった。ウイングもうつろな目で、ほぼ土も同然となった水を見ている。やはり幻獣とて、環境の厳しさは受けてしまうのか。

ジャッキーたちはすぐにオアシスから離れ、出発した。しかし暑さは絶えず攻撃を繰り返す。太陽も二人に襲いかかる。ジャッキーはすでに足元がふらつき始め、砂はありじごくのようにジャッキーの足をすくう。目の前の砂漠が二つに割れた。意識も朦朧とし始めたらしい。ウイングが足を止めた。それにならうように、二人も進

むのをやめる。

とその時、ジャッキーの頭に不思議な声が響いた。

『進みなさい、勇者ジャッキーよ』

透き通った美しい声だった。高いソプラノの、まるでプロの合唱団のようだった。ジャッキーはアックスに聞こえないようにつぶやく。

「あなたは……誰？」

『私？ 私、何度かあなたにお会いしていると思うんだけど』

「僕はあなたに会った覚えなどありませんよ」

ジャッキーは言い切った。医師ががんを宣告するときと同じように。

『心外な。あなたが『勇者』であることを言ったのも私だし、あなたがマツツ家にいた時に旅に出るように言ったのも私よ』

「でも、あの時の声はおじさんでしたよ」

そうだ。確かにそうだ。あの時の声はソプラノではなく、どすのきいたテノールだった。

『そうね。確かにそうよ。でも、私はあなたが成長することに成長していく。声も変わっていくの。あなたを見守らなきゃいけないのよ。それより……』

天の声は一回言葉を切った。ジャッキーはアックスのほうを盗み見る。アックスは座り込んでおり、もはや話す気力もないらしい。

『このまますすぐ進めば、もうすぐで『砂漠の神殿』があるわ。』

そこに向かいなさい。私もついて行ってあげるから』

どれだけ上から目線なんだこいつは。そんなことを考えるうちに、ジャッキーの顔に笑顔が戻った。そしてまた歩き始める。

体中を波打つ痛みはさつきよりも激しくなり、まるでむち打ちを受けているかのようにだ。それでもジャッキーは歩き続けた。目の前に、希望の光があることを信じて。

一方のアックスは、歩き続けても変わらない目の前の光景に嫌気がさし、ここは地獄ではないかと一瞬疑ったほどだ。希望を取り戻

しつつあるジャッキーとは対照的に、心の中の雲は広がっていくばかりだ。

ジャッキーは、さっきの声の主について考えていた。ジャッキーにアドバイスをする天の声で、ジャッキーと二度と顔を合わせることはないだろう。だがさっきの声に聞き覚えがあった。誰だろう？ 分かっているはずなのに思い出せない。思い出そうとすると頭が痛くなってしまうのだ。

そんなことをしているうちに、ピラミッドのような建物が目の前に見えた。これが『砂漠の神殿』なのだろう。

素晴らしいほど綿密に計算された正三角形。規則正しく作られたこの神殿は、人工物であることを物語っていた。

「凄いな……入るか？」

アックスがジャッキーを見る。

「入りましょう。砂漠をさまよい続けるのももう飽きたし、ここに入れば何か分かるかもしれないんです」

入口はすぐに見つけられた。二人と、そしてウイングは、砂漠の神殿へ足を踏み入れる。

中に入ると、久々に涼しい空気を味わうことができた。

第二十八章 聖なる水

「しかし……涼しいだけで、のどは乾いたままだ。どこか水を飲める場所はないのか？」

アックスは愚痴ばかりこぼす。ジャッキーはなるべく体力を消耗しないように、無言のまま歩いていく。

神殿の中には人が通れるほどの、石畳の道があった。だがその横には、耳をつんざくほどの轟音を立てて、砂が濁流のように流れている。大昔、何かの儀式で使われていたような壁の模様も見つけられた。そこには、ラクダのような動物が描かれていた。わきに文字のようなものが書いてあったが、やはり読めない。

ジャッキーは興味深そうに見つめていたが、アックスは喉から手が出るほど水が飲みたいらしく、無関心だった。なぜジャッキーがこんなに興味深く壁画を見ているのか。それは、ジャッキーは、この旅で勇者としての役割を果たすことと同時に、色々なものを見て回って勉強したかったからだ。だから、ジャッキーは珍しいものには食い入り、その世界に溶け込んでしまおうのだ。

とその時、急にジャッキーの髪の毛が踊った。と同時に、ものすごい風圧で服が体に押し付けられた。なんだろう、と思って風上を見ると、土のかたまりがこちらに発射されていた。

ジャッキーたちはあわてて飛びのく。かたまりは地面にぶつかるのと、原形をとどめようとする間もなく破裂し、土が四方八方へと飛び散った。多分畏なのだろう。

「畏？ ということは……？」

「この先に何かあるはずですよ」

ジャッキーは畏にひるまず前に進んだ。その思いが伝わったのか、アックスも続く。すると、トンネルのような場所に入った。狭く、横幅はやつと人が一人通れるほど。高さは一メートル程しかない。

二人は団子のように体を丸めて進んだ。ウイングはアックスが魔法

を使って引つ張っている。

途中、ジャツキーの肩に冷たいものが落ちた。

「水……水だ！ ここには水がある！」

幼稚園児のように甲高くうれしそうな声を出したアックス。ジャツキーは、思わず笑ってしまった。

トンネルを抜けると、そこには泉のようなものがあった。

「あつたぞ！ 水だ！」

快晴の天空よりも澄んだ、ほぼ透明に近い色の水が、シャンデリアのような優雅さと光沢を生み出し、空気中に漂わせていた。水面には、黄金の金箔が映えており、その水の美しさをさらに際立てている。

アックスは夢中で駆け出したため、ギャグ漫画のように滑って転んだ。辺りは濡れており、赤子のように手足をじたばたさせている。ジャツキーは思わず笑ってしまった。

わめくアックスには目もくれず、ジャツキーとウイングは水のもっとへ向かった。

ジャツキーはその水を手ですくって飲む。すると、口の中で濃厚な味が広がりジャツキーを包んだかと思うと、悲惨な状態になっていた喉に爽快感を与えた。こんなにおいしい水、飲んだことがない。ジャツキーは体が軽くなり、飛べるんじゃないかと疑ったほどだ。ウイングはよほど疲れていたのか、おいしさを感じる暇などない、と言わんばかりに派手に水をまき散らしている。

腹は満たされたが、この水が誘っているのだろうか、まだ飲みたくなる。ジャツキーはもう一杯飲もうと水に手を入れた。

「うおおおおお！」

アックスが怒り狂った表情でこちらに向かってきて、ジャツキーは一瞬震えあがって石像のように動かなくなった。しかしアックスはジャツキーを気にせず、夢中で水を手で口に運ぶ。しかし、その途中で、アックスの水は虹のような光を出して消えてしまった。

「なんだこれ？ 飲めないぞ！」

いつもは冷静なアックスがこんなにも焦るとは。ジャッキーは、声を立てて笑ってしまった。

『それは聖なる水。悪しき者は飲めないわ』

さっきの声が、まわりつくようにジャッキーに付きまとう。気にせずジャッキーは二杯目をのみ始めた。

ふいに足音がした。

兵隊の行進のような、鎧の音がせわしなく聞こえ、神殿の地面を震わせる。足音はだんだん大きくなり、こちらに近づいてくるようだ。やがて、さっきのトンネルとは逆側の通路の向こう側から、大判のような輝きが見えた。

それは、明らかに魔法で作られたと思われる兵隊だったのだ。

第二十八章 聖なる水（後書き）

短いすね。

これからだいたい三十章くらいまで短いですよ。

第二十九章 狙われたアックス

「アックスさん。戦うしかないようですね」

アックスは、絶望のあまり口をOの字にしたまま動かない。

魔法の兵隊たちは騒々しい金属音と足音を、見事なまでに揃えて派手な行進を行う。まるでどこかの国の軍隊のようだ。

やがてジャツキーとアックスに近づくと一瞬だけ動きを止め、いきなり飛び掛かった。ジャツキーは杖を体の前に突き出したが、なぜかおおよそ百体はいる兵隊たちは皆、アックスのほうに飛び掛かっている。何せ百もの金属のかたまりが、一斉に同じ場所に向かったのだからたまらない。そのうちの何体かは押し潰され、後続もそれに突っかかって転んだ。まるで、バーゲンセールに集う主婦の集まりのようだ。ジャツキーは、戦闘中にも関わらず笑ってしまった。

驚いたことに押し潰された兵隊も、時間がたつと再生してまたもとの形に戻り、数歩退いて出番を待っているのだ。本物の兵隊の中でも、「知将」と呼ばれる人物のような賢明な判断だった。ジャツキーは、「人間なのではないか」と疑ったほどだ。

流石のアックスも一度にたくさん攻撃されては打つ手がない。剣撃を半分ほどかわすのが精いっぱい、よけきれなかった剣は肩や足に当たり、細長い傷を作った。血がアーチを描いて飛び交い、やがて泉に落ちて透明な水を少し赤くする。

ジャツキーはアックスを助けようと、自慢の水剣で金箔の群れに突っ込んでいく。しかし、俄然剣技はあっちが上だ。兵隊はジャツキーの剣を簡単にはね返すと、何事もなかったかのようにアックスに注意を向ける。何度かやってみたが同じだった。

不自然である。ジャツキーを無視し、アックスにはばかり攻撃するなんて。聖なる水だつて、ジャツキーとウイングは飲めたのに、アックスは飲めなかった。ついジャツキーは攻撃の手を止め、考え込んでしまった。すると、あの声がしゃべりだす。

『それはね、あの兵隊はやはり悪しき者を優先して攻撃するから。あなたはあとから狙われるわよ』

ジャッキーは背中を震わせた。あの数の、しかも相当な実力を持った兵隊と一人で戦うなんて、不可能に等しい。

今はとにかくアックスの援護だ。それしかない。ジャッキーは光弾を放った。魔力の消費は考えず、連発させた。アックスにはかり注意を向けている兵隊たちのだ真ん中に、見事ジャストミート。煙が上がったが、すべて純金の鎧にはじかれていた。しかも、鎧は傷つくどころか、逆に光沢を増している。光弾が、鎧を磨いてしまっただかのようにだ。

その間にも、アックスはどんどん追い詰められていく。ジャッキーは炎の魔法を使い始めたが、あの鎧は防火もできるらしく、当たった炎はすべて破壊され、水の中に消えた。出血は増え、アックスはその中でも特に出血がひどい右肩を左手で抑えながらの戦いだ。見る見るうちに左手は紅に染まる。熟れすぎたリンゴのように。

打開策がみつからず、ジャッキーは母親の探す迷子のように辺りを見回した。床は水でぬれた石畳。壁は大理石。あとは、血が点々となつて浮かんでいる泉だけだ。さつきと変わらない。

泉？　そうか、これなら使えるかも！

「水壁撃！」

泉から水柱が上がった。それは生き物のように急降下した後、兵隊を何体かさらってジェットコースターのように身をうねらせながら急上昇し、天井にたたきつけた。水圧と硬い天井に挟まれては、金属の鎧は紙も同然である。鎧がもげ、兵隊はバラバラに砕け散った。

「ジャッキー、いいぞ！　助かったよ！」

「ええ！　ではもう一度……」

そう言つてジャッキーは泉に杖を向けた、その時。

突然、水壁の魔法を使つてもいないのに勝手に水柱が立ち、ジャ

ツキーとウイング、それに兵隊とアックスがいる真上から、滝のよ
うな爆音を立てて水が流れ落ちた。何体かの兵隊は器用に回避し、
ジャツキーもすんでのところでウイングに助けられた。しかし、水
の勢いは収まらない。

ジャツキーは、トンネルの反対側に通路に放り出された。水圧は
すごく、とても近寄れない。アックスと分断されてしまったが、今
更戻るわけにもいかない。

「仕方ない……行こうか、ウイング」

しづしづ泉に背を向けて、足を踏み出した時、あの声がわめいた。
『まったく、聖なる水を勝手に使っちゃダメじゃない！ 怒ってる
わよ。ああ、私も帰るからね！』

第三十章 ミノタウルス

ジャッキーが通路を進み始めて間もなく、何か鉄のようなものが落ちる鈍い音がした。なんだろう、と思って振り向くと、通路と『泉の間』の間に、扉があつたのだ。人の重みに反応するつくりらしい。

このままだと出られなくなってしまう。そう思ったジャッキーは、咄嗟に光弾を放った。杖先から、暗い通路を照らし出す太陽が現れる。しかしそれは鉄壁に阻まれ、無残にも四方八方に飛び散った。

次にジャッキーは、水壁を放ってみた。が、結果は同じだった。水圧で扉が開くどころか、逆に水をおうむ返しにされる。ジャッキーはぎりぎりでかわしたが、ウイングはその水の直撃を食らってしまう。ウイングが体を震わせると、暗い通路に透明なダイヤモンドのような輝きが生まれた。

こうなってしまうと打つ手がない。仕方がないのでジャッキーとウイングは、先に進むことにした。しばらく行くとまた部屋があつた。

何もない部屋の真ん中に、古めかしい石板がポツン、とある。それは、あのエベレストよりも堂々とした威圧感を漂わせていた。文字があつたが、読めそうにない。

「トルース！」

甲高い声が部屋中に響いた。こだまが何度も自分に襲い掛かってくるようで、ジャッキーは居心地が悪くなった。

やっとこだまが収まったところで、ジャッキーは一息ついてから文字を読み上げる。

「えーつと、『勇者よ。聖なる者よ。貴公がここに導かれたのは必然だったのだ。今ここにその勇気を表し、神の間へ行け』………どういうことだ？」

ジャッキーは首をかしげる。と同時に、後ろからものすごい風圧

が押し付けた。その力は荒く、強く、持続時間も長かった。まるで大しけの波のようだ。

ジャツキーの右手から杖が離れた。その杖は回転し、反対側の壁にぶつかって力なく落ちた。いつもは頼りになるのに、今だけは一角獣の杖が、風前の灯のように弱い存在に見えた。

「一角獣の杖が……！」

ジャツキーは杖を取りに駆け出した。その顔は興奮により火照っていたが、次の瞬間には冷凍庫のように冷めた。

部屋が急速に冷えているのだ。いつの間にか足元の床は凍り始め、あつという間に部屋全体が透明な水晶のようになってしまう。ふと床を見ると、そこには何が起こったかわからず、啞然としているジャツキー自身の顔があった。そんな自分が憎たらしく思える。

すると上から、何かひびが入ったような嫌な物音がする。ジャツキーは反射的に音のしたほうを向いた。巨大なつららがひびに浸食されながら、今にも落ちそうなほど不安定なバランスを保っている。ジャツキーは横っ飛びによけた。着地と同時に足が滑り、すぐ後にさっきまでジャツキーの真上にあった氷の槍が落ちていた。鋭い刃のような破片が飛び散り、ジャツキーの腕に刺さる。透明な床に血が、やけに目立っていた。

痛みを感じる暇など少しもない。すぐにつららは、休むことなく降りかかってくるのだ。ジャツキーは立ち上がる間もなく、そのまま転がったままよけ続けた。しかし、それですべてのつららをよけられるはずもない。方向転換の自由も利かない。ジャツキーの転がった先の氷が割れ、ブラックホールのような穴がいつの間にかできていたのだ。落ちればジェット機よりも速く、地底へまっさかさまである。

もうだめだ。

ジャツキーは覚悟を決めて目を閉じた。

その時、あの夜のように角をドリルのように巨大化させ、清き水のように青く輝かせたウイングが、つららをすべて破壊し、地底に吸い込まれそうになっていたジャツキーを背中に乗せた。ジャツキーは必死にウイングのたてがみにしがみつく。ウイングがちらりとこちらを見る。

ジャツキー、遅れてすまなかつたな。魔力をためていたんだ。これが、ウイングの伝えたいことかもしれない。ジャツキーは、ウイングの研ぎ澄まされた刃よりも鋭くまっすぐなまなざしを浴びて、そう感じた。

この旅を通じて、今まで自分の身近にいたユニコーンを、さらに近い存在として感じ取れるようになってきている。ユニコーンと、自然と心を通わせることが、もしかしたらできているのかもしれない。

一角獣の杖を、今度はしっかりとローブの中にしまおう。すると、通路から光が漏れていることが感じ取れた。ジャツキーは導かれるようにそこへ入る。

次の部屋には部屋の中心に台座があり、『神の間』と書かれていた。エメラルドグリーンの魔法陣が、山奥の深緑よりも威圧感を放ち、きれいというよりは異様な雰囲気醸し出している。神々しい、という言葉ではとても足りない。

「勇者よ」

先ほどのソプラノの声とは一転、迫力と重みがある男性の声が聞こえた。

「よく、畏れを乗り越えここまで来てくれた。その勇氣、最後にこの神の間に示せ」

その声が終わるか、終わらないかといううちに、部屋中に蜘蛛の巣のように張り巡らされていた魔法陣が一点に集まり、光とともに黒い物体を生み出した。

毛むくじゃらな顔に、ウイングより短い太い二本の角。ごつこつしてバランスの悪い足。顔の割には大きい図体。そして右手には、

大きな斧を持っていた。
ミノタウルスだ。

第三十章 ミノタウルス（後書き）

次回、バトル！

第三十一章 魔法破壊

あのミノタウルスを前にしても、ジャッキーは冷静だった。自分
はあの水龍を倒したんだ。そう考えると、肩の荷が軽くなった気が
した。

まずは様子見。光弾を連発しながら動き回ってみる。驚いたこと
にジャッキーの杖から放たれた光弾は、すべてミノタウルスが持つ
ている斧に打ち返されて、こちらに戻ってくるのだ。プロ野球選手
の、それもかなりミートがうまい打者を彷彿とさせた。

返ってきた光弾は、ジャッキーが軽くかわす。光弾は後ろの大理
石にぶつかって、それを跡形もなく砕いた。

光弾は全く効果がないということが分かった。ジャッキーは、今
度は水壁を放つてみる。落ちてくる滝のような水流の勢いが、ミノ
タウルスを襲う……はずだった。

だが、ミノタウルスが斧を一振りすると、水壁はなぜか蒸発して
消えてしまうのだ。ジャッキー自身もかなり驚いた。なぜ……？

こうなると、遠距離での戦いは無理だとジャッキーは踏んだ。す
ぐに水剣を用意して突進する。攻撃がかわされても、矢継ぎ早に次
の攻撃へ移る。ファイト・タウンで脳が膨れ上がるほど学習したこ
とだった。

低い体勢からミノタウルスの深い懐に踏み込み、次の瞬間体勢を
起こして水剣を一薙ぎ。ミノタウルスも負けじと、それに反応して
斧を水剣にぶつける。二人にもっとも頼られている武器同士が、己
と主人のプライドをかけて激突する。……もちろん、水剣や斧に感
情や思考はないのだが。

ジャッキーは衝撃に耐えられるように剣を持つ両腕に力を込めた。
だが、剣と斧が激突した瞬間に、やはり剣は宝石のかけらのような
ものを辺り一面にまき散らし、そのまま消えてしまうのだった。

一瞬、思考が宇宙のかなたまで飛んで行った気がした。ジャッキ

ーの目が凍りつく。

無防備なジャッキーと、斧を構えるミノタウルス。この二人の至近距離での戦いの末路は、もはや言うまでもない。

頭のとっぺんから悲鳴にならない高い音を出して、ジャッキーは転がる。ミノタウルスは斧を大振りしたらしく、その風圧がジャッキーの髪をなでた。

もはや体勢を立て直すこともできない。ジャッキーは覚悟を決めて目をつぶった。ここまでの旅で、何度も「死」という危険に直面したが、そのたびに運よく命拾いした。宝くじの一等に連続で当たった気分だ。だが、そのまぐれも、いつまでも続いてくれるものではないのだ。

しばらく、さっきの氷よりも冷たく感じる床に倒れていた。何も起こらない。ただ聞こえるのは、ミノタウルスの斧と何かがぶつかり合う音と、生物が激しくうごめく音の二つだ。ジャッキーはゆっくりと目を開けた。

ウイングが、あの角を駆使してミノタウルスに立ち向かっていた。もはやこの幻獣同士の戦い、一瞬たりとも気が抜けない。それでもウイングは戦いながら、ジャッキーとのアイコンタクトを忘れずにとっていた。

ウイングが角を突くと、ミノタウルスが斧を器用に操って退ける。逆にミノタウルスが斧を振るい降ろせば、ウイングは軽いステップを踏んでかわす。超高速域で繰り広げられる、一進一退の攻防だ。

ほどなくして、二匹とも疲れたのか、自然と間合いが開いた。ミノタウルスは人間のように肩で息をしている。しかし、疲れているのに、その泉のように湧いている怪力は、一体なんなのだろうか。

一方ウイングは、体力の消耗を止める目的なのかどうかはわからないが、大きくいなないた。流石のミノタウルスも一歩退く。しかし、また両者のぶつかり合いは始まった。

ウイングの奮闘により、ジャッキーにも余裕が生まれた。あの斧について調べようと、再びミノタウルスに杖を向ける。

「トルース！」

真実魔法によると、あの斧は魔力を吸収してしまうらしい。幻獣などには効果はないが、魔法使いが杖から放つ魔法は、上級魔法も吸い取ってしまう。しかし、魔法を吸収できるのは、あくまで斧がミノタウルスの手中に納まっている間だけであって、それがミノタウルスから少しでも離ればたちまち効果をなくしてしまうようだ。そしてウイングは、今その杖を取り上げようと努力している。

ミノタウルスは体力が残りわずかなのか、足元がおぼつかなくなってきた。目の焦点は合わず、必死に息をしているようだ。まるで、この神殿の外に広がる砂漠の空気のように、熱く荒く強い息がジャッキーの顔にもかかる。

それを感じ取ったウイングは仕掛けた。わざと後ろに下がり、バランスを崩して転倒する。ミノタウルスは、チャンスだ、と思い無我夢中で駆け出す。「猪突猛進」という言葉だけではとても足りないくらいの勢いだ。

ミノタウルスをぎりぎりまでひきつけておいて、ウイングは床に倒れたまま転がり、すぐに体勢を立て直す。突進していたミノタウルスは勢い余って反対側の壁に激突した。そしてミノタウルスは、痛みに耐えきれず座り込んでしまった。ウイングはその後ろに接近し、背中に向かって角を突き出す。ミノタウルスは釣り糸にかかった魚、はたまた畏にかかった猛獣も同然である。

だが、ここで予想外の事態が起きた。

ミノタウルスが最後の力を残り一滴まで振り絞ったのか、半身を回転させウイングに斧を突き立てたのだ。ウイングも反応できない。双方ともに、相手の攻撃をもろに食らってしまったのだ。

ミノタウルスはウイングの角が背中に、ウイングはミノタウルスの斧が腹に突き刺さり、両者ともに力なく倒れた。血が洪水のように溢れ出し、辺りは真っ赤な海になる。

ウイングの白い滑らかな体が、けがらわしい自らの血に染まっ
ていく。ジャッキーはそれを、憎悪に満ちた表情で、愕然と見張っ
ていた。

第三十二章 相棒

ミノタウルスとユニコーン。生存能力や体の強さは俄然、ミノタウルスのほうが上だ。ウイングは深い傷を負っても立ち上がることはなかったが、ミノタウルスのほうは最後の力を振り絞りジャッキーに突撃してきた。もちろんかわせる程度の攻撃ではあるが。

ジャッキーは怒りに震えていた。旅の相棒を。自分自身を支える柱を失ったことは、ハンドルを失った車に等しい。

とはいえミノタウルスももう弱っていて、落ちている拳大の大理石のかけらでも投げれば倒せそうな状態だった。だが怒り狂ったジャッキーに、いつもの冷静な判断力はない。魔法が破壊されてしまふということも忘れ、ジャッキーはミノタウルスに杖を向けた。ミノタウルスは弱弱しくこちらを見るだけで、もはや自分自身の運命を悟ったのだろう。

「天雷招来！」

光の帯が天使のように優しく、しかし荒波のように激しく神の間を包み、それが大量の血の色と混じった色の、名画のようなコントラストを生み出していた。轟音と共に大理石の損傷は悪化し、しばらく部屋を大地震のような揺れが襲ったが、やがておさまった。

ミノタウルスが、死んでいた。

ミノタウルスがウイングの角に貫かれた時から、斧は主人に反応しなくなりごみも同然になっていたようだ。そうなると、この『天雷招来』という大魔法を食い止めるすべはない。しかし、ジャッキーには喜びなど微塵もなく、むしろウイングを失ったという悲しみにあとからとらわれ、膝について言葉を失っていた。

横たわり、見る者の心を安らげた優しい瞳は閉じたまま。横腹をぱっくりと開き、みじめにも生命のあかしである赤い液体をさらしている。しばらく聞こえていた荒い息とわずかな脈動の音は消えて

いた。

「勇者よ。その勇氣に免じて、貴公の願いを一つかなえてやろう」
戦闘が始まる前に聞こえた、神の声だ。ジャツキーはとっさに「
ウイングを生き返らせてください」と言おうとしたが、悲しみがの
どを詰まらせる。

「どうする？」もつとたくさんの魔力を与えてほしい』でも、『
世界の王になりたい』でも、『ドラゴンのしずくのありかを教えて
くれ』でもいいんだぞ？」

その言葉に、一瞬ジャツキーの体が反応した。ドラゴンのしずく
のありかさえわかれば、世界は救われる。また、神は言わなかった
が、『この幻想世界を、決して滅びることのない平和な土地にして
くれ』と言えば、混沌の時期もなくなるだろう。ただ。

ここまで未熟な自分についてきてくれ、救ってくれた相棒を見殺
しにできるか？

自分の旅を、無事にすぐに終わらせるか。それともウイングを生
き返らせるか。優柔不断なジャツキーは、そんな選択はできなかつ
た。ただ一つ思つのは、自分はユニコーン農場に生まれ、今こうし
てユニコーンと旅に出ている。なんとなく、自分の人生の行く先は
いつもユニコーンがついていることだ。これからもそうかもしれない。
それならば。

「ウイングを……元通りに……生き返らせてください」

後悔はなかった。人生の支柱を失っては、いくら世界が平和にな
ろうと、自分が豊かに生活しようとするにもならない。

「本当にいいのか？ 変えるなら今だぞ？」

「変えません。ウイングを生き返らせてください」

「分かった。いいだろう」

いつの間にか、再び部屋中に魔法陣が現れていた。その魔法陣は
今度はウイングに集まり、まわりの血を消し、ユニコーンの形を作

っていく。魔法陣は、ジャッキーにとつての希望の光だった。

やがて光が消え、元通りのウイングの姿になった。

「ウイング！ 生き返ったんだね！」

ジャッキーの嬉しそうな呼びかけにも、ウイングは首をかしげているだけだ。

「帰路は開けておいた。外は砂漠だ。では健闘を祈る。……必ず、世界を救ってくれることを祈る」

そう言うと、神の声はどこかへ消え去っていった。

「行こうか、ウイング」

泉の間へと戻ってきたジャッキーは、そこで驚くべき光景を見た。

「あれ……？ 泉が……」

泉への水の供給が止まっている。そればかりではない。泉の水が、先ほどより明らかに、赤く染まっているのだ。しかも、生臭い異臭を放っている。この水の正体は一つしかない。ジャッキーの脳裏に嫌な予感が走った。……そして、予感は当たった。

「アックスさん！ 大丈夫ですか！」

床に倒れていたのは、ウイングと同じように力なく両手両足を垂れ、身体中あちこちの切り刻まれたあとから血を流して倒れている、アックスだった。

第三十三章 血塗られた再会

「アックスさん……どうして」

自分よりも熟練している魔法使いであり、自分よりも強いアックス。そんな存在が、あっけなく倒されたなんて……。

確かに、あの兵隊には明らかに人工的に、たくさんの魔力が仕込まれており、数も多かった。だが、アックスはそう簡単には倒されないだろうと誰もが思うだろう。しかし今のアックスは、病人のように弱々しかった。

「出血がひどい……すぐに運ばなければ」

しかし運が悪かった。ジャッキーはまだ、治癒魔法というものを知らない。しかも外に出れば、灼熱の地獄のような環境だ。足場もシーソーのようにアンバランスなため、いくらウイングとてアックスを乗せて運ぶのは、決してたやすいことではない。しかも近くに街があるという当てもないため、このままでは本当にアックスの命が危ない。

「仕方ないよ。ウイング、何とかアックスさんを乗せて運べるかい？」

ウイングはしぶしぶ背中を向ける。そのあとジャッキーは、アックスが倒れているまわりの床を慎重に壊し、それごとゆっくりウイングの背中に乗せた。物体移動魔法は人には効かない。だから床を乗り物代わりにしてアックスを運んだのだ。

重い床が背中に乗せられると、ウイングは顔をしかめてこちらを見る。急いでジャッキーが、やはり慎重にウイングの背中にある“もの”をどかした。アックスはもう意識がないのか、いつもはしっかり力強く見開いている眼を力なく閉じていた。これはもう時間がない。

外に出るとやはりそこは熱風が吹き荒れる牢屋に等しかった。し

かし、前方には希望の光が見える。

街だ。

ジャツキーは鉛のように重たい体をゆっくりと引きずるようにして歩きながら、ウイングに乗っているアックスの様子を静かに見守っていた。ジャツキー自身もつかれているが、そんな弱音を吐いていたらここで旅は終わりだ。体中の力を絞りながら、必死に街を指して歩く。

ウイングの白い雪のような背中中は、アックスの血で真っ赤に染まっていた。それは本物の染物のように鮮やかだったが、それは生命の危機を表しているのだ。そんなのんきなことを言っている暇はない。

足の感覚がいつの間になくなっていく。疲れと危機感で、もはや足がありじごくに捕らわれているという感覚ではなくなったのだ。少し楽になった。だが、滴り落ちる汗は水分でありながらちっともありがたくなり、むしろジャツキーを不快感のどん底に突き落としているようなものだ。

何とか街についた。急いで病院に行き、アックスはそこで緊急入院した。

体中の疲れが一気に抜かれた。しかしまだ油断はできない。ジャツキーの近くで命の灯がゆらゆらと、弱く燃えているのだ。しかしどうすることもできない。ジャツキーはただ、奇跡を信じて祈ることしかできなかった。

ひとまずジャツキーは、自らを癒すために宿屋に泊ることにした。久しぶりにまともな食事を食べることができ、十分な睡眠もとれてストレスという呪縛から一気に解放された。しかしアックスのことを考えると、たちまち心に暗雲が広がってしまう。

次の日ジャツキーは、いまだ危篤状態に陥っているアックスを見舞いに行った。全身にチューブをつけられ、そこを通じて魔力や栄養分が投与されている。シューシューという魔力がうごめく奇妙な音が、ジャツキーの心の不安を大きくしていった。傷口には医師が

付きつきりで治癒魔法をしている。そんな医師たちの必死の試みを受けても、何の反応も示さないアックス。もしかしたら、このまま死んでしまうのではないかという被害妄想が、ジャッキーの頭の中をうろついた。

それから逃れるため、気を紛らわすために、ジャッキーは街を見て回った。

街の名前はクリスタル・シティーと言っただけあって、道路の隅のほうに、装飾として小さな宝石が組み込まれている。そればかりではない。行きかう人の持ち物にも頻繁に宝石がついているのだ。太陽の光に当たり、宝石は光のアーチを街中にかけていた。

しかし、やはりアックスの病態が気になる。しばらく街を観光しているうちに、やはりそのことがよみがえってしまう。結局病室の前に戻ってきた。

すると、なんだか昨日よりも病室の中が騒がしい。どうしたのだろう、と疑問を抱いてからすぐに、医師がジャッキーの前に出てきた。

「アックスさんの付き添いの方……ですよね？」

「あ……はい」

悪い知らせかもしれない。ジャッキーは、目の前が真っ暗になったり真っ白になったりしているような気がした。

第三十三章 血塗られた再会（後書き）

微妙なところですが……新章突入です。

第三十四章 救われたアックス

「アックスさんの容態なんですけど……」

心臓が口から出てきそうな、恐ろしい感覚に襲われた。どんな上級魔法を前にしても、この恐ろしさにはかなわない。そんな感じがした。

「よくなりました」

ジャッキーの体にかかっていた、鉄骨のような重いおもりがすべて抜けていくようだ。この街についたときに、何かが抜けていくような感覚を感じたが、その時よりも体の空気までもが、激しく抜けていくような感じた。今のジャッキーは、風船のようだった。

「あと一週間も休めばよくなるでしょう。……それにしても、あともう少しこの病院につくのが遅かったら、命が危なかったですね。出血があまりにも多かったもので」

医師は笑みを浮かべ、額に浮かんだねっとりとした汗をハンカチでぬぐいながら去っていった。

一方のジャッキーは、神殿から必死になってアックスを運んでくれたウイングと、懸命の処置をとってくれた医師に対する感謝の念に浸っていた。とにかく、アックスが救われたことをありがたく思わなければならぬ。

するとやる気が泉のようにわいてきた。心配することも今はなくなった。とはいえ、アックスが完全に復帰するまで、何もやらなければ体がなまってしまう。街に出て体を動かすことに決めた。

昨日少し街を観光していたが、アックスのことばかり考えていたためあまり街をよく見ていなかった。今日の観光で、道路のすみや人々の持ち物に宝石がたくさん住み着いているのは、宝石屋が異常なほどたくさんあることに直結していることが分かった。ジャッキーは、宝石の輝きにひきつけられたのか、そのことにかんりの興味

を抱き、とある宝石屋に話を伺う。

「すいません……僕は旅をしているのですが、どうしてこの街には宝石が多く出回っているのですか？」

店主は少し驚いた様子だった。

「ほう……混沌の時期に旅とは、度胸があるんですね……。あ、この街の近くには、洞窟があるんだよ。そこに行つてごらん。宝石で、暗い洞窟内も昼間のような明るさだ」

なるほど。

店主の言葉通り、ジャッキーは早速矢のような勢いで店を飛び出そうとした。それを店主に慌てて止められる。

「ちよつと待つて。その洞窟は、最近どうもおかしいからね」

「え？」

どうということなのだろうか。

「最近、地震も起こつてないのに天井の岩が落ちてきたり、地面に穴ができたりにしててすごく危険な状態なんだ。行くのは危険を伴う」

「それなら、僕がその原因を調べてきます！」

ジャッキーは今度こそ飛び出していった。あのプラス思考は、いったいどこから湧き出てくるのやら。

「ふ……元気のいい少年だなあ」

店主の声は、一人しかいなくなった店内にさびしく響いた。

その洞窟内は、やはりあふれんばかりの宝石により夏の太陽のようなまぶしさだった。

ただそんな中で、異変も起きている。地面のあちこちに、蜘蛛の巣のような地割れが起こり、天井からは今にも落ちてきそうな岩が、水をしたたらせながら不安定なバランスを取っていた。泣いているようだ。

しかも、それらが宝石によってより一層鮮明に見える。悲鳴を上げている洞窟の惨状がまっすぐ目に映り、ジャッキーは思わず目をつぶりたくなつた。

突然、地響きとともに低い轟音が聞こえる。暗闇を照らし出す光の結晶が揺れ、お化けのようで気味が悪い。その揺れは一時的なもので、すぐに収まった。

見ると、前方に先ほどまでなかった岩が突出している。明らかに不自然だ。人工的なもの……魔力がかけられているに違いない。ジャッキーはつばを飲み込んだ。一角獣の杖からも、普段は感じられない力が感じ取れる。

しかしジャッキーはひるまず、どんどん進んでいった。真実を確かめたいという思いは剣のようにまっすぐで、どんなものに出会おうとも曲がることはない。

狭い通路なところが続き、スズメの涙のように小さい息遣いすら、山びこのようによく反響していたのだが、ようやく広いところに出た。そこは、懐中電灯のように明るく洞窟を照らし出していた宝石が何か黒いものに阻まれていた。

それは、底なし湖やファイト・タウンで出会った宿敵たちだった。やはり切っても切れぬ縁なのか。

墨汁を塗りつぶしたような暗闇の中、ジャッキーがよく目を凝らすと、宿敵たちと対峙しているシルエットも見える。ジャッキーと同じようなローブに身を包んだ、絶世の美少女だった。

第三十五章 魔導師ジャスミン

「……ジャスミン！」

ジャッキーは、顔を燃え盛る炎のように紅潮させながら言った。
ジャスミンはそれを笑顔で返す。

「おやおや嬢ちゃん。助太刀が来てくれたようだね……ん？ お前は、確か底なし湖やファイト・タウンで、俺達の邪魔をしたガキだな！」

黒マントは、いかにも意地悪そうな眼を宝石にも劣らぬほど光らせる。

「ジャッキー、こいつらは奥の大水晶を抜き取って、悪いことに使おうとしているの。止めないとだめ！ 一緒に戦って！」

ここでだめと言う理由などこれっぽっちもない。ジャッキーは喜んで了承した。一方の黒マントの集団は、熱弁するジャスミンを見てニヤニヤ笑っている。

「おい嬢ちゃん。俺達は悪いことに使おうとしているんじゃないよ。今後悪い奴がこの大水晶を持ってかないようにするんだ。むしろいいことじゃないか？」

マントを翻した時に発生した風圧が、嫌でも頬をなぞって気持ちが悪いくらい。

奥を見ると、宝石たちがひしめき合って、大きな城を作り上げていた。彫刻よりも自然に、しかも綿密に作られた造形作品。思わず、誰もが足を止めて見入ってしまうような輝きがそこにはあった。

「大水晶を取ったら、災いが起こると古代の歴史書には書かれているのよ。それでもいいの？」

ジャスミンは少しもひるんでいない。その瞳はまっすぐ黒マントの悪しき集団を捕らえ、拘束しているようにも見えた。

「古代のことなんて、信用できないじゃないか。本当に起こったかどうかも分からないだし。それを信じるなんて、馬鹿らしいよ嬢

ちゃん」

相変わらず気持ち悪く笑っている黒マントの集団に我慢が出来なくなつたのか、ジャスミンはいきなり飛び掛かり、鬼のような形相と体操選手のような身のこなしを見せつけながら、黒マントの一人に飛び蹴りを食らわせた。さっきまでの余裕が一瞬にして吹き飛んだようだ。

「イテテ……見かけに似合わず乱暴だなあ。まあいいや。そつちがそのつもりなら、こつちも本気で行くぞ！」

黒マントが前方の大水晶を遮る。と同時に、ジャスミンは杖を構えていた。

ハイール・ブースト
「回転爆炎！」

目が覚めるような声にジャスミンの杖が応える。真っ赤な光の球が発生したかと思うと、一瞬で車輪のような形に変化した。それは回転を続け、次第に大きくなっていく。

ジャスミンの出したものは炎だな、とジャッキーはすぐに分かった。アックスの使用していた炎の渦よりも小型だが、威圧感だったらこちらのほうが上かもしれない。

炎はサルのようにすばしこく、黒いかたまりに飛び掛かっていった。炎はマントに燃え移る。マントが燃えているやつらは悲鳴に近い叫び声をあげ、意味もなく走り回っていた。

ジャスミンが炎を生み出していたインターバルの間に、何人かは回り込んでジャスミンに黒い弾を撃ちこんでいた。それをリーダーのように察知していたジャッキーはユニコーンのシールドで応戦。当たれば絶大な威力を発揮する魔弾も、ジャッキーのシールドの前には無意味だった。ジャスミンは助かったと思い、ジャッキーにウインクする。ジャッキーは、恥ずかしくて目を背けてしまった。ジャスミンから太陽のような光が差し込んでいるような気がした。

素早く追撃に移るジャスミン。消火に成功した数人をまとめて仕留めようと、今度は杖先から氷を放射状に発射させた。透明なとりでにつかまり、身動きができなくなったところでさらにそこから針

が出てくる。透明だったはずのその場所はだんだん血で赤く染まっ
ていき、鮮やかなコントラストを生み出す。

ジャッキーも負けてはられない。水剣を出そうと杖を構えたが、
十秒、さらには二十秒たってもまだ杖は反応を示さない。おかしい
な、と思つてジャッキーが杖を見たところ、一角獣の杖とまわりの
宝石たちが、異常なほどの光を発していた。

「……一角獣の杖が、新しい魔法を取得したのか！」

底なし湖とほぼ同じ感覚だ。今は一角獣の杖を通して宝石から力
を得ているようで、体の底から力が水のように湧き出てきたあの時
とは少し違う。いずれにせよ、アックスの言っていた「この杖は地
形に応じた魔法を覚える」というのは本当のことだと証明された。

頭の中で宝石たちがささやいているようだ。ジャッキーはその言
葉をそっくりそのまま口にした。

「大いなる宝石よ。その輝く光で、闇を封じ給え。悪しきものに天
誅を下し給え。エメラルド・クラッシュユ！」

杖先から、六角形で透き通った黄緑色に輝く、光が現れた。その
光は夏の木漏れ日のようにまぶしく、黒マントという闇をすっかり
掻き消してしまっている。すぐに直線となつて相手の目前まで迫る
と、爆音とともに閃光をまき散らしながら、地面を砕きそこからも
光を生み出す。ほとんどの敵は閃光の衝撃波に襲われ、気絶してし
まったようだ。この魔法は相手を死に追いやる致命的な攻撃ではな
いものの、それでも絶大な攻撃範囲と威力を誇る頼もしさだった。

ジャッキーもジャスミンも、宝石と一角獣の杖とジャッキーが作
り出した、絵画のように美しく、それでいて力強い魔法に見とれ、
終わった後も啞然としていた。しかしその沈黙は、誰かの足音によ
つて破られる。

「はは！ 見事だったな 拘束！」

二人とも、残っていたあと一人の敵の見えない縄のようなものに
つかまり、身動きが取れなくなつてしまった。ジャッキーは顔をし
かめ、さっきまでの興奮が？だったかのように冷たい脂汗を額に浮

かべた。

どつちらこいつは、ジャッキーの魔法の発動を分かっている、素早くどこかに隠れていたに違いない。

第三十六章 隠された罠

「くっそ！ 何だよこれ！」

ジャッキーは手足をじたばたさせようとした。しかし、動こうとすると身体中に電撃が走ったような痺れが広がり、動こうにも動けないのだった。

「拘束魔法……対象の動きを封じる魔法。お前たちはとても強い魔術師だ。だが、こつも身動きを封じられてはもう打つ手はあるまい。これでゆつくり大水晶がいただけな。おい、起きろ！」

拘束魔法の術者が、ジャッキーの魔法によつて気絶していた仲間たちを粗末に蹴る。蹴られた者はモルモツトのようにもぞもぞと起き上がった。

「さあ、邪魔者がいなくなつたところで大水晶をいただいちゃおうぜ」

先ほどまで元気なく倒れていた者たちが、途端に活気を取り戻してしまった。しかし今のジャッキーの目にはそいつらよりも、悔しそうに唇をかみしめるジャスミンの姿が痛々しく焼き付いていた。

自分に、ジャスミンを助ける力があつたら……。
そう考えると悔やんでも悔やみきれない。

一方、黒マント集団のほうに目を移すと、一生懸命に根元に衝撃波を放ち、大水晶を抜こうと頑張っている。表情は、悪人というところを全く感じさせないほど真剣そのものだ。こういう表情を見せられると、この真剣さをもつといいことに生かせよ、と思ってしまう。大水晶のまわりに、黒マントがひらりひらりと舞っている。大水晶が輝きを失っているようで、ジャッキーは心配になつてしまう。

しかしさすがは宝石の王。ちよつとやそつとの魔法はあつけなくはね返してしまう。衝撃波は素晴らしい威力を保つたまま大水晶の根元にぶつかつて火花をあげるが、それで終わってしまう。水晶は

元の形を少しも崩さず、かすり傷すら見受けられない。汗が少しずつ滴り落ち、大水晶の光に反射してまわりの宝石に負けないほどの輝きを放っている。

いったん攻撃がやんだ。黒マントたちの荒い息が洞窟内でこだまし、嫌でもジャッキーとジャスミンの耳に突き刺さる。無論、いやな気分になっているのは相手も同じなのだが。

一瞬の静寂が訪れる。ジャッキーはものすごい剣幕で衝撃波を放っていた黒マントの集団に見とれ、いつしか拘束から抜け出そうとすることも忘れていた。それはジャスミンも同じだった。いくら敵とはいえ、なぜかその表情に魅力を感じてしまうのだ。同じ魔法を使うものとして、当然なのかもしれない。

ふと、先ほど二人に拘束魔法を放った敵の司令塔がジャッキーの魔法によって割れた地面を見、何かを思い出したようにしゃべりだした。……いや、正確に言えばつぶやいた。

「ん……地面……そうか！」

洞窟中の岩をつんざくほど甲高い声だった。ジャッキーは耳をふさごうとして、またしびれを感じてしまうかと思ひ、やめた。

「お前ら、地面系の魔法使えるか？」

「使える」「ああ、使えるぜ」という言葉が、沈黙を切り裂いてあちこちで生まれる。

「それなら打つ手はある。いいか、この大水晶は堅く、おそろくどんな魔法でも攻略できないと思う。そこで、だ。地面を攻撃して、大水晶ごと掘り起こせ。この水晶がどんな深さだか知らないが、いずれにせよ魔法を使えばそれほど時間はかからないだろう……」

その言葉が終わると、黒マントの集団が杖を構えるのと、ジャッキーが「しまった！」と思うのが同時だった。地面が少しずつ切り裂かれていく。ジャッキーとジャスミンは、もう口を開けてその光景を見ているだけだった。

ほどなくして、「大水晶の最深部が見えたぞ！」という威勢のい

い声がどこからか上がった。狂気の集団が狭い洞窟内で飛び跳ね、叫び、喜んだ。もう耳をつんざくなんていうレベルではない。洞窟が崩れ去っていくような勢いだっただ。しかしその興奮は、司令塔の「静かに」という声を共にすぐ冷めた。

そして全員が杖を向ける。いくら興奮が冷めているとはいえ、全員が勝ち誇った顔だ。ジャッキーの脳裏には絶望の二文字が走る。しかし横目でジャスミンを見ると、ジャスミンの瞳はしっかりと前を捉えていた。ジャッキーは一瞬「強がっているのか」と思った。一体ジャスミンの希望は、どこから生まれてくるのだろうか。

金属音のような嫌な音が洞窟中に響き渡る。

ジャッキーのまわりの空間がゆがんだような気がした。いや、明らかにゆがんだ。

途端に全員で物体移動魔法を使おうとしていた黒マントの集団が、大水晶から目を離してしまった。術がまだ中途半端だったため、持ち上がりかけていた大水晶が落ちてしまう。「やばい！」と司令塔が叫んで杖を向けたが遅かった。堅いはずだった水晶は、轟音と共に砕け散った。

黒マントの集団が絶望する前に、水晶の破片から黒い煙が上がり、それがだんだん人間のような形になっていく。

そう。神殿で見た、魔法で作られた兵士だ。

第三十七章 融合魔法

体全体が黒い鎧のようなものに包まれているのにもかかわらず、それが不気味な光沢を放ち、夜の街のように輝く。目は赤く光り、獲物を求めて舌なめずりしているかのようだ。その威圧感は、大水晶を壊されたことで湧き出てきたのかもしれない。

「くそ……何だこいつら……まあいい。敵なら倒すまでだ！」

先ほどまで冷静に指示を出していた敵の司令塔の声にも、落ち着きがなくなっている。それどころか、水晶が壊れたことで、全員に動揺が広がっていた。

「闇兵……クリスタル・シティーに古来より伝わる伝説の兵士。誰が魔力の源となっているのかはいまだに分からないが、その力は強大すぎるため、大水晶の中に封印された。そして今まで、この水晶の中でクリスタル・シティーを見守ってきた。まさかその伝説が、本当とはね」

ジャスマンがつぶやく。ジャッキーがジャスマンの知識に感激してしまった。クリスタル・シティーに来るのにそれほどの知識を備蓄していたとは。何の下調べもなしに、ただアックスを助けるためにここに来てしまった自分と比べてみると、がっかりしてしまう。もっと自分は頼れる存在にならなければいけないのに。

ジャスマンの話で、先ほど空間がねじまがった件についてもつじつまが合う。きっと、大水晶の異変を察知した闇兵たちが、強大な力を駆使したのだろう。

ジャッキーがしばらく考え事をしているうちに、もうすでに戦いは始まっていた。しかし戦う前に、もうすでにこの勝負の結末は見えていた。大水晶が割れたことにより集団全体の気迫が足りないう

え、力量の差も明らかだった。

炎などの攻撃魔法を放ったとしても、それが届く前に閻兵が剣を一閃させると、たちまち消えてしまふ。そのあと閻兵は剣を後ろに引いた。どうやら力をためているようだ。閻兵の持っている魔剣の黒い輝きが一段と増す。

そして大きく剣を一振り。すると、半円の形の衝撃波がジェット機のような猛スピードでこちらに向かってきた。黒マントはうめき声をあげること、その衝撃波の全貌を視界に入れることも、動くこともできなかつた。衝撃波は敵の肩口を鮮やかに切り裂く。その攻撃を受けた黒マントの男たちは、空中をゆつくりと舞い、洞窟の岩に激突して絶命した。血しぶきが黒マントの男たちが舞った後を追いかけて、鮮やかなアーチを描いている。

一瞬にして黒マント集団は、閻兵の前に全滅した。同時に、ジャスミンとジャッキーにかかっていた拘束魔法も解ける。術者がいなくなつたからだろう。体にかかっていたおもりがどこか遠くに吹っ飛んでいくような感覚だった。しかし、久しぶりの身体の自由を満喫している暇はなかつた。すぐに閻兵たちが飛び掛かってくるのだ。二人はお互いの顔を見合わせ、そしてうなずく。すぐにジャッキーは地面をけつた。

「水壁！」

杖を構えると同時に叫んだ。透明な水の壁が、閻兵たちの突撃を防いでいる。すぐに魔剣の力で突破されてしまったが、これについては十分把握している。

水壁は、ただの時間稼ぎなのだから。

閻兵の出足が一步止まったところで、ジャッキーはまた杖を突きだして光弾を撃つた。体操選手のように身軽に動き回り、休むことなく衝撃波を撃つ。光の雨が閻兵の上から降り注ぐ。光弾同士が空中でぶつかり、お互いに方向を変えあつたり、舞い散つたりしている。閻兵たちはその動きに翻弄され、バランスを崩して衝撃波をも

るに食らっていた。

一方のジャスミンも負けてはいない。得意技のホイール・ブーストをたくさん発動させ、闇兵たちの接近を妨げていた。ジャスミンはひたすら炎を拡散させているため、辺りには火の海ができている。闇兵たちは器用にそれをよけながら、剣を薙いで消化にあたっていたが、何せ炎の量が多すぎる。たちまち焼け死んでしまう兵たちも多くなった。

光と炎の攻撃の応酬に、闇兵たちは混乱している……はずだった。しかしジャッキーとジャスミンにも不意に限界が訪れる。

ここまで連続で攻撃していると、魔力の消耗も激しいものだ。たちまちジャッキーの光弾の雨はやみ、ジャスミンの炎の勢いも次第に弱まっていく。二人とも肩で息をしている状態だ。

闇兵もだいぶ減ったが、それでもざっと30体はいる。動きが止まってしまった二人を、闇兵たちは素早く取り囲んでしまった。袋のネズミである。

ジャッキーは水剣を用意して立ち向かおうとするが、何せ相手は四方八方からかかってくる。結局、むやみに振り回すことだけしかできないのだ。そのうち、疲れからか足のバランスを崩し転倒。ジャッキーの真正面にいた兵が剣を上段に構えて、一気に振り下ろす。今のジャッキーの目には、巨人が自分を踏み潰そうとしているかのように見えた。急いで背後に跳躍するが、間に合わない。首筋に赤い糸のような傷跡が残り、鮮血が飛び散る。あまりの痛みに空中でまたバランスを崩し、うまく着地できずにジャッキーは転がってしまふ。

痛みを感じる暇がない。慌てて立ち上がり、水剣で応戦しようとしたが、徐々にジャッキーは追い込まれていった。人数の差はもちろん、相手の剣技は自分よりも格段に優れていることが、ジャッキーを不利な状況に陥れていた。

一方のジャスミンは、自由自在に跳躍を繰り返し、魔法は使わず体術で勝負を仕掛けていったが、疲れで動きが乱れた。腕や足を数

か所斬られ、傷跡が蜘蛛の巣のようになっていた。そしてそのすべから流血が止まらないため、手足は夕日のように真っ赤に染まっていた。

ジャッキーは水剣で次々と送り込まれる斬撃を、かろうじて返していく。しかし流血で手首に力が入らない。血が自分の体内から失われることで、その分自分自身の力も失われているようだ。

いったん兵の攻撃がやんだかと思うと、そのうちの一体が上段に剣を構え、強く踏み込んで一気に振り下ろした。ジャッキーは剣を持ち上げるだけで、もちろんまともに剣撃を受け止めることなんてできない。剣と剣がぶつかり、鈍い音を立てる。手首に電気ショックをかけられたような衝撃が走った。水剣は飛んで行ってしまった。ジャッキーはその瞬間、覚悟を決めて自分の身を闇兵に預けようとした。それを見たジャスミンも、ジャッキーにならった。

もう終わりだ。自分はここで死ぬんだ。幻想世界を、アックスさんを、ジャスミンを救えずに……。

そう思うと悲しくなってくる。自分の非力さと、罪悪感に襲われる。しかしその呪縛からも、もうすぐ解放される。「死」を迎えれば、すべてから解放されるのだ。

とその時、ジャッキーとジャスミンの杖が、銀河中の光をすべて集めたような輝きを放ち始めた。そして、頭の中にはもう聞きなれてしまった、透き通るようなソプラノの声。

『あなたたち二人は最高のパートナーよ。今、力を開放しなさい』

第三十七章 融合魔法（後書き）

今回は長めですね。

第三十八章 Black

二人の杖の輝きが、一段と増す。それに伴い、二人を取り囲んでいた闇兵たちは端のほうに逃げ、光に向きなおり剣を構えた。やはりその光を少し恐れたのか。

「融合魔法ね……。ねえジャッキー。私、本気出していい？」

ジャスミンはこれ以上にならない真剣でこわばった顔をする。ジャッキーは、ジャスミンの顔が別人のように見えたので、思わず一歩後ろに下がってしまった。融合魔法と言うのは、そんなに恐ろしいものなのか。

「本気？ 何が？」

「融合魔法ってことは、あなたと私の魔法を合わせるってことですよ。確かにお互いが普通の魔法を出しあえば、それなりの威力は出ると思うの。でも、融合魔法ってほら、その……」

突然にジャスミンの顔が変わり、頬が赤くなっていく。ジャッキーは、どうしたんだろうと思った。

「その、お互いの相性がとてもいいときに生み出されるものだから、あの、どうせジャッキーとやるなら、お互いが全力を出し合って気持ちよ……その」

「もついい。分かったから大丈夫だよ」

普段のジャスミンからは想像もできないような焦りようだ。やはりジャスミンとて、ジャッキーを前にすると乙女になってしまうらしい。ジャッキーは微笑を浮かべ、子守歌を歌う母親のように優しい口調で受け止めてあげた。ジャスミンもうれしそうである。

「僕は天雷を使うよ。……魔力の消費が激しいけど」

「私は……実はまだ成功したことはない技に挑戦するわ、この機会に。ジャッキーには迷惑をかけてしまっけど……でも、私、頑張っ
て闇兵を倒せるように努力する」

「大丈夫さ、ジャスミン。もしその時は、僕が君の分まで頑張るよ」

ジャッキーは言ってしまった後悔した。体が、芯のほうから沸騰したやかんのように湧きあがっていくような気がした。今ジャスミンを見ると、恥ずかしさで飛び上がってしまいそうだ。

気を取り直して深呼吸をする。洞窟内の冷たい空気が肺を満たす。心が落ち着いたところで、いよいよ杖を構えた。

「天雷招来！」

空中に鮮やかな光の束が現れ、激しい音を立てながら車輪のように回転する。光はだんだん大きくなり、杖の光と合わさって幻想的な風景を生み出していた。静かな洞窟の魂に、灯がともったかのようだ。

一方のジャスミンは、やはり杖を突き出し、赤い光を光の束の真下に溜める。杖先からは絶えず光が補給されているが、その大地を切り裂くような音の激しさからして、ジャスミンの体にかかっている力も尋常ではないことがうなずける。ジャッキーの耳に、ジャスミンの「お願い……成功して」という小さなつぶやきが、激しい音越しに届いた。

「爆炎……咆哮！」

赤い光から爆発が生まれるのと、光の束から雷撃が生まれるのがほぼ同時だった。ジャッキーの放った天雷が、ジャスミンの、地面をのたうち回る爆炎の中に吸い込まれていく。

二人の魔法が、一つになったんだ。

そして次の瞬間、轟音と共に先ほど吸い込まれたはずの雷撃が、炎の鎧をまといながら四方八方に飛び出していくのが見えた。

二人の融合魔法を正面で受けようとした闇兵は力負けし、剣をどこかに飛ばされた。また第一撃を受けた闇兵も無事では済まされない。体全体に、電気ショックのマッサージとは比べ物にならないほどの痺れが走る。そして神速の早さで生き物のように体を翻してきた雷撃に体を貫かれて倒れた。中には、雷撃のスピードについていけず、剣を構える前に襲われ、焼け死んでしまう兵もいた。

辺りには肉が焼け焦げたにおいと、闇兵の死体で埋まっていた。

「やったわ！　ありがとう、ジャッキー！」

ジャスミンは飛ぶような勢いでジャッキーに抱きつく。あまりに突然なことだったので、ジャッキーは一瞬夢物語を見ているのかと思ってしまう。しかし至近距離でジャスミンの長い髪と甘い香りを感じ、間もなく夢ではないことを悟る。

すごく恥ずかしかったが、幸か不幸かここには誰もいない。思い切って、ジャスミンの体を本気で引き寄せようとした……が。

「大変だ！」

聞き覚えのある大きな声で、ジャッキーは思わず飛びのいてしまった。

見ると、アックスが息を切らして駆け込んでくるところだった。

「アックスさん！　まだ傷は回復していないはずなのに、どうして

……」

「どうしたもこうしたも、街がやばいんだ。いつまでも病院で眠っているだけの俺じゃない。とにかく、すぐに来てくれ」

息が上がったまま、それでも走り出したアックスの後を追う、二人も急いで街に向かった。

街の惨状は、ジャッキーの想像をはるかに絶するものだった。

建物は燃え、混乱で右往左往している人々に炎が怪物のように襲いかかる。また、路上は死体の山で埋め尽くされ、すぐ目の前も見えない状態だった。

何とかそこを突破し、三人は街の中央にある広場にたどり着く。そこに待っていたのは、黒いマントを羽織った女性と男性だった。まずはじめに、無精ひげを生やしたうさん臭そうな男性が口を開いた。

「やあやあよく来たな。でも、ここには何もないぞ？　言うておくが、この街はもうすぐ破壊されるから、死にたくなかったら逃げるべきだ」

「あなたたち、こんなところで何をしているの？」

ジャスミンは、強大な闇を目の前にしても強気な姿勢を貫く。それにジャッキーは、いつしか憧れを抱くようになった。

「それはお嬢ちゃんとお坊ちゃん方には関係のないこと」

これでもかという風に化粧を重ねてあるのが、肉眼でも十分感じ取れるこの女性は、ジャスミンの質問を軽く流した。

「お前たちは、底なし湖で水龍を暴れさせ、ファイト・タウンの格闘家たちを騙し、さらにこの美しい街の大水晶まで抜き取るうとした。一体何者だ？」

ジャッキーも食って掛かる。男性は何が面白いのか、けたけたと声をあげながら笑って、そして答えた。

「俺達？ 俺達は、正義を貫く集団『Black』さ」

「Black？」

第三十九章 捕らわれたジャスミン

「そうさ。混沌の時期にも負けない強い意思を持つ団体。それが Blackさ。そして俺が Black 幹部のブジョップ、こいつがラクア。クランスも幹部だった」

ついに敵の正体が明らかになった。ジャッキーは、体から一気に湯気が出ていくような怒りを覚えた。

「なぜそんなことをする？ お前たちは最低だ！」

「最低？ 俺達のやっていることの、どこが悪いんだ？ 俺達は、混沌の時期にもかかわらず世の中に喝を与えている団体だぜ？」

ブジョップはうまく言い逃れをしている。その様子が、ジャスミンの心の中の正義と闘志に火がついた。

「もういいわ！ あなたたちがその気なら、私はあなたたちを倒す！」

ジャスミンの杖が火を吹く。赤い波のような炎の猛獣が、二人に襲いかかる。

しかしジャスミンは先ほどの戦いで消耗しきっている。本調子の威力とスピードはなく、二人にも簡単にかわされてしまった。

「あら、どうしたの？ 攻撃が止まって見えるわよ」

ラクアは高笑いをしながら杖を構える。そしてそれを鞭のようにふるった。

「くっ！」

ジャスミンのそばの地面がくだけ、噴煙のように四方八方に飛び散る。ジャスミンはそれをすんでのところまでよけたが、疲れからかバランスを崩し、尻もちをついてしまった。

「ジャスミン！」

見かねたジャッキーとアックスは走り出す。しかし、ブジョップがその前に躍り出て、二人を拘束してしまった。

「邪魔だ。むさくるしいガキどもめ。お前たちは黙ってみてろ」

むさくるしいのはお前のほうだ。ジャッキーはそれを言いかけたところで、洞窟内での体の痛みを思い出し、慌てて口をつぐんだ。

少しでも動こうとすると体を締め上げられるような痛みに襲われるのだ。それはどんなに体の頑丈な幻獣でも、どんなに我慢強い人でも、耐え切れないに違いない。少なくともジャッキーは、こう思っていた。

死んだほうがましだと思うような痛みとは、このことを言うのだ。

そんな余計なことを考えているうちに、ジャスミンはどんどん崖っぷちへ追い込まれていた。

滴る汗を必死にぬぐいながら放つ炎は、むなしくも相手の魔法により消えていく。それは風前のもしびのようにも見えた。

「もう一度言う。俺達は、お嬢ちゃん方と戦う気はまんざらないぞ？ おとなしくここからいなくなってくれば、一切危害は加えない」

ブジョップは猫なで声を出している……本人はそうしているつもりなのだろうが、逆にいつもよりねっとりとした、いやな声になっている。ジャスミンがその声に動じるはずはなく、いつも通り疲れなくても強気を貫く。

「何言ってるの！ あなたたちみたいな悪人を、何もしないで見逃すわけないじゃないの！」

固い宝石すら砕いてしまいそうな迫力のある声を出したが、そのあとでまた肩を震わせ、汗をぬぐう。その表情は悔しそうだった。それを見たジャッキーもまた、心を痛める。

「へえ。休んだほうがいいのに頑張るねえ」

ブジョップは、オウムのように笑っている。ジャスミンは再び杖を構えなおし、衝撃波を放った。しかし焦りからかコントロールを失い、光はブジョップの頭上を虹を描きながら消えていった。

すぐさまお返しが来る。ラクアだ。やはり鞭のように杖をふるっていた。その様子は、まるでラクアの下に本当に馬がいるかと思わ

せるほどだった。

ラクアが放った衝撃波は地面を転がってよけるジャスミンをかすめ、後ろで身をくねらせ続ける炎にのまれた。

「おやおやお嬢ちゃん。醜い姿をかつこいお坊ちゃんの目の前で見せていいのかな？」

そう言いながら、ラクアはジャスミンにとどめの拘束魔法を放つ。冷や汗を浮かべながら重たい体を必死に持ち上げようとするジャスミンを見ても、ジャッキーにはただ、奇跡が起こってくれることを願うことしかできなかった。

しかしその願いは儚く消えていき、ジャスミンもついに捕まってしまった。

と同時に、ジャッキーとアックスにかかっていた魔法が解けた。そしてその瞬間、ジャッキーは全てを悟った。

こいつら、ジャスミンを人質にとつて街を破壊するつもりだ。「さあどうする？ 街を救いたければこの女を殺す。この女を救いたければ街を壊す」

究極の選択だ。ジャスミンを捨てれば大量の生命が失われてしまう。しかしそれらを救えば最愛の人が。

ジャッキーはジャスミンを救ってあげたい。しかし自分は今勇者の身だ。幻想世界を背負っている。クリスタル・シティーという美しい街をこんなに簡単に切り捨ててしまっているのか？

ジャスミンが痛みをこらえ、必死に表情で叫ぶ。

「私のことはどうでもいいの！ 私はどうだっていい！ 街を守って！」

いつもの美貌が、汗と痛みに邪魔されて今の街のように崩れ去っていく。ジャスミンの体に、何トンもおもりを乗せたような力がかかる。そのジャスミンの痛みが、地面を伝って間接的にジャッキーに伝わっていくような気がした。そう思うと、行動せずにはいられなくなってしまう。

「ジャスミンを守ってくれ！」

大地をつんざくような大声に、その場にいた全員が震えあがった。もちろん、張本人のジャッキーとて例外ではない。

「ほう。それではご希望通りに」

ジャスミンは投げ出されるような形で解放された。足元がふらつく。それを、ジャッキーは慌てて駆け寄り、抱きかかえる。

「ありがとう、ジャッキー……。私なんかのために」

弱々しく、情けない声だったが、ジャッキーはそれで安心した。ジャッキーの目には光るものが浮かんでいる。それが頬に一本の透明な線を描き、ジャッキーの肩を濡らした。スズメの涙のような一滴だったが、ジャッキーには温かく、体全体を包んでくれるもののように感じられた。

「それではこのBlackが全精力をかけて開発した、最強の魔法爆弾で」

ラクアの声が、混乱に陥っているクリスタル・シティーに響き渡った。

第四十章 破壊される街で

「馬鹿な……魔法爆弾だと！ そんなものを使ったら、街ひとつ簡単に吹き飛んでしまっぞ！」

アックスは、驚愕と興奮が入り混じった表情で唾を飛ばしながら叫ぶ。

「手を出すなよ。女を開放したんだから、おとなしく見てろ」

杖を出しかけたアックスは、思い返したようにジャスミンのほうを振り向いた後、しぶしぶ杖をしまっ。その表情から、アックスの戦意がむき出しになっていることが読み取れる。ミイラのように寝ていたのだから無理もない。

でも、ジャスミンを助けた以上、命令に背けばこいつらは何をするかわからない。

だから指をくわえてみていなければならぬ。悔しいのはアックスだけではない。ジャッキーとジャスミンも同じだ。

ジャッキーは、すすり泣くジャスミンと密着状態のままアックスに呼びかけた。

「アックスさん、今は我慢してください。悔しいのは分かります。でも、もうどうしようもないんです……」

アックスは肩をすくめた。深刻そうな表情をし、大口を開けて暴れまわる炎から逃げ惑う人々を盗み見ながら「分かってるって……」と言う。拳を強く握りしめ、唇をかみしめた表情はどこか悲しそうで、ジャッキーの目には強がっているようにも見えた。

もうすぐ全てを失ってしまう街の風景は、つい先ほどまで光り輝いていた。これが一瞬にして失われてしまうなんて……。

「あんたたち、絶対に手を出さないでね？ 三、二、一……そら！」「待て！ 一切危害を加えないという約束じゃ」

アックスがそう叫びかけたが遅かった。ラクアはすでに、魔法爆弾を放り投げていたのだ。その残酷な笑みは、まるで地獄の悪魔の

ようだった。

爆弾が空中でトランポリン選手のように回転し、そこから一気に下降を始める。それがスローモーシヨンのように感じられた。ジャッキーは杖を抜き出し、と同時に叫んだ。……もちろん、ジャスミンを抱いたまま。

「ユニコーン・シールド！」

爆弾が光を放出させるのと、ジャッキーがシールドを張るのと、Blackの面々が魔法で飛行し爆発を回避しようとするのが同時だった。

青色の輝きが三人を包む。しかしその外では、早くも爆発の光が洪水のように降り注ぎ始めていた。

次の瞬間、火山が噴火したような轟音が地響きと共鳴し、光の海が街を包んでいく。おかげでジャッキーが張ったシールドの青色も、見事に掻き消されてしまった。

黄色い雷光のように走り続ける光は、すぐに街を襲い、暴れていた炎すら飲み込んでしまった。混乱して右往左往していた人影も、すでに焼け死んでしまった人も、飲み込まれて姿が見えなくなった。かろうじて残っていた建物　いや、炎の影響で廃墟と化していたものも、跡形もなく空のはるかかなたまで飛ばされた。

ジャッキーの目には、もう何も映っていないかった。人も、建物も、クリスタル・シティーと言う街すらも、すべて。

まるで先ほどまでしつかりと形を成していた街が、実在していなかったように思えてしまう。

光はまだ破壊された街の支配者となっており、ジャッキーのシールドを突き破ろうとしているののように、矢継ぎ早に襲いかかってくる。この光が生き物のように思えた。

同時に魔力と魔力がぶつかる鈍い音がそこら中で頻繁に起き、音という名の悪魔が三人の耳に襲いかかっているようだ。

街からは光の波が絶えず起きて、荒れ果てた海も同然だった。

爆風も、シールドを突き破って三人の体に嫌と言うほど吹き付ける。いつものユニコーン農場で感じる、冷たく心地よい風とは比べ物にならない。やんだ後も体中に何かをねっとりつけられたような気分だった。ジャッキーは、バランスを崩してジャスミンから離れてしまった。

そんな、もう何が起きているのかわからないような音の濁流の中に、小さな声が聞こえる。

ジャッキーが声のしたほうに振り向くと、ジャスミンがとうとう声をあげて泣き出していた。先ほどの睨り泣きとはわけが違う。

「ジャスミン……なんで泣いているんだい？」

ジャスミンを安心させようと、父親のように優しく強い声を出したつもりだったのに、自分でもびっくりするほど心細い声だった。ジャスミンは、嗚咽をこらえながらしゃべりだす。

「私の……せいで……この街が……、私が、生き残ったから……」
ところどころ声が途切れて聞こえなかったが、内容は十分に分かった。ジャッキーはまたジャスミンを抱き、少しでも悲しみを少なくさせてあげよう、と思ったが、今のジャッキーは爆風により汗だくだ。こんな状態で抱きつけるわけない。

ならば、アックスもいるが……ここしかない。

「ジャスミン」

ジャッキーが、腹の底から声を絞り出す。

「僕は……君が好きだ。だから、泣かないでくれ」

ジャスミンを安心させたい。ジャスミンの体にかかる悲しみと苦しみを、少しでも軽くさせてあげたい。その一心だった。しかし次の瞬間、ジャッキーは自分が何をしたのかを思い出し、腹の底がかゆくなったような気分を味わった。そう、自分は告白したのだ。

ジャスミンの動きが一瞬止まる。そしてジャッキーのほうを見て顔を赤らめ、涙をぬぐう。強がっているのか、嬉しいのか。

「ありがとう。ジャッキー……嬉しい。そうだよ、いつまでもよくよしていられないもんね」

ジャッキーはジャスミンの瞳が、爆発の光なんかよりもまぶしく見え、目をそらしてしまった。視線の先にぶつかってしまったアックスは、自分がここに居合わせていいのか、というような、きまりの悪そうな顔をしていた。

ほどなくして、爆発でもやもやと広がっていた煙と、かすかににじんんでいた光も晴れ、街の惨状……いや、街の跡が、ジャッキーの目に飛び込んできた。

第四十一章 次なる目的地

活気にあふれていた大通りは、建物が一つもなくなりすっかり元気をなくしていた。さらに、ありふれる量の宝石の輝きを際立たせるほど、しつかりと整備されていた石畳の道は、ところどころが焼け焦げ、未開の地のようになっている。

街は壊滅し、人……いや、ジャッキーたち以外の生物は、みんな死んでいるはずだ。なのに、死体の血なまぐさはおろか、その死体自体一つも見当たらず、辺りは森閑としている。きっと爆発の衝撃で遠くに飛ばされたか、身体中を粉々にされたかだろう。

宝石と人で満ち溢れていたクリスタル・シティーは、一瞬にして永遠の眠りを迎えることとなった。おそらくもうこの街は起きることができない。

そこへ、空中へ避難していたブジョップとラクアが降り立った。ジャッキーたちが二人を睨みつける間もなく、ブジョップはしゃべりだす。

「どうだ？ 素晴らしいだろう、魔法爆弾の力は。なのに一滴の血も流れていない……」

ブジョップは両方の手のひらを自らのほうに向け、感動に浸っているようだ。その姿は、見えない何かをつかもうとしているようにも見えた。

「さて、こんなちっぽけな街を破壊しただけでは足りないわね。見て！ 空には黒雲が広がっているわ！」

そのラクアの声で、ジャッキーは我に返った。そして上空に広がった、あの忌々しき黒雲をにらみつける。

少し前までは群青色の空が、染物のようにきれいに広がりこの幻想世界を見守っていた。だがジャッキーが勇者に選ばれたころから、黒雲が広がり今に至っている。

黒雲はそんなきれいな快晴をむしばみ、その群青色の空から力を

吸い取っているかのようだ。あれにも恐ろしいほどの魔力がかけられているかと思うと、背筋が凍りついてしまう。

一刻も早く止めなければ。

それが自分の使命なのだから。

ジャッキーが決意を固めようとしているうちに、ラクアはまたしやべりだした。

「さあ、もうすぐ豪岩火山が噴火する……いや、豪岩火山を噴火させるわよ。そしたら、混沌で世界が滅ぶ前にこの世界を終わらせることができる。この世界を落ち着かせることができるわ」

「豪岩火山……！ まさか、フェニックスが……」

アックスは、先ほどの爆発のショックで死んだ魚のような目をしていたが、まさしく水を得た魚のように目を見開いた。

ラクアは淡々と言い放つ。

「そうよ。混沌の時期に入れば幻想生物たちも不可解な動きをとることは知っての通り。そして豪岩火山の頂上に祭られているとされるフェニックスとて、例外ではないはずよ。だから、その力を存分に利用させていただくの！ さあ、行くわよブジョップ！」

「させるか！」

アックスが杖を出し、衝撃波を放ったが一步遅かった。二人はすでに瞬間移動を完了させており、衝撃波の光と音は、眠りについた街を騒がしく横断していった。

「ちくしょう、まさか豪岩火山を狙うとは……」

豪岩火山のことはジャッキーも知っている。幻想世界屈指の火山で、近年は火山活動が収まっていたのだが、混沌が訪れるとともにまた火山活動が活発になった。もし噴火してしまったら、遠く離れた皇都もその影響からは免れない。

「ごめん……私を助けてもらったばかりに」

ジャスミンはまたうつむく。先ほどの爆発のことをまだ気にかけているらしい。無理もないが。

きっとジャスミンの心には、深く傷が残ってしまうだろう。

「ジャスミン、がっかりすることはないさ。仕方なかったんだよ。それにたとえあそこでジャスミンを助けなかったとしても、Blackの奴らは卑怯なことを考えていたかもしれないし」

「そうだよな。こっちの避難が完了してないのにいきなり爆発させたんだから、困っちゃうよな」

アックスが、わざとふざけた口調で言う。その真意はジャスミンの心の傷をいやすためのことであり、ジャッキーにもくみ取れた。ジャスミンは二人の顔を順番に見つめ、「ありがとう……」と申し訳なさそうにぼやく。

「とにかく、今は一刻も早く火山に行かなければならないだろ。くよくよしてる暇はないよ、早く行こう」

「そうだよな。私、今度こそ死ぬ覚悟で行く！」

ジャスミンは涙の最後の一滴をふき取り、途端に自信に満ちた顔になった。それは、これから戦場に赴く兵士の顔に等しかった。アックスが「死んでもらっちゃ困るんだけどな……」と苦笑いを浮かべる。

クリスタル・シティーから豪岩火山まではさほど遠くない。三人は、すべてを失った街に「必ず勝って帰ってくるぞ」と残り、足早に火山へ向かった。

第四十二章 闇の山

クリスタル・シティーを出てから、三人は黙々と歩いていた。ジャッキー自身、こんな暗い雰囲気は嫌なのだが、とても話し出せる状況ではない。そのため、自然と歩幅も大きくなっていった。

街ひとつ、自分たちが見ている目の前で吹っ飛ばされたのだ。忘れようとしても、あの時、すきについてBlackの面々を攻撃してきたかもしれない。と思うと、悔やんでも悔やみきれない。固い鉄の壁を思い切り蹴っ飛ばしたい気分だった。

そんなこともあって、豪岩火山のふもとにはすぐに着いてしまった。

「しかし……なんだこの景色は……」
アックスがぼやく。

火山に近づくとつれ、少しずつ景色がおかしくなっているなど誰もが気づいていた。まわりの景色が血のように赤黒く映り、いつもは普通の土のような色で平穏な山肌も、猛獣の牙をむき出しにしているかのようだ。

ところどころに口を開けたような穴が開いており、時々そこから染め物をしたような炎が吹き出す。もちろんお世辞にも「山道」と呼べる場所はない。

さらに、頂上を見るとクリスタル・シティーまで見ることができていた晴れ渡った空は姿を隠し、かわりに真っ黒な渦を巻いた雲が、ジャッキーたちを見下ろしているようだ。まぎれもない、黒雲だ。

豪岩火山は、もはや闇の山と化していた。

「行きましよう。行くしかない」

山が大口を開けているところをなるべく避けながら、三人はゆっ

くりと歩き始めた。その様子は、まるで葬式の参列者だった。しかし暗そうな表情の中に、決戦を前にした緊張感も交じっている。しかしその瞳に狂いはなく、ただ目の前の希望をしっかりとらえていた。

歩き始めて何分たっただろうか。ジャッキーの心の中には恐怖が芽生え始めていた。別にこれから起こるであろうことが怖いわけではない。むしろそれは楽しみなのだ。

こんなまずい雰囲気のを登っているのに、何一つ異変が起こらない。

そろそろ悪いことが三人の身に降りかかってくるんじゃないかと、ジャッキーは悪い予感を抱いていた。ジャッキーの体は、脳が指令を送っていないのにもかかわらず杖を取り出しており、その杖を握る手の力も自然に強くなっていた。

そして、悪い予感的中した。

ここまで、いつもの明るい性格を封印しすっかり黙り込んでいたアックスが、槍のように鋭い叱声を放つ。

「前だ！ 前から岩が来るぞ！」

遠目でもその形が見て取れるような大きさだった。火山の段差で重い巨体をジャンプさせるその岩は、まるでスキージャンプに失敗したようだったが、そんなのききなことを言っている場合ではない。すぐに横によけようとしたが、不運に不運は重なり、右にも左にも大きな穴があり、しかも今は炎の噴出の真つ最中であり、横っ飛びに逃げたら最後、炎の怪物に巻き込まれて即死である。アックスとジャスマンは必死に衝撃波を放つが、その光は岩にはね返され空気で散ってしまい、無駄だった。もはや絶体絶命の危機だ。

「ユニコーン・シールド！」

ジャッキーがそう叫ぶのと、ウイングが吠えるのが同時だった。

一角獣の光は岩に激突し、ヴァイオリンの弦のように大きく捻じ曲がる。その刹那、巨岩はその姿からは想像もできないほどの大ジャンプを見せ、三人の上を大きく飛び越して転がっていった。

ジャツキーは大きく息を吐き、再び歩を進め始めた。

そのあとは、何事もなく進むことができた。三人は相変わらず無言だったが、少なくとも表情は先ほどよりも明るくなっていた。停車していたあかりに、灯がついたようだ。

そして頂上が目前に迫る。と同時に、三人はそろって走り出した。事は一刻を争う。

しかし、この闇の山が、そうやすやすと登頂させてくれるわけがなかった。

最後に大きな穴があることを、ジャツキーとアックスはうかつにも気づけなかった。その穴の目前に差し掛かったところでようやく気が付いたが、もう遅い。スポーツカーのように勢いをつけて走っていた二人は、進路を変えることも止まることもできなかった。

「危ない！」

そこへ、大穴の存在に気づいていたジャスミンがダッシュで躍り込む。そして女の子とは思えないほどの力で二人に体当たりし、山の餌食になるのを防いだ。ちょうどその時に炎が噴き出し、三人は転がって被害を免れた。

もう少しで炎に焼かれてしまうギリギリ いや、厳密に言えば火の粉が顔にかかるほど、穴と近かった。しかしジャスミンが自分の命を救ってくれたかと思うと、「熱い」なんていう文句を口にすることをこらえる必要があった。

一秒が一分に感じられるほど、炎の噴出は長かった。そしてそれが収まり、立ち上がるうとしたその時。

ジャスミンのそばの地面に蜘蛛の巣のようなひびが入る。先ほど渾身の体当たりをした時の衝撃があだとなったのか。そして間もなく地面が割れ、ジャスミンが穴に吸い寄せられた。

ジャスミンの悲鳴は、まるで頭上に広がる黒雲をも吹き飛ばしてしまうかのようだった。

慌ててジャツキーが、ジャスミンの手をつかむ。腕が取れてしま

いそんな衝撃がジャツキーを襲う。何とか歯を食いしはるが、重力には逆らえない。重力に耐えられず悲鳴を上げた地面は、ジャツキーの下でもくだけた。

「うっ、うわああああ!!」

その瞬間、全てが終わった。

もうだめだ。自分はここで、恋人とともに死ぬのだ。

ジャスマンは悪くない。慌てた自分が悪いのだ。

ごめんアルミス。ごめんジャスマン。僕は、世界を救うことができなかつた。

そう思いながら、ジャツキーは最期の時を感じ、目を閉じた。

「ネット!」

初めてBlackの面々と魔法で戦った時に、アックスが使った技だ。ジャツキーの体を包む網は、まるで聖母のような温かみと柔らかさを持っていた。

「大丈夫か! おい!」

目を開けると、アックスが興奮した様子で穴を覗き込んでいる。

そして杖を引っ張り上げると、二人の体も網とともに上昇した。

「さあ、頂上まであと少しだ。慎重に行こう」

第四十三章 火山コントロール

今度こそ三人は、山頂までの道のりをしつかり確かめながら踏みしめる。山頂までの距離は目と鼻の先、と誰もが思っていたのだが、意外と距離があった。

ついに山頂へ足を踏み入れる。上空を見ると、やはり大きな黒雲が、すべてを飲み込んでしまおうブラックホールのような異様な威圧感を放ち、たたずんでいた。手を伸ばせば届きそうなほど近くに。さらに時々、雷の細い筋を生み出しているが、その様子はまるで怒っているかのようにだった。

そして今度は火口付近に目を移す。何やら幻想的な光があたり一面を漂っており、上空と火口付近を比べてみると天国と地獄のような差だった。

しかしBlackの面々が誰もいない。ジャッキーとジャスミンはすぐに不自然だと思い、杖を抜く。すると、冬の木枯らしのような細く高く鋭い音がジャッキーたちの耳をよぎった。すぐに音がしたほうに杖を振りぬく。ジャッキーの放った衝撃波を、ブジョップが間一髪でかわしているところだった。

「危ない危ない……しかし、気づかれていたとは」

ブジョップは、ボサボサの髪の毛を掻きむしりながら立ち上がる。ジャッキーは「当たり前だ」と冷たく返しておいた。

いきなりアックスが火口に向かって走り出す。光の正体を確認しようとしたのだ。

しかしそれを垣間見て、アックスは驚愕の表情を浮かべた。

アックスの目に飛び込んできたのは、まるで蜘蛛の巣のように複雑に張り巡らされた魔法陣。虹のような光を放ち、線の一本一本がしっかりと手をつないでいる。

「これは……魔法陣……」

アックスは反射的に、杖を魔法陣に向けた。それを慌ててジャス

ミンが引き止める。

「駄目です、アックスさん！ 今破壊したら、中途半端な状態で魔力が放出されて、私たちも巻き込まれてしまいかもしれませんよ！」

「あ……そうか、ごめん」

アックスは興奮しているようだ。

「私たちは魔法陣を書いている途中だからね、おとなしく見えてもらえないかな？ どうせ私たちを倒しても、この魔法陣はしばらくほったておくと大爆発を起こすから、どうにもならないわよ」
ラクアが笑いながら言い放つ。

とその時、火口から光とともに、煙が上がり始めた。

あまりに突然の出来事だった。先ほどまで近づくことができるほど平穏だった火山が、まさか一瞬のうちにして怒りをあらわにするなんて。きつと、火口の中では早くも溶岩がうごめいているだろう。どちらにしても時間の問題だ。

「魔法陣が書き終わったら、一回溶岩の進行は止まるわ。けれど、その魔法陣は溶岩を止めるバリアの役目と同時に、異界から不死鳥フエニックスを呼び出すという、とつてもとつても偉大な役割を果たすのよ！」
まるでこちらをからかっているかのようなラクアの声は、いつ聞いてもイライラする。

「馬鹿じゃないの！ そんなことをしたら、あなたたちまで死んでしまうのよ！」

「俺達が死んでも、俺達は混沌で世界が滅亡するのより前に世界を手にかけてんだから、俺達の勝ちだよ」

ブジョップは、もうすでに勝ってしまったような顔だ。

「でも、世界を破滅させるのは変わらない！ 僕らは世界を守る！ ジャッキーが威勢のいい声で叫ぶ。その声は、上空の邪悪な雲を振り払うかの勢いだった。

しかしその叱声が放たれた直後に、あっさりと拘束魔法を使われってしまった。三人とウイングはうめき声をあげながら、痛々しい表

情を作る。

そんな時、またジャツキーの頭にソプラノの声が響いた。天の声は歌うように囁きかける。子守歌のようで、ジャツキーは思わず眠ってしまいそうになった。

『あなた、これからどうするの？』

もちろん、あいつらを倒して火山の噴火を止めるさ。

ジャツキーは心の中で強く言う。その拍子に拳を強く握りしめてしまったせいも、また体中に電撃のような痛みが走る。

『へえ、どうやって？ 拘束されているのに？』

流石にこの手の質問には困らせられてしまった。自然とそれが表情にも出てきてしまう。

人間とは不思議なものだ。心の中のことを顔に出したつもりはなくても、実は表れている。結局、自分の心の内はいつかは表情に漏れてしまう。心、というダムは非常にもろくて弱い。

『たとえあいつらを倒したとしても、魔法陣はほうっておくと駄目だし、攻撃しても反応してしまうわ。それに火山の噴火だって』

天の声は、なおも激しく詰め寄る。

ふ、噴火と魔法陣くらい一角獣の杖があればへっちゃらさ。

『その裏付けは？ どういう理由であなたはそれを言い切れるの？』

言葉の一つ一つが槍のようにとがっており、正確にジャツキーの心を貫く。そして今、何も言えなくなってしまった。頭の中の辞典を必死に引つ張り出す、言葉は見つかる気配を見せない。

『どうしても運命は同じよ。このまま降伏すれば？ そのほうが、あなたたちの身のためだと思っただけ』

でも、でも……。

「何もしないで終わるのだけは嫌だ！」

そのジャツキーの叫び声と比例するように、ウイングの角が青く宝石のように光る。一角獣の杖も輝きを放ち始めていた。……いや、正確に言えばジャツキー自信が光を帯びていた。体が芯から熱くなっている。

まるで温度の高い炎が燃えているかのような、青い光。それは、三人とウイングにかかっていた見えない拘束魔法を打ち破ったのだ。「す、すごい……」

魔法陣を書くのに夢中だったブジョップとラクアも、思わず手を止めてしまった。それほどの迫力だったのだ。

「さあ、戦うわよ！ 私とアックスさんでこいつらと戦うから、ジャッキーは噴火を何とか魔法で食い止められないかしら」

「任せてよ！」

ジャッキーは、もうすでに走り出していた。

第四十四章 緊迫

煙は、たちまちあたりを絵の具で塗りつぶしたかのように白く染めてしまった。それはまるで、火口を守る兵士のようなようだった。

アックスとジャスミンはすでに戦い始めている。しかしジャッキーは、呆然とそこに立ち尽くしていた。

しかし、突然その横をウイングがさっそうと駆け抜けていった。その時の風が、ジャッキーの髪を躍らせる。もちろん、ウイングはいつも通り角に魔力をためていた。

そして悠然と煙の中に突っ込む。太く長くとがった角を振り回し、煙を一掃した。……いや、煙がウイングの勢いに負け、火口に帰っていくようだ。その証拠に、ジャッキーが火口を覗き込むと、煙が魔法陣の周辺で停滞しているのが目に入った。

「魔法移動！」

今度はジャスミンが、ラクアとの対決の途中にもかかわらずこちらに魔法を打ちこんだ。すると、書きかけの魔法陣が折りたたまれる。そして、火口の端のほうにどけられた。

「さあジャッキー。火山の噴火を食い止めてちょうだい！」

「何をする！ この小娘めが！」

ラクアが、まるで生徒を叱る中年の女教師のような叱声を放つ。

この山を吹き飛ばしてしまうかのような勢いだった。

汗で化粧が崩れ、お化けのような形相になったラクアは、そんなことはお構いなしに呪いを放つ。右足を強く踏み込み、ジャスミンに向かって魔法を打ちこんだ。ジャスミンは間一髪でかわし、すぐにお返しを放った。まさに一進一退の攻防である。

一方のアックスは、ヘビのように体をくねらせ続ける雷いかずちを操りながら、徐々にブジョップを追い詰めていった。最初は余裕しゃくしゃくだった

たブジョップの表情が、今は必死になっている。しかし時々、タイミングをうまく見計らって拘束魔法を放ちながら逃れるため、アックスはブジョップを捕らえることはできなかった。アックスの雷とブジョップの衝撃波がぶつかり、バチバチと派手な音を立てながら火花を散らす。

ジャッキーもまた、火山の噴火を食い止めようと水の魔法で奮闘していた。水壁なら、少しは効果があるだろう、とジャッキーは考えていたのだ。

ジャッキーの杖先から、滝のような水が火山に向かって吹き出す。しかしそれは壁を作るかと思いきや、火山の上で渦を巻きながらすごい勢いで降下していった。渦潮だ。一角獣の杖が、水壁魔法を進化させたのだ。

すごい！ これなら、行けるかもしれない……。

しかし渦潮は、たちまち消えてしまった。ジャッキー自身の体力と魔力が足りなかったのだ。

一時休戦しているアックスとジャスミンを見、ジャッキーも休息を取ることにした。身体中の力が一気に抜けて、ジャッキーはしおれた花のように座り込む。

一瞬だけ静寂が訪れる。噴火が目前に迫っている火山の頂上で戦う者たちはみな、呼吸のたびに肩を上下させていた。周囲のサウナのような暑苦しさ、体にかかる負担を倍増させた。

ジャスミンがもう一度立ち上がる。そして決戦は、意外な展開で幕を閉じることになった。

「ファイア・ホイール！」

ジャスミンは、やはり得意技で勝負をつけようと考えているらしい。ジャスミンの期待に応えるように、Blackの二人をめがけて炎の大車輪が向かっていく。スポーツカーのレースを観戦しているかのような速さだった。

これに対して、ラクアとブジョップは横っ飛びに逃げてかわした。

ジャスマミンの放った魔法は勢い余り大きく後ろにそれで、もうこちらに向かつてくることはない。誰もがそう考えていた。標的となっていた二人とアックスは杖を構えなおし、ジャスマミン自身もあきらめてまた別の魔法を放とうとしていた、その時。

炎の大車輪がたまたま通りかかった穴から、ベストタイミングで炎が噴き出した。ジャスマミンの放った炎は、噴き出した炎の後押しを受けて威力とスピードを高め、こちらに戻ってきた。その光景がジャスマミンとアックスの目には鮮明に焼付いたが、Blackの二人は「火山の噴火活動が進んだんだろう」とでも思ったのだろうか、特に関心を示さなかった。

二人は、鎧をまとった炎に跳ね飛ばされた。あまりにあっけない決着に、ジャスマミンとアックスの口は、ボールのように丸く空いたままだった。

「ちくしょう！」

静寂はジャツキーの大声によって破られた。

ジャツキーが渾身の思いで放った渦潮は、その期待を裏切りあっけなく溶岩の海に吸い込まれていったのだ。噴火がもうすぐそこに迫っているのに。

第四十五章 ユニコーンの聖域

魔法陣は、膨大なパワーを持つ溶岩の波に焼き尽くされ、跡形もなくなっていた。牢獄にいた囚人たちが、一夜にして覚醒し、脱獄を目指して火口という名の檻を破ろうかとしているような恐ろしい様子だった。

もう時間がない。しかしジャッキーが習得した新しい魔法が、あつけなく破られたのだ。ジャッキーの気力はすっかり失せてしまい、それがアックスとジャスミンにも伝染してしまっている。

何とかしなければならぬ。が、もうどうにもならないのだ。

上空の黒雲が、より一層厚くなってきている気がした。いや、厚くなってきていた。相変わらず雷を放ち続けている。その音が、何もできないジャッキーたちを嘲笑っているようにも聞こえる。

突然、黒雲の周辺でとどまり続けていた雷が地上に向かって急降下してきた。バンジージャンプなどとは比べ物にならないくらいの速さだ。ジェット機のエンジンが百機同時に噴射されたかのような轟音と、嫌というほど降りかかってくる光の洪水。ジャッキーたちがいる山頂とはわずか数百メートルしか離れていない。雷の側撃を喰らってもおかしくなくらいの距離だった。

直撃を免れたからと言って、安心して暇は全くなかった。すぐに二つ目の雷がジャッキーたちを襲う。今度こそ、山頂めがけて電気の槍が振り下ろされた。目の前は白っぽい光に包まれた。ジャッキーは終わりを悟り、滝のように降りかかる轟音とともに、目を閉じた。目を閉じる直前に、アックスとジャスミンの姿が揺らぎ黒っぽい影となって、消えた。

「ジャッキー！ ジャッキー！ しっかりして！」

どれくらい時間がたっただろうか。ジャッキーが目を開けた時、最初に目に飛び込んできたのは、心配そうに自分を揺さぶるジャスマンの姿だった。そしてその瞬間、ジャスマンの表情が柔らかくなる。

「ここは……」

気を失う直前に見えた、白っぽい空間だ。まだ思考回路が回らないジャッキーは、一瞬だけホワイトホールに吸い込まれたのか、とも思ってしまった。

『ユニコーンの聖域。清き聖なる者たちが、悪しき者に侵されし時に生まれる。』

ユニコーンの聖域。白き精霊が森羅万象すべてを包み込み、正しき者、道を誤りし者を区別しける。

ユニコーンの聖域。我らが崇めし神、一角獣と心通わせ、一角獣を受け入れた者が強く乞い願った時、人の前に姿を見せり。

清き一角獣よ、あなたに神のご加護があるうことを」

ジャッキーが、聞いたこともない言葉、聞いたこともない歌の一つの調べを、すっかり歌いきってしまった。歌い終わってからジャッキーは我に返った。アックスとジャスマンはひどく驚いた様子だったが、ジャッキー自身が一番驚いていた。

突然その“聖域”とやらが持ち上がったかと思うと、ジャッキーたちを転がらせた。ジェットコースターのように急な坂だった……と思う。目をつぶっていたため、よくわからなかったが。

気が付くと、もとの火山の頂上に戻っていた。

先ほどまでジャッキーたちを包んでいた白い光は、猛スピードで火口のほうに飛んでいく。急いでそのあとを追いかけると、光はもう溶岩のところまで到達していた。血のように赤く染め上げられ、沸騰したお湯のように音を立てながら泡を作る様子は、とても怒っているようだった。それが、白い光により優しく包まれていく。しばらく抵抗した後、溶岩はあきらめたのか、暴れるのをやめた。霧のようなその光は瞬く間に、湯気のようになくなって消え失せ、火口

いや、この豪岩火山は、もとの落ち着きを取り戻した。上空にはびこっていた黒雲の層も、心なしに薄くなったような気がする。

「どうやら……ジャッキーの歌っていた『ユニコーンの聖域』ってのは、ウイングが作り出した空間で、俺達を雷から守り溶岩を葬ってくれたみたいだな」

「そうね、ウイングに感謝しないとね」

二人の表情も底抜けに明るい。ジャッキーは、自分は何もしていないのになんだか嬉しくなった。

「さて……戻るか」

アックスは、そう言い終わるか言い終わらないかのうちに早くも踵を返した。よほど疲れたに違いない。続いてジャスミンも大きく伸びをして戻ろうとする。ジャッキーもそれにならおうとした、その時。

地響きとともに、山が大きく揺れた。山が泣いているような気がする。地震か……？

いや違う。山頂をよく見ると、土ぼこりが砂嵐のように舞い上がっている。そしてその土埃が晴れると、今度はそこから火柱が発生した。何本も、何本も。超高層ビルの高さを軽く越している。

まさか。

ジャッキーは身震いした。

第四十六章 不死鳥覚醒

派手に舞い上がった火柱は、やがて勢いを弱めてなくなっていく。そのあとから、巨大なシルエットが現れた。それを見ると、まるで強風が吹きつけてきたようなすさまじい威圧感に押されてしまう。

ジャッキーはそのシルエットがいったい何なのか、というのが大方予想できていたが、まさにその通りだった。

そう。フェニックスが現れたのだ。おそらくBlackの面々が起こした騒ぎと、ウイングがユニコーンの聖域を発動させたことにより、目を覚ましたのだろう。

体全体に炎の鎧をまとっている。その燃え盛る炎は、宝石のような輝きを放ちながら波のようなうねりを生み出していた。悠然とそこに居座る巨体は、まるでこの山を踏みつぶしてしまうかのような迫力だった。そしてその瞳は、ジャッキーたち三人を静かに見つめている。山が悪者たちに侵され、泣いているようにも見えた。

「くそ……とにかく、戦うしかないだろう!」

「もちろん!」

ジャッキーが一步も動かないうちに、アックスとジャスミンの二人は駆けだしていた。

「ファイア・ホイール!」

すさまじいスピードを誇る炎が、回転しながらフェニックスに立ち向かっていく。その勢いは少しもフェニックスに劣っていないかった。しかし、フェニックスは炎をハリネズミのように立て、大車輪を吸収してしまった。

「大地咆哮!」

アックスが、フェニックスに休む間を与えないように追撃に移る。フェニックスは危険をいち早く察知し、すでに飛び上がっていた。やや遅れて、フェニックスが先ほどまでいたところの地面に放射状のひびが入り、そこから間欠泉のように衝撃波が上がった。その瞬

間、アックスは早くも心の中でガッツポーズをしていた。

だが、現実はそのままで甘くはなかった。

フェニックスは衝撃波が放たれることを前から予測していて、すでに衝撃波を視界に入れていたのだ。そして両翼をクロスさせ、防御の姿勢を取る。大きな翼が盾の役割を果たし、衝撃波をいとも簡単に受け止めてしまった。

そして翼はクロスさせたまま、体の向きだけアックスとジャスミンのいる向きへ方向転換。すぐにフェニックスの体を魔力のオーラが取り囲んだため、二人は身構えた。フェニックスはじつくりと時間をかけて魔力のオーラを溜めた後、クロスさせた翼を大きく振った。と同時に、ばつの形をした炎がアックスとジャスミンを襲った。二人は、はらわたを貫かれたような衝撃を受け、大きく後方まで飛ばされる。

そこでジャッキーは我に返った。今までフェニックスの戦いぶりに見とれていた。自分は何もせず、二人にはこんな傷を負わせてしまっていたのか。ジャッキーは後悔の念にかられた。

普通の人なら命を落としてしまうようなレベルの攻撃を受けても、まだ二人は立ち上がろうとしている。それを見て、ジャッキーは少し勇気をもらった気がした。

駆け出そうとしたその時、不意にジャッキーの脳裏にあの音が響く。

『あなたが死んでしまったら、この世界は終わりよ』

そう。あの高い声だ。

『ここで戦うの？ この二人でさえ、フェニックスにはかすり傷一つも与えられないのよ？ あなたが戦ってもここで命を落とすよ。うなことがあったら、たとえあの二人が生き残ったとしても世界は終わりよ？』

甘く優しい声なのに、言っている一言一言がすべて心に突き刺さる。

『力量差は明らかだわ。自分がここで戦うよりも、ここは二人に任

せて、ドラゴンのしずくを探しに出たほうが賢明なんじゃないかしら。ほら、黒雲もまた出てきてるみたいだし」

その言葉通りだった。上空の黒雲は先ほどよりも厚みを増し、今にもこちらに降りかかってきそうだ。黒雲はジャッキーの心に恐怖心を植え付けてしまい、ジャッキーはしばらく動けなかった。

派手な爆発音が聞こえ、あわててジャッキーはフェニックスたちに目を戻す。見ると、また二人がフェニックスの衝撃波を受けて飛ばされているところだった。手足をじたばたさせながら宙を舞う二人。

立ち上がるうとするアックスは変にひねったのか足を引きずっているし、ジャスミンは額から血の筋を流していた。このままだと本当にまずい。

『ここにおいても二人が倒されるのはもう時間の問題。決断は早くした方がいいわね』

またアックスとジャスミンが転がる。もう二人ともぼろぼろで、肩を息をしているところを見るともうすでに限界を超えていた。

「現に僕が世界を救えたとしても、二人が死んでしまっただけは悲しみが残る。どんな形であろうと、最後は三人で終わらせたいんだ。だから、僕は二人に代わって戦う」

天の声は『そう……』と一言残したまま、もう聞こえなくなった。そして二人に後ろから呼びかけた。

「アックスさん。ジャスミン。もう下がって、僕が戦うから」

二人はしゃべる気力すら削り取られたのか、無言のままうなずき素直に後退した。

「さあフェニックス……僕の挑戦を受けてくれ」

ジャッキーはそう言いながら、一步一步着実に踏みしめながらフェニックスに近づいた。

第四十七章 黄金の炎

「渦潮！」

ジャツキーの杖先から、巨大な水のかたまりが出てきたかと思うと、すぐに渦を巻き始める。それはまるで、すさまじい風圧を誇る巨大な竜巻を彷彿とさせるものだった。しかしその渦潮の勢いを見ても、フェニックスは全く動じることなく、静かにこちらを見つめているだけだ。その表情には王者の風格が漂っていた。

ジャツキーは杖を思い切り振り下ろすように動かす。渦潮の勢いは衰えぬまま、フェニックスに立ち向かっていた。対するフェニックスは大きく羽ばたく。すると、黄金の炎が現れた。金貨の山のような輝きに、ジャツキーは思わず目を覆ってしまった。しかし、ジャツキーは心の中でガッツポーズを作っていた。

炎は水に弱い。しかも魔法の範囲も同じくらいだし、黄金の炎では受け止めきれないだろう！

爆発音とともにジャツキーはふたたびフェニックスのほうを向いた。フェニックスの前には、あの炎が盾のように立ちふさがっており、渦潮の気配は全くない。魔力の差が違いすぎたのである。

「う、？」

ジャツキーだけではない。後ろで休んでいるアックスとジャスミンも、驚きを隠せないようだった。

しかしジャツキーはすぐさま追撃に移る。今度は光弾を連続で放ってみた。が、今度は黄金の炎を翼にまとい、フェニックスは野球選手のように光弾を打ち返してしまった。打ち返された光弾たちは空中で踊り、様々な方向に分かれて飛んで行った。ジャツキーは自分のほうに飛んできた光をかわそうとして、バランスを崩し尻もちをついてしまう。幸い直接ジャツキーのところには届かなかったが、辺りには、フェニックスが翼を振るった影響で砂埃が立ち込めていた。ジャツキーは、フェニックスが隙をついて攻撃してくると思

い、立ち上がる前に杖を突き出していた。その手が震える。緊張と焦り、興奮や恐怖が入り混じり、複雑な感情を作り上げている。

砂埃が晴れる。フェニックスはついに攻撃してこなかった。攻撃できるチャンスは余るほどあったのに、なぜだ……？ ジャッキーの心の中が、疑問符で埋め尽くされる。戦闘に集中するために、ジャッキーは意味もなく頭を振った。

向こうがこちらにチャンスをくれたのなら、それを存分に生かすべきだ。ジャッキーは再び立ち上がり、とっておきの技を使った。

「エメラルド・クラッシュ！」

萌黄色の輝く神々しい光とともに、衝撃波があちこちに散らばる。フェニックスの下の地面は割れ、そこからも閃光が噴水のように吹き出した。いくらフェニックスとて、この光のすべてを防ぎ、あるいはかわすこともできない。ジャッキーはそう確信していた。

しかし、フェニックスはその直前、空中に黄金の炎のかたまりを作り、それを地面にたたきつける。吹き出したはずの閃光は、フェニックス本体に届く前に炎によって遮られた。また、たたきつけられて散らばった黄金の火の粉たちは、エメラルドの衝撃波すべてを相殺してしまった。またしても、フェニックスの巧みな防御にしてみやられた。

ジャッキーは攻撃を続ける気力をすっかり無くしてしまい、一回空を仰いだ。黒雲が蛇のようにとぐるを巻き、ジャッキーとフェニックスの戦いをゆったりと見物しているようにも見える。

突然、黒雲が動き出した。……いや、正確に言えば、こちらに突っ込んできた。とても小さな雲の一部だったが、そのスピードはさまざま、隕石が墜落するときのようだった。案の定、山頂をめがけて進んでくる。

次の瞬間、爆風と轟音が混ざって山頂は一気に騒がしくなった。

黒雲はフェニックスを取り囲み、炎が燃え盛っていた体はたちまち黒くなった。まるで赤い絵の具で鮮やかに絵が描かれていたキャン

バスに、黒い絵の具をこぼしてしまったかのように。

それを見て、ジャッキーはアルミスのことを思い出した。今のフェニックスと同じように黒雲にやられ、それっきりだった。今頃、アルミスはどうしているんだろう？

そう考えると、フェニックスがどうしてもかわいそうに思えてくる。

永遠のように感じてしまうほど沈黙が続き、ようやく黒い魔物に侵され、悶えていたフェニックスが翼を開き、変わり果てた体をあらわにした。鮮やかに明るく輝いていた炎は、黒く不気味に、お化けのようにのたうち回りながらフェニックスの体を覆っていた。そのせいで体全体が黒く見えるのだが、目だけは血のように真っ赤になっていて、それがより一層不気味に見える。先ほどまでは静かにこちらを見つめていた瞳は、一瞬にして邪悪で憎悪に満ちたまなざしになってしまった。

ジャッキーは、それを見て妖怪に取り付かれたような気分になった。体中から血の気が失せ、顔は青ざめていく。体が氷のように冷たくなり、それと引き換えに自分を支える力がどんどん抜けていった。そしてついに倒れた。

「ジャッキー！ 危ない！」

ジャスミンの悲鳴で、ジャッキーは我に返った。だがもう遅い。フェニックスが放った黒い炎は、今にもブラックホールのようにジャッキーを飲み込みそうなところまで迫っていた。

第四十八章 あの手をもう一度

同時にジャッキーは、後ろから自分に恐怖が覆いかぶさってきている気がした。前から迫っている黒い炎からはそれほど脅威を感じなかった。前の威圧感よりも、後ろの背筋が凍りつくような感覚のほうが嫌なのだ。

一秒が一分に感じられる。まるでこここの時間だけがスローモーションになっていようだ。炎はもったいぶって、なかなかジャッキーを飲み込まない。炎が、恐怖に襲われているジャッキーの姿を見て楽しんでいのだらうか。

ジャスミンの悲痛な叫び声と、炎が吠える声と、闇のフェニックスが鳴く声が混じって、見事なオーケストラを生み出している。死ぬ間際だからこそ、感覚が研ぎ澄まされているのかもしれない。

ふと、ジャッキーは思い出した。ジャッキー達が、初めてBlackの幹部クラスの魔導師と対峙した時のことを。

あの時、やはり水龍の雷撃はジャッキーを飲み込む直前にまで迫っていた。

切羽詰まった状況で生み出した、普段のジャッキーからは想像もつかないほどずるがしこい策略が見事に破られ、絶望と恐怖の崖っぷちに立たされたジャッキー。それでも、一角獣の杖とジャッキーが、力をためていたウイングに反応し、水流を迎え撃った。

水龍が放った、銀河中の星をすべて集めても足りないくらいの輝きを誇る雷撃を、倍返しにしたのだ。一角獣の力が、魔法を吸い取った。

死が目前に迫っているジャッキーの思考回路の中で、ある考えが生まれた。

もし、あの時の力をよみがえらせることができれば……。

しかしその考えは、あまりにも確証がなく無謀すぎた。辺り一面を夜のような闇が覆い尽くし、すでにアックスもジャスマンも、フエニックスさえ視界に入らない。ジャッキーは、すでに炎に食われたのだ。こんな状況で魔力をためたウイングを探そうにも、もう遅い。

ジャッキーの脳裏からは、もう絶望の二文字も消えていた。感覚も、思考も……すべてが消えた。覚悟はしていた。辛くも痛くもかゆくもない。

そう。ジャッキーの、今にも消えそうだった弱々しい命のあかりは、ついに消え失せた。そして世界は。

ジャッキーの眼前に、突然一筋の青い光が差し込んだ。幻覚か、とも思ったが、死んでいる自分に思考回路なんてないはずだ。その感覚と、思考回路があるということは……。

『そう。あなたは生きていますよ』

もう何度も聞いている、あのきれいな高い声だ。だが、前よりもはつきりと聞こえた。まるでジャッキーの目の前でしゃべっているかのようだ。

「あなたはどこにいますか？ 僕の近くにいるのは分かっています。出てきてください！」

『もう出ているじゃない。とつくのとうに、私はあなたのそばに現れているよ』

その言葉が終わらないうちに、一筋の光は強くなって、闇に打ち勝ちジャッキーを照らし出した。

気が付くと、ジャッキーの体は竜巻に巻き込まれたような衝撃に襲われていた。

そして頭上には体を青く光らせたウイング、目の前には怒り狂っ

て暴走している黒い炎があった。

青く輝く一角獣の杖と、黒いのに嫌な光沢を放つ炎。この両者のぶつかり合いだ。もちろん、力を抜けば一気に楽になれる。だが、死ぬはずだった自分は、なぜか生き残ったのだ。せつかくのチャンス上台無しにするのも惜しい。

ジャッキーは、衝撃から生まれた突風にあおられながらも、自身を奮い立たせていた。

我慢だ。今はただひたすら、我慢するしかない。

しかし闇のフェニックスの魔力はそこまで甘くなかった。不意にジャッキーにも限界が訪れる。身体中の力が空に消えていくような感覚を覚え、ジャッキーの体がよろめいた。

「ジャッキイイイイイッ！」

ジャスミンの叫び声が、ジャッキーを後ろから支え、押す。

同時に、ジャッキーの一角獣の杖を持つ右手が、青い輝きを放った。それはまるで、ジャッキーと杖とウイングが一体となったような、炎をはね返す鎧のようだった。

ジャッキーは、強く踏み込むと同時に光る右手を目いっぱい突き出した。闇が、自らを生み出した“主”のもとへ、逃げ帰っていく。ジャッキーとウイング。ジャッキーとジャスミン。それらが生み出した絆が勇気を呼び、目の前の邪悪を打ち破った結果だった。

第四十八章 あのををもう一度（後書き）

短いすね。

第四十九章 それぞれの道

フェニックスは墨で塗りつぶされたかのように真っ黒になり、赤い瞳孔を見開きながら悶える。フェニックス自身に取り込まれた強大な魔力と、闇の炎が激しくぶつかり合い、黒い衝撃波の点々が広がっていく。

自分が繰り出した魔法に対して激しく抵抗していたフェニックスは、やがて力尽きて暴れるのをやめた。体中の闇は洗い流されたように無くなり、もとに戻った。しかし体を包んでいた炎の鎧は消え、弱々しい体をあらわにしている。瞳は、悲しそうな表情だった。

そして空間を切り裂くような縦に長い光が現れ、地面を激しく揺らす。疲れ果てた三人とウイングは、右に左に揺られ、座り込んでしまった。

フェニックスはそれに引き込まれ、やがていなくなった。特別苦しそうな表情も見せず、痛そうなおぶりもしていなかったが、ジャッキーはそれを見て、なぜか心が縛り上げられるような悲鳴を上げた。

「勝ったのか……俺達」

アックスも啞然とした表情を隠せない。しかしフェニックスは光に吸い込まれ、跡形もなく消えてしまった。それはつまり、ジャッキーたちの勝利を表していることになる。

ジャッキーは、自分が本当にフェニックスに勝ったのかという真偽より、闘いの最中に起こった別の疑問を気にしていた。

「アックスさん、ジャスミン。僕……死にましたよね？　なのに、再び山頂に姿を現して、フェニックスと戦った。そして今もこうして生きている。あの時、何が起こったんでしょう？」

自分は本当に、今も生きていていいのだろうか。自分は死ぬべきだったのだろうか。

「それが、俺にもよくわからん。黒い炎が大きすぎてよくわからん

かったが……お前がそれにのまれたのは確認できた。それは間違いない」

「そこからのことは、残念ながら私たちにもよくわからないわ。光が現れて……気が付いたら、ジャッキーが杖を向けて炎と戦ってた」旅を重ねてきたことで、推理力も鍛えられたのかもしれない。ジャッキーは大体の予想がついた。

おそらく二人の話と、自分の記憶によると、自分は炎にのまれたあと、いや正確にはのまれると同時にウイングが光を放って、不思議な力で自分を守ってくれた。その時に放った光がアックスとジャスミンの視界をふさいだ。

そしてあの時視界が真つ暗闇になったのは、自らの恐怖が視界までを狂わせていたからだ。

もちろん本当のことはだれにもわからない。これはあくまでジャッキーの予想だったが、ジャッキーはなぜかこの予想が当たっているような気がして、^{トルス}真実魔法を使わなかった。アックスもまだ動揺しているのか、真実魔法を使う気配はなかった。

ようやく安堵の雰囲気か漂ってきたさなか、またジャッキーの一角獣の杖が光を放ち始めた。

また新しい魔法が発動するのか、とも思ったが、ウイングはいつも通りぼけつとしていて。となると違うのか。

光はだんだんと輝きを増し、金属音のような高く鋭い音とともに一気に辺りを埋め尽くした。すぐに消えてしまったが、そこには魔物が口を開けたような穴が開いた。そこにウイングが、獲物でも見つけたのか一目散に駆け込んでいく。今の火山の頂上に、ウイングがいた痕跡は跡形もなくなってしまった。消しゴムで消し去られてしまったかのように。

「ウイング！」

あわててジャッキーは追おうとしたが、同時に上空から聞こえたジェット機が発進するような音がしてそちらの方に向いてしまった。見ると、先ほどまで王者の貫録を漂わせながらたたずんでいた黒雲が、本物のジェット機のような勢いとスピードで、目的地に向かって一直線に飛んでいくところだった。

「ああ……黒雲が」

ジャッキーが悲痛そうな声を上げる。

「皇都の方向だ。あの黒雲、間違えなく皇都に向かってる」

アックスはそう言った後、口を真一文字に結んだ。

一方、勇者としての自覚と危機感で、今にも駆け出していきそうな勢いのジャッキー。それをアックスとジャスミンがなだめる。

「ジャッキー、お前はウイングを追え。黒雲は俺達が何とかする」

「でも……」

「一角獣の杖が切り開いた道よ？ あなたが行かなくてどうするの？ ……それに、こっちはきつと勇者が何とかしてくれるわよ」

自分が勇者なのに。

その言葉を、必死に自分の体の中にとどめる。

「分かりました。行ってきます！」

ジャッキーは、幻想世界を頼れる仲間二人に任せ、穴をくぐった。

第五十章 破滅の塔

突然上空に広がった漆黒の闇に、動揺を隠せない民衆。先ほどまで青空が広がっていたというのに、突然夜のようになってしまったのだから無理もないが。

少年は皇都を象徴するオパール宮殿の、屋根の上に立っていた。しかし上空の黒雲と同じ色のマントに身を包んでいるため、誰も気づかない。フードからは薄い赤色の髪が少し覗いていて、身を震え上がらせる冷たさの風がそれをたなびかせる。

風に流されて自分のほうに向かってきた葉を右手でつかみ、口に当てて小さく草笛を吹く。流れるような美しいメロディだったが、これはある意味で“破滅を呼ぶ音”になるのかもしれない。葉を投げ捨て、少年は猫のような意地悪い目を光らせた。

ジャッキーは、悲鳴か叫び声がよくわからないような声を上げながら転がった。

目を開けると、そこでは辺り一面の緑のカーペット達が、風に吹かれて体を左右に揺らしていた。目前には、灰色の塔が今にも崩れ落ちそうなバランスを取りながら立っている。

「こ、ここは……」

ジャッキーは反射的に立ち上がり、辺りを見回した。……塔がある以外は、遙かな地平線が広がるだけ。きっとこのまま無意識に歩いたとしても、永久に何もなйдらう。幻想世界以外の、別の空間に飛ばされてしまった。

そしてジャッキーはもう一つ異変に気付いた。ウイングがいないのだ。真っ先にあの穴に飛び込んだのに、すでにどこかに行ってしまったのだろうか。

考えていても仕方がない。ジャッキーは塔をのぼることにした。入り口　というより大きな穴をくぐり、すぐに階段を見つけた。早速一步を踏み出すが、今にも崩れ落ちそうだ。高い音が長く広がる。まるで塔が悲鳴を上げているかのように。

こんな階段をのぼって行ったら、命が何個あっても足りない。ジャッキーの顔が険しくなり、額の冷や汗が階段にこぼれ落ちた。

とにかく、ゆっくりでも慎重にのぼって行くしかない。ジャッキーは集中力に押し潰されそうになりながら、ようやく頂上まであと少しのところまで到達した。

ここまで狭い階段が続いていたが、ここに来てようやく広い部屋のようなところに出た。不意に金属音が聞こえ、ジャッキーはそちらを向く。見ると、そこには何度か会った闇兵が、ジャッキーに剣を構えているところだった。

一体だけだったが、身長がジャッキーを若干上回り、体の力強さとしなやかさ、剣の長さも格段に今までと違う。

ジャッキーは水剣を構え、早くも走り出した。スピードではいささかこちらのほうが上だ。素早く相手の懐に潜り込み、首筋を狙って一気に剣を突き出す。

しかし闇兵は、剣を折りたたむようにしてそれを受け止めた。至近距離で、闇兵の悪魔のような眼を見てしまったジャッキーは、恐怖という別の敵に背後から襲われた。

闇兵はそれを見逃さず、強く踏み込んで剣撃を繰り返す。我に返ったジャッキーは、ぎりぎりのところでそれを受け止めようとしたが　結局受け止めきれず、横に受け流すような形になった。闇兵の体が泳ぐ。今度はジャッキーが、鎧の薄いところを狙って剣を薙ぐ。とつさのことだったので、闇兵はまだ剣を持ち上げてすらいな

い。
ただ、ここであきらめる闇兵ではない。絞られる雑巾のように体をくねらせ、後ろ回し蹴りを繰り返した。攻撃の途中だったが、や

むを得ずジャツキーは後方へ跳躍する。ジャツキーが空中にいる間に、闇兵は体勢を立て直してこちらに向かってきた。さすがは戦いのプロである。

「エメラルド・クラッシュ！」

ジャツキーの思うつぼだった。宝石のような光が闇兵に降り注いでいき、鎧の黒が光に包まれて明るくなる。だが、その光はすぐに黒い夜の闇の色になってしまった。闇兵が、巨大な魔球であるエメラルド・クラッシュを、はね返そうとしているのだ。

「ユニコーン・シールド！」

その声が終わると同時に、魔球はこちらに向かってきた。コウモリの大群のように魔力がうごめいている。ジャツキーが力を込める前に、爆風がこちらを襲ってきた。ジャツキーは塵も同然だというように吹き飛ばされ、塔の外に投げ出された。と同時に、思考も飛んだ。

世界の時が止まったかのような感覚だ。そして次の瞬間、自分の運命を悟った。

自分は、ここから落ちて死ぬんだ。

目を閉じた。この感覚には慣れていない。そして今は仲間がいないため、自分の命は救われることはない。体中をマッサージされているかのような快楽だった。とその時。

雄叫びが聞こえた。

そして大空を悠然と走るウイングが、自分を背中に乗せた。今までどこに行っていたんだろう？ それは永久の謎に包まれることになった。

ウイングは、一目散に頂上目指して駆け上がる。

第五十一章 世界の王、キング

ウイングの背中に揺られながら、ジャッキーは異世界の空を仰ぎ見た。

黒雲 は広がっていないが、ところどころに灰色の点々がまき散らされており、晴れてはいるのだが気持ち盛り上げるような雰囲気は出ていなかった。もちろん雲のバツクには水色が広がっている。しかし手前の雲に掻き消されて、夜の闇のように見えた。

そんなことを気にしているうちに、あっという間に頂上についでしまったが、先ほどの大広間とさして変わっていない。周囲にひびが入り、塔を形成していたはずの破片が、戦場の死体のように悲惨にも転がっている。鉄柱は槍のような先端が天のほうを向き、ところどころが破れた服のようにさびていた。

何故だろう。無意識に、喉元に熱いものがこみ上げてくる。ジャッキーの目の奥が、少し光った。

冷たい空気を胸いっぱい吸い込み、気を取り直して頂上に降り立つ。前を向くと、黒マントと真っ白な手袋を身に着けた金髪の男を見つけた。

後ろに目がついているのか、感覚が研ぎ澄まされているのか。その男はジャッキーが降りたつ前にこちらを向いていた。

「少年よ、よくここまで来てくれた。俺が誰だかわかるか？」

「……おおよその予想はついている」

冷たい風がジャッキーに当たり、声と体を震え上がらせる。

「あなたは、Blackのリーダーでしょう？」

「一応ね」

黒マントに、思わず王様気分で話しているのかと疑ってしまう尊大な口調。Blackのメンバーであることは間違いない。

「ではもう一つ質問をさせてもらおう。ここがどこだかわかるか？」

「え？ 異世界、でしょ……」

Blackのリーダーは苦笑を浮かべた。先ほど「一応」と言ったことといい、今苦笑したことといい、わけがわからない。

「そうだな。間違っではない。……この塔の名前は、『破滅の塔』。混沌の時期にだけ現れる。のぼれるのは、それなりの魔力を持った杖の保持者だけだ」

また強く冷たい風が吹いた。木枯らしのように高く長い音が、風に流されていく。ウイングのたてがみが跳ねて、その一本一本がきちんと整列しているようだ。

「おっと、申し遅れた。俺の名はキング。創生の杖を持っている」
ジャッキーは、キングが見せびらかすように振った創生の杖に注目していた。しなやかなその体からは、あふれんばかりの魔力を感じる。一角獣の杖が、警戒して震えているようだ。

そして今気づいた。キングの後ろに、観覧車のようにゆっくりと回転しながら光を放つ魔法陣があるのだ。

「この魔法陣に魔力を注ぎ、“お祈り”をすれば何でも願いをかなえられる。一つだけだ。だが、同時に幻想世界に災いが降りかかるのだ」

「あなたの望みは……なんだ？」

ジャッキーは震える声で尋ねる。寒いわけではない。このキングという男から、恐怖を感じるのだ。

今までジャッキーは何度も窮地を迎えてきた。そのたびに、仲間や、一角獣の杖に助けられた。そしてここにも、杖とウイングがいる。恐れるものは何もないはずだった。しかし……。

何となく、自分の目の前にいる人物が、自分の死にかかわってくるような気がした。

「決まっているじゃないか。俺は俺のすべての望みがかなうようにする。世界の王になるのさ！」

高らかに笑うキング。ジャッキーは呆れた。「一つだけ、何でも願いをかなえられる」と言われて、「すべての願いがかなうようにする」と答えるなんて、ずるい。

一つは全部。全部は一つ。つまりこういうことだろう。

「それでいいのか？ 自分の望みは全てかなっても、幻想世界には悪影響が及ぶのに？」

ジャッキーは鋭く迫る。

「心配ご無用。願いがすべて叶うなら、『幻想世界の悪影響を止めてくれ』と願ってもいいのだぞ？」

「それでも！ 幻想世界の悪影響を止めるのなら、お前の願いだって、幻想世界に悪影響を及ぼすものじゃ？」

ジャッキーは泣きそうな声で叫ぶ。ジェットコースターで絶叫しているかのように、顔がゆがむ。

そして現実を、自分の目の前で起こっていることをすべて否定しなくなった。一瞬、夢かとも疑った。

「ええい。何度言っても聞かないガキだな。本当に俺の願いを邪魔するのなら、全力で相手してやろうー！」

先に杖を持ち上げたのはキングだった。少し遅れて、ジャッキーも杖をキングのほうに向ける。

第五十二章 影ジャッキー

「鉄槍！」

キングは高々と叫ぶ。

と同時に、キングの杖先から、槍が飛び出す。体を銀色に光らせ、妙な光沢を生み出している。先は鋭くとがっており貫かれたら最期、即死だろう。

「ユニコーン・シールド！」

負けじとジャッキーもシールドを張った。青い光がパラシュートのようにあたり一面に広がり、猛スピードでこちらに向かってくる暴走列車を迎え撃とうとしている。

一角獣を前にしても槍はブレーキをかけず、むしろ加速しているようだ。そしてついに、その鋭い先端が一角獣のシールドにぶち当たる。ジャッキーの両手に、殴られたような衝撃が走った。杖自体は軽いのに、今はおもいをつけられているかのように持つのが困難だった。

鉄の槍が今度はドリルのように回転を始め、シールドを貫くのにより一層の力を込めた。キングの口元には、すでに笑みが浮かんでいる。それもそのはず、青い光はだんだんと削り取られて、薄い一枚の皮も同然な状態になってしまったのだから。

絶体絶命の状況。ジャッキーは杖を支えるのに必死で、そのことを悟ることすらできなかった。

いきなりウイングが駆け出す。案の定、体に青い鎧をまとっている。

そして無謀にも、回転し続ける鋭利な先端に体当たりを喰らわせた。

「ウイング！」

「馬鹿な。いくら魔力をまとった幻獣とはいえ、鋭い槍は破壊できない」

キングの声は勝ち誇っている。杖を持っていない左手を腰に当て、余裕のようだ。

ウイングの顔が、風圧とドリルによって一瞬ゆがむ。青い光に紅の点々が飛び散り、お互いを引き立てあっていた。ドリルの高い金属音がウイングの悲鳴に聞こえ、ジャッキーの心を砕く。

しかし次の瞬間　鈍い音を立てながら鋭利ながらも細く弱々しい槍の先端は、どこかに飛んで行ってしまった。胴体と頭が分断された鉄は、実に不格好なままその場にしばらくたたずんでいた。ジャッキーは思わず笑ってしまう。

ウイングの傷も浅く、ウイング自身もあまり気にしていないようだった。

「そんな馬鹿な……私の鉄槍が、破られただと……？」

キングは明らかに動揺している。余裕が根元からへし折られ、相当なショックを受けているに違いない。ここがチャンスだと思ったジャッキーは、すぐに杖を突きだした。

「渦潮！」

ジャッキーの杖からこれでもかと言わんばかりの水が吹き出した。それらは微妙なバランスを保ちながら回転を始める。先ほどのドリルより威圧感を放っていた。それもそのはず、大きさが違いすぎる。ジャッキーは渦潮に大きな期待を込め、送り出すように杖を振る。渦潮は勢いを落とさぬまま、キングに襲いかかった。しかしキングにぶつかると直前に、青空のように鮮やかだった体を真黒く染められ、消えてしまった。まるで清水に墨を入れるように。

キングが巨大な闇の球を打ち出し、それを盾代わりにして渦潮を受け止めてしまったのだ。

「エメラルド・クラッシュ！」

間髪入れず追撃に入る。ジャッキーが旅を通して学んだ戦闘知識が、勝手にジャッキーの体を動かしたのだ。ちりばめられた小さい宝石のような光が、束になってキングに立ち向かっていく。

場所が崩れ落ちそうな塔だということが幸いしたのか、キングの足元はいつもより簡単に崩れ落ちてくれた。飛び跳ねて衝撃波をかわしきつたキングだが、着地場所がない。

「く、ちくしょうッ！」

現実を、自分の運命を否定するためか。自分自身をどうにかしようとするためか。キングは空中で派手に唾を飛ばしながら叫ぶ。死ぬ間際とは思えないほど、猛獣のように威勢のいい声で、ジャッキー自身驚いてしまった。

しかし、キングはがれきの餌食になる直前に崩れた塔に魔法をかけ、鉄の足場を作ってしまった。そこに難なく着地する。コンサートのステージに立つ男のように、着地の時にポーズをとった。

ふと、キングは冷たい何かを感じた。わきを見ると、ジャッキーが水剣をキングの首元に突き付けていた。

「……終わりだ」

ジャッキーの顔と声は冷静さながらだったが、やはり勝利を間近に控えた興奮は抑えきれないようだった。

突然、キングが高らかな笑い声をあげ始めた。

死が目前に迫っているというのに、こいつはなぜ笑う……？
そしてジャッキーは足元が熱せられたような感覚を覚え、思わずキングの近くから飛びのいてしまった。そこには黒い魔法陣。

魔法陣から発せられた光がキングを包む。キングは闇の向こうに見えなくなってしまった。しかし闇を通して、キングが笑っているのを感じ取れる。

ようやくその笑い声と光が止んだ時、ジャッキーとウイングは驚愕の表情を浮かべた。

先ほどまでキングが立っていた場所には、なんとジャッキーが立っていたのだ。

着ているローブも、一角獣の杖も瓜二つ。身長はおそらくミリ単位の誤差もないだろう。手足の長さ、髪の色やその一本一本も、本

物と寸分の狂いもない。ただ一つ本物と違うのは、目の色だ。ジャッキーは優しく大きな瞳だが、今現れたジャッキーの目は、目全体が闇のように黒く染められており、白目も感じ取れない。邪悪な雰囲気を感じ放っていた。

「嘘………僕？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7331u/>

Unicorn 幻想の旅

2012年1月6日16時45分発行